

平成 28 年度生涯学習施設実習・研究活動報告

地域に根差した学びと地域づくり

—新たな参加・実践の在り方を考える—



平成 29 年 3 月

大正大学社会教育主事課程

目次

はじめに・・・5

I 実習報告

1. 北海道黒松内町 高橋咲紀（歴史学科3年）・・・13

大自然の中で地域との学びを結ぶ勇者たち－北海道・黒松内ぶなの森自然学校でのスタッフとの出会いと経験から－

2. 東京都豊島区、埼玉県東松山市・熊谷市 鶴岡果穂（臨床心理学科4年）・・・27

地方も！都市も！すべてをつなぐ自然体験－親子のズレに着目して－
みらい館大明・NPO 法人としま NPO 推進協議会実習報告

3. 東京都豊島区 眞野聡美（歴史学科3年）・・・39

地域を学んで内外にコミュニティを広げる－豊島区地域エリアガイドボランティア事業－

4. 長野県小布施町 藤井祐里（文学部3年）・・・49

人と人をつなぐ「おぶせまちじゅう図書館」のまちづくり－本・学習施設・商店のネットワークによる地域活性化の試み－

5. 滋賀県近江八幡市 戸澤奈未（人間科学科4年）・・・63

おやじ達の背中から学んだコミュニティづくり－退職男性グループ「おやじ連」の活動から－

II 研究報告

1. 新潟県粟島浦村 出川真也（地域創生学科専任講師） 他 学生7名・・・77

粟島しおかぜ地域共生プログラムの実践研究

高齢者のお手伝いプログラムを軸とした観光・産品開発・首都圏連携活動の創出

2. 新潟県阿賀町 出川真也（地域創生学科専任講師） 他教員・学生9名・・・103

地域青年会との協働による若者の山村－都市交流と新たな地場生業の創出

3. 埼玉県秩父市 出川真也（地域創生学科専任講師） 他 学生4名・・・113

「学び」で繋ぐ秩父－東京間荒川流域の連携プログラムの検討
自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性－秩父市大滝地区現地調査から－

おわりに・・・130

はじめにー地域に根差した学びと地域創生ー

地域創生学科 専任講師 出川真也

1. 地方創生時代の社会教育・生涯学習

地方創生という呼び声のもとで、「地域づくり」「地域に根差した学び」に対する関心が高まっています。こうした中で学校教育以外の教育・学習活動を示す「社会教育」において、これまでのとすると趣味・教養的な公民館講座のイメージからの脱却と転換が迫られているように感じられます。

90年代初頭、グローバル化の兆しと共に地域の市民活動が盛んになる中で、アメリカの成人教育学者 E.ハミルトンは地域に根差した成人の学びが、地域社会の発展（地域づくり）に大きな力をもたらすと述べるとともに、そのための具体的方法論を示しています¹。地方創生時代にある我が国もまた、これまで培われてきた社会教育の方法原理を踏まえながら、「地域づくり」というまさに政治・経済・社会的領域が絡む課題への実践的アプローチについて考えなければならない時期に来ているのではないのでしょうか。

本学においても、社会教育主事課程の目玉カリキュラムである「生涯学習施設実習」や、地域学習及び実践活動に取り組む中で、社会教育・生涯学習の新たな可能性と同時に、課題も浮上していることに気づかされます。この点について「サービ斯拉ーニング」から見た学生の学習者特性と、コーディネーター・ファシリテーターとしての社会教育者像の 2 つの面から触れてみたいと思います。

2. 「サービ斯拉ーニング」における学生の学習者特性と教員・大学の役割

大学教育にあって、学生たちの地域づくりにかかわる学びとはいかなる意義を持つものなのでしょうか。「サービ斯拉ーニング」という考え方では、地域に寄与することを通じて学ぶ、あるいは逆に、地域で学ぶことを通じて地域に寄与するということが掲げられています²。農山漁村で長年フィールドワークを行ってきた私自身の実体験からしてもこうした学びの状況はとても腑に落ちるものです。例えば里山の保全整備に関する知識や技術の学習活動を行うこと自体が、人手不足に悩む地域において貴重な労力の提供の意味があったり、あるいは地域存続のための技術継承の意味合いを持つ場面を多く目の当たりにしてき

¹ E.Hamilton (1992). *Adult Education for Community Development* 参照。第 1 章では地域づくりと成人教育に関する 10 の命題が掲げられており、本書全体を通じてそのそれぞれに対する具体的なメソッドを提示している。

² 一口にサービ斯拉ーニングといってサービスを重視するものからラーニングを重視するものまで複数の概念が存在しうる。藤村 2007 参照。

ました。中にはこうした学習活動を契機にして里山を活かした新たな観光メニュー開発につながるなど、まさに地域活性化への展開も見られます。

このような地域での学習活動が真に地域への貢献や発展に寄与する（つまり「サービス」）ためには、長期にわたる継続的な取り組みが求められますし、学習者側（つまり「ラーニング」）よりは地域側の都合（コミュニティ視点）に寄り添うことが求められる場面が出てきます。しかし学生は、その興味や関心を往々にして目まぐるしく変化させていくものですし、たいていの場合4年間で入れ替わっていきます。また、大学の制度的カリキュラムに所属している学生にとって、地域側の都合に合わせるということは、追加的な労力や負担を負うことでもあります³。

地域づくりと地域社会に根差した学びを進める以上、このような課題や負担は避けられないものですが、それは個々の学生では到底受け止めきれないものでもあります。これを受けするのはまさに教員や大学組織でなければならないといえるでしょう。この意味でも、特に地域貢献を掲げる大学においては、教員とそれを支える大学組織こそ、学生と地域住民双方を射程に入れながら、継続的かつ地域的視点を持って、社会教育・生涯学習を本務の一つとして取り組むべきであると言えます。

3. コーディネーター・ファシリテーターとしての社会教育者像が意味すること

近年、地域づくりと社会教育・生涯学習の関係がクローズアップされています。「地方創生」政策において、その推進役の一つとして地域住民の「自主的」な学びと実践に期待するところが大きいことが示唆されます。こうした中で、社会教育主事も新たな役割と機能が取り沙汰されるようになってきました。

ここ数年、社会教育行政の機能として「人づくり」「地域づくり」が強調されるようになってきました⁴。そして、今後の社会教育主事に求められる能力として、住民の学習活動を促進するとともに地域実践（ただしここに行政が掲げる地域課題（「必要課題」）に対応する実践、という含意が含まれているように思うのは私だけではないでしょう）へと効果的・効率的につなぐための、コーディネート能力やファシリテーション能力の重要性が強調されています。そこには地域づくりとそれを推進する人づくりに対して、支援という言葉は用いながらもより一層管理的な力を加えようとする政策的意図が見え隠れするように思われます。しかし学習論的観点から言えば、とりわけ地域における学習が必ずしも指導者（支

³ この点に関連して中里陽子・吉村裕子・津曲隆 2015 は、サービ斯拉ーニングのポジティブ効果とネガティブ効果について、学生、大学、地域の3視点から詳しく整理している。

⁴ 「平成 26・27・28 年度社会教育活動の実態に関する基本調査事業『社会教育主事の要請等のあり方に関する調査研究報告書～社会教育主事講習の見直し（案）について～』（文部科学省国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）を参照。

援者を含む)を必要とするものではないことに留意する必要があります⁵。まさに地域における学びは行政の思惑を超えた側面こそ大事なのです。そして「地域づくり」「人材育成」に対して積極的にその役割と機能を担うことを強調する以上、社会教育関係者もまた政治・経済・社会的に無垢で中立ではありえないことに自覚的でなければなりません⁶。今こそ社会教育法第九条の三「社会教育主事は、社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。ただし、命令及び監督をしてはならない。」を想起し、その本意をきちんと汲んでいくことが求められているのではないかと思います。これまで以上に住民の学習要求により形成された趣味・教養的分野の学習文化も大事にしながら、新たな地域の学習必要に対する住民の自主的学習活動に寄与していくものでなければなりません。

平成 28 年度の豊島区生涯学習推進協議会でも、新たな生涯学習センター機能の実現に絡んで、コーディネートやファシリテーション能力を持った人づくりについて議論されました。まとめられた意見書の中にある社会教育・生涯学習における人材育成の本質は「われづくり」であるという言葉は、たいへん重要な意味合いを持っているものと言えます⁷。

4. 「地域づくり」につながる参加実践型の学習研究をめざして

以上の動向を踏まえて、本学社会教育主事課程では、引き続き多様な地域における地域に根差した住民学習活動に目を向け続けます。そして自己の立位置と関わりを意識しながら地域の学習活動に新たな展開をもたらすための参加・実践型アプローチによる研究を深めていきます。中心的授業の一つである「生涯学習施設実習」においても、『施設』という言葉が、事業を実施するという意味でも用いられていた⁸ことに留意しつつ、単にはこの施設の運営方法を知るだけではなく、施設を拠点としながら学習・実践に取り組んでいる地域の生身の「人」と「活動」に沈潜し、学び、自己との関わりを考え、さらには寄与していくことを目指します。このような学習・研究の姿勢は、本課程の学生たちが中心となって取り組んでいる課外研究においてより一層大切なことであると考えます。

本報告書では、平成 28 年度、学生、教員、住民がともに取り組んできた成果をとりまとめました。先の見えにくい現代社会にあって、学習実践に取り組む関係者の今後の新たなチャレンジに微力を尽くすことができればと願っています。

⁵ 地域における参加実践的な学びは、教えるという営みなしでも行われる。Kathryn Church et.al 2008, p.23-24 参照。本書では、いわゆる Informal Education(無意図的な教育)が実際には人間生活の多くの時間を占めていることにも触れられている。

⁶ Ronald M. Cervero と Arthur L.Wilson(2001, p.276)は、成人教育実践の政治・権力的側面について分析する中で、成人教育者がもはや無垢な存在ではなく、知識と権力のブローカー的存在として浮上することを鋭く指摘する。地域社会の変革(そこには利害関係が絡む)において、誰のために、何のために、そしてどのように取り組むべきかと問いかけている。

⁷ 豊島区生涯学習推進協議会 2016 『つどう、つながる、つなげる、つくりだす』豊島区生涯学習センター機能の実現に向けての意見書 p.17-18 おわりを参照のこと。

⁸ 鈴木眞理他 2015 「社会教育の施設論」p. 20-21 参照。社会教育の空間的展開に触れる中で、社会教育施設の物的環境が持っている意味について触れている。

参考文献

豊島区生涯学習推進協議会 2016『『つどう、つながる、つなげる、つくりだす』豊島区生涯学習センター機能の実現に向けての意見書』

文部科学省国立政策研究所 社会教育実践研究センター「平成 26・27・28 年度社会教育の実態に関する基本調査事業 社会教育主事の要請等の在り方に関する調査研究報告書～社会教育主事講習の見直し（案）について～」

中里陽子・吉村裕子・津曲隆2015「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」（熊本県立大学総合管理学会「アドミニストレーション22（1）」）

鈴木眞理・井上伸良・大木真徳編著 2015「社会教育の施設論 - 社会教育の空間的展開を考える」学文社

藤村好美 2007「地域を変えるサービス・ラーニング」（日本社会教育学会年報編集委員会『NPO と社会教育』日本社会教育学会編）

E.ハミルトン著、田中雅文・笹井宏益・廣瀬隆人訳 2003「成人教育は社会を変える」玉川大学出版部

Edwin Hamilton(1992) *Adult Education for Community Development*, green wood press

Ronald M Cervero・Arthur L.Wilson and Associates(2001). *Power in Practice :Adult Education and the Struggle for Knowledge and Power in Society*. Jossey-Bass

Ortrun Zuber-Skerritt and Richard Teare(2013). *Lifelong Action Learning for Community Development: Learning and Development for a Better World*. Sense Publishers

<平成 28 年度 生涯学習施設実習及び関連研究活動の概要>

今年度は、生涯学習施設実習として、5 地域において実習活動を行った。また関連する課外研究活動を 3 地域において実施した。概要は以下のとおりである。



I. 実習報告

【実習報告 1 北海道黒松内町】

大自然の中で地域との学びを結ぶ**勇者**たち

—北海道・黒松内ぶなの森自然学校での**スタッフ**との出会いと経験から—

文学部歴史学科日本史コース3年 高橋咲紀



天然記念物に指定されているブナ林

【報告書概要】

体験学習の補助を通して、子どもたちに自然をわかりやすく伝えることの難しさと伝え方の工夫について知る事ができました。また、地域活動への参加から、地域住民との信頼関係の築き方、地域住民の繋がりの深さを知る事ができ、さらに、行事を続けていくには地域住民同士の信頼関係が大切であることがわかりました。そして、実習全体を通して、自然と触れあうことやコミュニケーションの場の大切さを学ぶことができました。

1、地域概況

今回、私が実習先として入らせていただいた地域は、北海道寿都郡黒松内町という所です。北海道の西方にある地域で、人口は2,983人、世帯数1,558世帯(9月末現在)が住んでいる町です。黒松内町には北限のブナの原生林があり、天然記念物に指定されています。

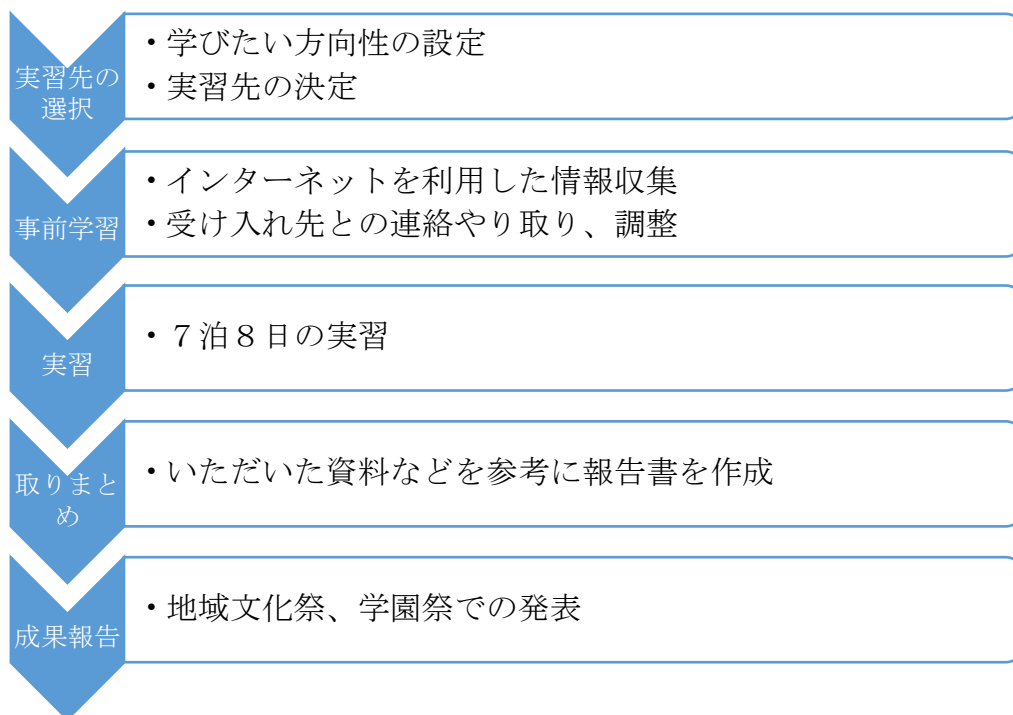


写真1 天然記念物であるブナ原生林の入り口

2、実習概要

7泊8日の日程で、黒松内ぶなの森自然学校にお世話になりました。子どもたちへの、自然体験を通した学校外での学びや教えるための手段、自然体験学習の重要性などを運営スタッフの立場から学ばせていただきました。

3、実習のプロセス



4、背景

私は以前から、学童期における学校教育以外での教育というものに興味がありました。そのなかでも、自然を利用した学習活動に非常に関心がありました。机の上で教科書を読み、先生の話聞くだけでは理解できないものでも、一歩外に出て、自分の目で見て、体験することによって本来教えようとしていたもの以上のものを、子どもたちは学ぶのではないかと考えていたからです。実際に、私は小学生の時に青少年自然の家に宿泊学習に行きました。私が通っていた小学校は、1年生から6年生の全児童が縦割り班となって体験学習を行っていました。当時は学んでいるという感覚はなく遊びに行っているという感覚でしたが、今思い返してみると、生活に必要な様々なことを学んだように思います。

このような点から、子どもたちを受け入れている運営スタッフ側がどのような動きをしているのかに関心を持つようになりました。子どもたちは楽しく遊んでいても、実は学びになっている。このようになるには、どのように運営をすればいいのか、7泊8日の実習によって学ぶことができ、貴重な経験となりました。

5、事前調査

実習に行くにあたって、インターネットを利用して『黒松内ぶなの森自然学校』（以下、自然学校）を調べました。この自然学校は、廃校となった旧作開小学校の校舎を利用して活動しています。大がかりな改装などはせず、そのままの形で利用しています。

ホームページを見てみると、子どもたちを対象にしたイベントがほぼ毎月行われていることがわかりました。ここであれば、私が学びたいことを存分に学ぶことができると非常に楽しみに became ました。

また、担当教員を通じ、自然学校の代表である高木さんともやりとりをさせていただきました。加えて、SNS などでも活動を報告しているとのことでしたので、こちらも拝見させていただきました。最近行ったイベントや地域の様子などが、わかりやすく書かれていたので、現地のイメージをよりはっきりさせることができました。

さらに調べてみると、自然学校では地域の人々との交流も大切にしている施設で、子どもたち以外の人々とのイベントなども行っているということもわかりました。このことから、施設スタッフとしての地域との関わり方も学んでいきたいと考えました。



写真2 自然学校の看板



写真3 旧作開小の正門跡

6、実習と実践内容

実習中は、自然学校のスタッフの方々についていきながら、仕事のお手伝いをしたり、聞き取り調査などを行いました。また、地元の方々とも話す機会があったので、様々な話を聞かせていただきました。日程と内容は以下の通りです。

- 1 日目：28 年 9 月 18 日(日) 現地入り・スタッフの方々と交流会
- 2 日目：28 年 9 月 19 日(月) 近隣地域にある NPO 団体訪問
- 3 日目：28 年 9 月 20 日(火) 小学生自然体験学習の補助①
- 4 日目：28 年 9 月 21 日(水) AM) 小学生自然体験学習の補助②
PM) 近隣地区お祭りの前夜祭補助
- 5 日目：28 年 9 月 22 日(木) 近隣地区お祭りの参加・補助
- 6 日目：28 年 9 月 23 日(金) 自然学校主催市場のチラシ配布
- 7 日目：28 年 9 月 24 日(土) 近隣地区市場への参加・補助
- 8 日目：28 年 9 月 25 日(日) AM) 自然学校主催市場の補助
PM) 帰宅

(1) 他 NPO 団体への訪問

実習初日は、黒松内町から車で 2 時間ほどの場所にある余市町を訪れました。ここには、自然学校代表の高木さんと共に NPO として活動していた女性が、新たに立ち上げた団体があり、エコビレッジの活動をされています。ちょうどこの日は、地区の方たちと感謝祭を行っていたので、見学・参加させていただきました。拠点としているログハウスは、地区の方々と一緒に作り上げたものだとおっしゃっていました。また、このような活動は、周りの人の助けがあってこそできるものだともおっしゃっていました。



写真 4 エコビレッジの拠点としているログハウス



写真 5 地球に優しい花壇

(2) 小学校自然体験学習-サポートを通して見えたスタッフのすごさー

私が実習に入っていた期間は、普段は夏季体験学習がもう終わってしまっている期間だったのですが、運のいいことに丁度小学校の体験学習が入っていたのです。元々、8月下旬の予定でしたが、台風の影響により延期したとのことでした。

1日目、午前の活動は天然記念物にも指定されているブナ林の散策でした。2班に分かれ、一列に並んでブナ林探検を行いました。私は後ろから付いて行って、スタッフの方々がどのような動きをしているのか見学させていただきました。まず、子どもたちに自己紹介をするのですが、スタッフの皆さんは子どもでも分かりやすい愛称の書かれた名札を身につけていました。スタッフの工夫が垣間見えた瞬間でした。

いよいよ、散策に出発します。1班に2名のスタッフが付き、子どもたちや引率の先生方を挟むように並んでいました。パネルや絵、実際の植物も利用しながら子どもたちに分かりやすく教えていました。先生方も感心しながら話を聞いていたところも印象に残りました。



写真 7,8 ブナ林探索の様子。子どもたちは興味津々で話を聞いている

午後からは、カヌー体験でした。実は児童と合流する前にスタッフの方々と、河川敷までカヌーを運びました。車の屋根に乗せて運ぶのですが、初めて担いだカヌーは想像以上に重く、普段運動をしない私にとっては非常に大変な作業でした。朱太川を日本海に向かって下って行っただけですが、まず初めに、スタッフからのレクチャーが入りました。レクチャーの内容としては、カヌーの漕ぎ方、川遊びの楽しいところなどでした。しかし、どうすると川に落ちてしまうか、川の中はどう浮かべばいいのか、川はみんなのものだから他の人に迷惑をかけないなど、注意しなければいけない点もきちんと説明されていました。川遊びの楽しさを教え伝えることはもちろんですが、それと同時に注意しなければいけないことも伝えなければなりません。だからと言って、子どもたちを怖がらせてはいけません。そのバランスをとることは非常に難しい事だと改めて感じました。スタッフの方々は、子どもたちの反応を見つつ、教えていました。



写真 9 カヌーを持ち上げる筆者(左)



写真 10 カヌーを車に縛る筆者(右)

夜は、2 班に分かれての野外炊飯でした。メニューはカレーです。調理器具や材料は事前にスタッフ側で用意をします。私も準備のお手伝いをさせていただきました。新聞紙は皿洗いの前に汚れを拭き取るもので、牛乳パックは包丁の鞘になります。

ここでは、スタッフは指示を出した後見守る立場になっていました。ブナ林、カヌーでは教える立場だったスタッフのみなさんでしたが、カレー作りは子どもたちが自分たちで考えて調理をしてもらおうと、あくまでスタッフは補助という形で入っていました。今まで行っていたブナ林探索や、カヌー体験などは危険も伴う活動です。しかし、料理は注意して行えば、そこまで危険な活動ではありません。子どもたちだけで行えそうな活動は積極的にさせて、スタッフは補助に回る。そうすることで、子どもたち同士で話をして、どうすれば美味しいカレーが作れるのか、分担はどうするのかということを自分たちで考えることができるのです。完成した後、私もカレーを食べさせてもらいました。子どもたちが一生懸命に作ってくれたカレーは本当においしかったです。



写真 11 食器拭きとなる新聞紙(左)と
牛乳パックの鞘(右)



写真 12 調理の様子

2 日目は化石掘り体験でした。河川敷には約 100 万年前の貝殻の化石がたくさん眠っているそうです。体験をする前に、100 万年前がどのくらい前なのかというレクチャーがありました。ここで驚いたことが、100 万年を 100m として子どもたちに説明していたことです。今回、参加していた子どもたちは 5 年生だったので、時間を距離に置き換えて説明をしても理解できる年齢です。このように、参加する人の年齢を考えて適宜説明方法を変えているのです。スタッフの皆さんは、この説明が適切かどうか前日まで話し合いを行っていました。



写真 13 河川敷にて化石採集



写真 14 実際に採集した貝殻の化石



写真 15 距離を利用して時間の概念を説明



写真 16 0m の地点には地球誕生の文字

自然学校の高木さんは、このような活動を通して、子どもたちの自然における視野を広げるお手伝いや、歴史などの時間的視野を広げるお手伝いをしているとおっしゃっていました。

(3) 白井川熱郷神社祭-お祭りに参加して感じた地域住民のつながりの深さー

自然学校がある作開地区の隣にある白井川地区のお祭りにも参加させていただきました。2日間に分かれており、1日目の夜は前夜祭(この地区では宵祭と呼ばれている)、2日目はお神輿を担いで、地区内を練り歩くというものでした。宵祭では地区の中学校の体育館を利用して縁日が行われました。白井川中学校は現在生徒が1人、先生が3人ということで、小学生の保護者の方や、OBの高校生、その保護者の方などが全員で協力して準備、運営をしていました。人数が少ないというのも理由としてあるのだと思いますが、先生方と保護者の方々がお互いに仲が良く、信頼しあいながら運営をしているなという印象を受けました。このようなことは、都市部では難しいのではないかなと感じました。



写真 17,18 中学校の体育館にて縁日の様子

縁日の後は、地区の集会所に移動して、おじいちゃん・おばあちゃんたちと合流です。ここでは、カラオケや演芸などが行われます。小中学生たちもよさこいソーランを披露し、大盛り上がりでした。

いよいよ、お祭り当日。メインの小中学生に加えて、OBの高校生たちも参加していました。一軒一軒回り、全ての家の玄関先で『わっしょい、わっしょい』と掛け声をかけいきます。私がこの地区特有のものだなと感じたことは、地区内にある複数の集会所で、必ず宵祭の際にも披露してよさこいソーランを踊ってから、中に入り飲食を行うという点でした。私も実際に子どもたちと一緒に踊らせてもらったのですが、非常に楽しく、最終的には踊りもほぼ覚えていました。屈伸運動が多かったせいか、後日筋肉痛に苦しむことになってしまいました。地区の方々はとても優しく話しかけてくれ、初めて参加した私のことも温かく受け入れてくださいました。また、お母さん方は、この地区は、地域の人々とのつながりを大事にしている、他の地域と比べてもとても濃いのではないかなと思うとおっしゃっていました。



写真 19 揃いの法被を着て集落を回る



写真 20 子どもたちは顔にペイントをしている



写真 21 ソーラン節を踊る子どもたち



写真 22 踊った後集会所にて休憩

(4) 地域への参入-自然学校と地域の人々との信頼関係-

自然学校では、毎月『元気いちば』という市場を開催しています。私は、チラシ配りのお手伝いをさせていただきました。作開地区にあるすべてのお宅を回って、チラシを手渡しするのです。顔を合わせてお話しすることは、とても大切なことだとスタッフの方に教えていただきました。

この地区は、おじいちゃんおばあちゃんの2人暮らし、1人暮らしが多い印象でした。家の中に上がらせていただき、たくさんお話もさせていただきました。1人のおじいちゃんは、ここの人たちは、昔、内地(本州)から来た人たちの子孫だから、言葉はわかるだろうとおっしゃっていました。確かに、方言はあるものの聞き取りづらいという印象はあまり受けませんでした。

たくさん住宅があったため、手分けして配布することが多かったのですが、私の顔を見て誰だろうという顔をしていた方でも、一言、自然学校の者ですとお伝えすると、すぐに受け入れてくださいました。これは、長い期間をかけて自然学校のスタッフの皆さんが、地域の人々との交流をしてきた証なのではないでしょうか。スタッフの方で北海道出身の

方はいらっしゃらないので、いわゆる『ヨソモノ』であることは確かです。しかし、たくさん交流をしてきたからこそこのように地域に受け入れられているのではないかと感じました。



写真 23 おばあちゃん(右)の畑でお話中のスタッフ(左) 写真 22 チラシ配りをしている筆者

(5) コミュニケーションの場があることの大切さ

実習中、2つの市場のお手伝いをさせていただきました。1つ目は、大成・豊幌地区という地域で行われている『みんなの市場』、2つ目は、自然学校が主催の『元気いちば』です。

『みんなの市場』では地区の50代から70代のお母さん方が中心となって、活動しているものです。廃校になった小学校の一部の敷地を利用して、家で栽培した野菜などを持ち寄り、それを格安で提供する言わば朝市のような取り組みを行っています。毎月第三土曜日に行われ、冬場は行っていません。印象的だったのは、おじいちゃんたちも家から出て、集まっていることでした。女性が中心となっている場には、出づらいのではないかなと思っていたのですが、おしゃべりをしたり、みんなで一緒にご飯を食べたりと楽しそうに参加していました。

『元気いちば』では、自然学校のスタッフが中心となって活動しています。自然学校の元々校庭だった場所にテントを4つほど建てて、そこで地域の方が持ち寄った物産や、フリーマーケットなどが行われます。さらに、おじいちゃん・おばあちゃんたちが集まっておしゃべりができるスペースも設けてあります。こちらも月に1度、第三日曜日に行われ、冬場は行われていません。参加してくださっている方々は『みんなの市場』に参加している方々よりも平均年齢は高いです。しかし、お元気な方ばかりでした。1人のおじいちゃんは、「みんないつもは家にいるばかりだから、こういうふうにみんな集まっておしゃべりができる場があることが本当にうれしい」と話してくださいました。

スタッフ側の意見としては、地域の人々のコミュニケーションの場になってくれていることはすごく嬉しい、欲を言えば、『みんなの市場』のように地域の人を中心となって活動できると良いとおっしゃっていました。

先ほども述べたように、この地域だけに関わらず、近隣の地域でも高齢者の1人・2人暮らしが増加しています。コーディネーターの立場としてコミュニケーションの場を設けることは、お年寄りにもっと元気になってもらうためにも、自分が地域に溶け込んでいくためにも、必要な事ではないかと強く感じました。



写真 24 『みんなの市場』にて朝市の様



写真 25 『元気いちば』のフリーマーケット



写真 26 元気いちばに参加していた地域の方々

7、考察と今後の課題

(1) 実習成果

この実習中、さまざまな経験をさせていただいたり、美しい景色を見ることができたり、幅広い年代の方とお話しする機会があったりと、たくさんの貴重な体験をすることができました。そこで、次のようなことがわかりました。

1) 自然体験学習で見えたスタッフのすごさ

子どもたちを相手に自然や歴史について教えることは非常に難しいことであるということに改めて感じました。しかし、スタッフの皆さんは分かりやすいパネルや絵、ときには実物を用いて説明をしていました。特に驚いたことは、時間の長さを距離に置き換えて説明していたことです。子どもたちの年齢に合わせた説明方法があるということがわかりました。このようなところから、ぶなの森自然学校のスタッフさんが取り入れていた学習形態としては、イベント型と社会貢献型を組み合わせただけだと考えられます。子どもたちは実際に外に出て体験することによって、現状を知ることができる。知ってもらだけでも、社会貢献につながるのではないのでしょうか。今回の実習で印象的だったのは、社会的必要から導き出される「必要課題」に依拠しながら、さまざまな活動が主体的に展開されている場面に立ち会うことができたことでした。

2) お祭りを通じて感じた地域住民同士のつながり

お話をさせていただいたお母さんもおっしゃっていましたが、確かに都市部よりも住民同士のつながりが非常に深いなと感じました。準備や運営などもとてもスムーズで、驚きました。伝統的な行事を続けていくには若い力も必要ですが、加えて地域住民同士のつながりも重要になってくると感じました。このような地域での活動は、社会教育つまりノンフォーマルエデュケーションに分類されると考えられます。しかし、私が参加させていただいたお祭りはその地域での独特な文化があったり、つながりの深い地域住民同士での活動であると強く感じたので、インフォーマルエデュケーションの一面もあるのではないかと感じました。

3) コミュニケーションの場の大切さ

2つの市場に参加させていただいて感じたことは、主体となっている人は異なるもののどちらも地域住民のコミュニケーションの場となっているということです。地域での行事も少なくなってしまう、なかなか外に出なくなってしまう高齢者の方々にとって大切な場であると感じました。喋るだけで元気になる、本当にありがたいといった声もたくさん聞くことができました¹。

以上のことから、ぶなの森自然学校のスタッフのみなさんは子どもたちに自然環境を通

¹ このような活動は、マクラスキーが提示している高齢者の学習ニーズの一つである表現的ニーズに分類されると考えられる。

して学びを提供する学習支援者として、加えて地域住民同士の交流の場を設け、住民同士をつなげるといったファシリテーターとして活動していると考えました。また、実習全体から感じたことは、地方地域に住んでいる人々のパワーは底知れないということです。自然学校のような施設で働くスタッフの仕事は、このパワーを持っている方々の力をどう発揮させてあげられるか、発揮する場が無くならないように手助けをすることなのだと思います。老若男女で持っている力は全く違います。その違う力同士をつなげ、さらに大きな力を引き出すことも大切な仕事なのです。

(2)残されている課題

現時点で、高齢者同士や40代から50代の方々同士をつなぐということは達成できていると考えます。今後、この地域をさらに盛り上げていくためには、30代以下の若い世代と40代以上のたくさんの知識を持っているの方々をつなげることが大切なのではないでしょうか。実際に作開地区には、若い世代の方が住んでいる家は何世帯かあります。しかし、『元氣いちば』のような活動にはあまり参加していないのが現状です。さまざまな事情で参加できないもいらっしゃると思いますが、若い世代というのは貴重な資源ではないでしょうか。私としては、若い世代に呼びかけるときには、高齢者の方々とは別の方法で行うことが重要だと考えています。例えば、SNSを活発に利用したり、地域の学校に協力していたり、宣伝をさせてもらったりなどです。

さらに、自分自身の課題としては積極的に輪に入っていくことができなかった点が挙げられます。みなさんと楽しくお話をさせていただきましたが、スタッフの方が話すきっかけを作ってくださったり、地域の方々が話しかけてくださったりと、少し頼ってしまう部分が多くなってしまいました。会話とは地域の方たちと仲良くなるための第1歩だと思うので、改善していきたいと強く感じました。

(3)都市との連携の可能性について

私は、都内や関東圏で希望者を募り、自然学校で宿泊体験学習プログラムやキャンププログラムに参加してもらうことができるのではないかと考えています。対象を小学4年生から中学3年生、その親などにすることによって、自然から学ぶという学校生活の中では学べない知識や知恵を学ぶことができるのではないのでしょうか。

対象を変えることによってさらにたくさんの連携の可能性が考えられます。子ども達や高齢者だけではなく、その間の世代の方々に興味を持っていただけるようになることを願います。

【参考文献】

- ・黒松内ぶなの森自然学校-黒松内を体感するプログラムのご案内-
- ・宿泊体験学習プログラムシート

【実習報告 2 埼玉県東松山市 熊谷市 東京都豊島区】

地方も！都市も！すべてをつなぐ自然体験

—親子のズレに着目して—

みらい館大明・NPO 法人としま NPO 推進協議会実習報告

大正大学臨床心理学科 4 年 鶴岡果穂



テーマ：体験学習、自然、都会、子ども、親子、市民活動

豊島区は言わずと知れた大都市であり、子ども達が広い空間で自然に触れ合う機会は少ないことは想像に難くない。しかし、「自然は最大の教師である。」と言われており、人は自然に対する驚きや感動を通して、知識や人間性が培われていくと考えられている。そこで私は、自然に触れ合う機会の少ない豊島区の子ども達が、どのように自然体験や環境活動について学び、自然に触れ合っていくのか等を、子どもとその保護者の視点に焦点をあてて実習を行った。

1. 活動地域概要

(1) 豊島区

- ・住民登録総数：283,835 人
- ・世帯数：174,543 世帯
- ・姉妹都市：埼玉県秩父市
- ・位置

東京 23 区の西北部に位置し、文京区・新宿区・中野区・練馬区・板橋区・北区に隣接している。(中心部は東経 139 度 43 分、北緯 35 度 44 分)

- ・地勢

東西に 6,720 m、南北に 3,660m。東京湾の平均海面を水準として、高地が 36m、低地が 8m でおおむね台地状をなしており、「鳥が羽を広げたかたち」をしている。

面積は 13.01 ㎢で、23 区中 18 番目の広さである。これは、東京都の総面積の 0.595%、区部面積の 2.1%にあたる。

- ・産業・文化

ソメイヨシノ発祥の地であり、ソメイヨシノを大切なブランドの 1 つとして、守り育てていくために活動している。また、旧鈴木家住宅や木造聖観音立像等、歴史的文化財が大切に保存されている一方で、乙女ロードやアニメイト本店等、現代的な文化を発信している場所としても有名である。

地方からアクセスしやすく、様々な企業が集まっている都市である。区としては中小企業支援に力を入れており、ますますの発展が期待されている都市である。

(2) 埼玉県東松山市

- ・住民登録総数：89,656 人
- ・世帯数：37,964 世帯
- ・姉妹都市：ナイメーヘン市(オランダ)
- ・位置

埼玉県の真ん中に位置している。(中心部は、東経 139 度 23 分、北緯 36 度 2 分)

- ・地勢

東西に 12 km、南北に 13.8 km。比企丘陵の豊かな自然に囲まれながらも、都心まで最短 44 分という便利な側面もある。

面積は 65.35 ㎢で埼玉県内では 15 番目の広さである。

- ・産業・文化

東松山市には、「やきとり」の暖簾を掲げる店が数多くあるが、東松山市の「やきとり」は鶏肉ではなく豚のカシラ肉を炭火で焼いて、辛いみそだれをつけて食べる独自のスタイルのものが半世紀にわたり愛されて続けており、「やきとり音

頭」が存在する。

シニア人材による中小企業サポート事業や女性企業家の支援等幅広く取り組んでいる。

(3) 埼玉県熊谷市

- ・住民登録総数：199,977 人
- ・世帯数：85,031 世帯
- ・姉妹都市：インバーガーギル市(ニュージーランド)
- ・位置

東京都心から 50～70 km圏に位置している。(中心部は東経 139 度 24 分、北緯 36 度 9 分)

- ・地勢

東西に約 14 km、南北に約 20 km。ほぼ平坦であり、荒川や利根川の水に恵まれた肥沃な大地と豊かな自然環境を有している。

面積は 15,982 km²で、埼玉県内では 5 番目の広さである。

- ・産業・文化

名物として、快晴日数日本一として知られる熊谷市を“HOT”にもりあげる目的で作られた「くま辛」や暑い町だからこそ食べられる熊谷市のおいしい水を使った「雪くま」がある。また、熊谷染も有名である。

農業産出額県内第 3 位、年間商品販売額県内第 4 位、製造品出荷額県内第 3 位。県内有数の産業都市である。肥沃な土壌と広域交通網の要衝としての産業立地優位性を活かし、各分野において活力がある産業振興を目指している。

2. 活動趣旨・概要

豊島区は言わずと知れた大都市であり、子どもたちが広い空間で自然と触れ合う機会が少ないことは想像に難くない。しかし、河合(2002)は「自然は最大の教師である。」と述べていることからわかるように、人は自然に対する驚きや感動を通じて知識や人間性が培われていくと考えられている。実際に、自然体験が豊富な方が問題解決力は高く、自然体験が少なからず自立性にも影響を及ぼした報告等がされており、自然体験は、子どもの社会性に大きく影響を及ぼしているものであるということがわかる。このような背景から、都会に暮らしている親が、自分の子どもに対して自然体験学習をさせたいと考えるのは自然な流れであろう。実際に施設の方にお話を伺った際、親が子どもにやらせたいといった側面があるということを聞くことができた。ここで問題となってくるのは、プログラムの最初の段階では、子どもは“親に連れられてきた”状態であり、大して自然に興味を抱いていない可能性があるということである。自然はいろいろなことを教えてくれるものではあるが、興味を持ってもらえなければ、ど

んな体験もただの作業であり、服が汚れる不快感と作業による不快感が残るだけである。そこで、私は自然に馴染みのない都会の子どもたちが、どのようなプログラムを経て自然へと興味・関心を抱くのか、また、その魅力的なプログラムの作成の仕方を学びたいと考えた。

以上のことから、自然に触れ合う機会の少ない豊島区の人達が、どのように自然体験や環境活動について学び、自然に触れ合っていくのか等を、市民団体の学習活動に着目して実習を行う。特に子どもとその保護者の視点に焦点をあて、魅力的な環境活動・自然体験学習プログラムの構築の仕組みを学ぶことを目的とする。

3. 実習日程

- 1日目： 8/28 実習打ち合わせ・イングリッシュガーデン講座
- 2日目： 9/25 イングリッシュガーデン講座
- 3日目： 10/2 いけぶくろ自然クラブ（田んぼの学校）
- 4日目： 10/30 大明まつり参加（イングリッシュガーデン講座）
- 5日目： 11/20 いけぶくろ自然クラブ（畑の学校）
- 6日目： 11/27 午前：いけぶくろ自然クラブ（収穫祭）
午後：イングリッシュガーデン講座

○イングリッシュガーデン講座とは

みらい館大明ブックカフェ横にて、イングリッシュガーデンをプロである佐藤勇武先生の指導で管理を実践し、庭を美しく手入れする方法を学ぶことができる。1回だけの参加も可能であり、小学生以下は保護者同伴で参加無料となる(大人 1500 円)。



○みらいガーデン



○講義風景



○ガーデンの様子

○いけぶくろ自然クラブとは

いけぶくろ自然クラブは、としまNPO推進協議会とNPO法人いけぶくろ大明(みらい館大明)が、共催で実施する自然体験プログラムである。毎年一年にわたって、としまNPO推進協議会とみらい館大明、埼玉県東松山市・熊谷市で、田植え・沢あそび・稲刈りなど、自然と触れ合うプログラムを提供している。



○稲刈りの様子



○生き物探しの様子



○焼き芋の様子

4. 活動内容・感想

1日目・2日目：イングリッシュガーデン講座 - 管理編 -

○行ったこと

- ・除草作業
- ・イングリッシュガーデンについての講義
- ・大明まつり打ち合わせ

○感想

昨年から引き続いている講座であるため、講師と受講者、受講者同士信頼関係が生まれており、とても良い雰囲気の中、講座が開催されている光景が印象的だった。加えて、グループで固まっているわけではなく新しく受講する方もすぐなじむ事が出来るようになっており、暖かい空気に包まれていた。年齢層も幅広く、小さい子どもから高齢の方まで受講しており、年齢で選ばない講座であると感じた。この講座で特徴的だったのは、“イングリッシュガーデンについて学ぶこと”という学習目標で完結していない点である。イングリッシュガーデン講座を受講したことで、植物に興味を持ち、植物のスケッチをする、そうすることで絵に興味を持ったというようにどんどん発展していった方もいて、おもしろいと思った。みらい館大明では様々な団体が活動しているため、例えば絵についてもっと学びたいと思えば、すぐに講座を受ける事ができる環境であることや、発表の場を用意してもらえるのも良い点であると感じた。



○大明まつりで行うもの



○大明で活動している団体(一部)

3日目： いけぶくろ自然クラブ - 田んぼの学校 -

○行ったこと

- ・ 稲刈り
- ・ 生き物探し、生き物観察
- ・ 焼きマシュマロ

○感想

ゲーム等の電子機器を持たせず、移動中も紙とペンで遊ばせることや、できることは自分でやらせるということを大切にすることで、コミュニケーション能力の向上や責任感のようなものが自然と芽生えるようにしていたのが印象的だった。子どもたちの中には自然や生き物が大好きでいつまでもため池にいる子もいれば、稲刈りもあまりしたくない、汚れたくないと言っている子もいたり様々であった。そういったこともあってか、プログラムのメインである稲刈りは全員でやるが、生き物探しをするために、ため池には入ることは自由、最後に全員で楽しく話しながら竹に刺したマシュマロを焼くという流れにすることで、子どもたちがそれぞれ抱えている自然への興味・関心に寄り添った構成になっていると感じた。興味・関心を持続させるにはメリハリとバランスが重要であることを学んだ。

今回一緒に参加した保護者の方に、「都心に住んでいると自然と触れ合う機会がなく、外で遊ぶことさえ少ないため、今回は本当に貴重な機会だ。」というお話を伺った。やはり、親として子どもに自然体験をさせてあげたいと思うことはごく普通のことであり、むしろ良いことである。きっかけは優しい親心で、たとえ自然に興味・関心がなくても、やらされている感がほとんどないので、新しく出来たお友達と外で楽しく遊ぶという感覚で自然と触れ合う事が出来るのは魅力的だと思った。自然に興味・関心が薄くても、「次回のプログラムにも参加したい。」と笑顔で話してくれたのがよかったと思った。



○稲刈りの様子



○畑を見学している様子



○いただいたもの

4日目： 大明祭り参加(イングリッシュガーデン講座)

○行ったこと

- ・ イングリッシュガーデン講座体験

- ・植物の絵の展示
- ・各種販売
- ・ワークショップ

→・ハナちゃんショップ(アクセサリ作り)

- ・ペットボトルかぼちゃ作り

○感想

大明祭りでは、主に販売や展示、ワークショップ、体験講座を行った。日頃興味関心を持っていることを自由な形で表現し、発表する場があることは、モチベーションの維持や仲間意識の形成、新たな風を吹かすことができるため、とても良いことだと考える。印象的であったのは、子どもが一番興味をもつものは子どもが考えた自由な発想によるものだということである。これは、他にも生かしていくことができる結果なのではないかと考えた。今回、講座に参加している子が、風邪をひいてしまい、参加できなかったことはとても残念であった。全体的に盛況で終わり、よかったのではないと思う。しかし、どこの講座もその講座のみで完結してしまっていたので、こういった機会にコラボレーションしてみるのも、面白いのではないと思った。



○みらいガーデン



○ワークショップの様子



○子ども達の飾り

5日目： いけぶくろ自然クラブ - 畑の学校 -

○行ったこと

- ・里芋、さつまいも掘り
- ・玉ねぎの苗植え
- ・焼き芋作り

○感想

さつまいも掘りは、春に植えたものを収穫し、持ち帰ることができるという内容であったため、子ども達もとても喜んで収穫している姿がよかった。また、焼き芋でそれぞれのさつまいもの味の違いを比較できるため、食育にもつながったのではないと思う。

今回は、盛りだくさんな内容であったため、全体的な満足度は高めだったが、お昼を過ぎたあたりから、子ども達が遊びモードに入っていた。そのため、詰め込むので

はなく、もう少しメリハリが必要なのではないかと思う。子ども達は、興味関心がコロコロ変化しているのが印象的であり、特に都心ではなかなかできない穴掘りに夢中になっていた。大人が介入しなくても、想像力を働かせ、落とし穴を作ったり、「温泉を見つける！」とはりきっていたりしていた姿を見て、子どもは自然に馴染みがなくても自然で遊ぶことができるものだと感じた。また、前回の田んぼの学校の時と比べ、子ども達全員が全員で仲良くなっていると感じた。これは、年齢が幼いこともあると思うが、大人の介入が少なかったことも関係しているのではないだろうか。子ども達が仲良くなっていく過程において、大人の存在が邪魔になってしまうこともあるのだらうと感じた。

今回は、親子そろって参加する人がほとんどであったため、親子がどのような形で自然体験をするのか見ることができ、とても勉強になった。皆それぞれで、子ども達への関わり方が違っていた。名前を付けるとしたら、べったり型、中立型、あえての無関心型に分けられた。

べったり型は、基本的に自分の子どもから離れることがなかった。しかし、子ども達の世界に介入することはなく、常にそばで見守るというスタンスは崩さないところが印象的であった。この人達の存在があったから、他の両親も安心して、自分の子どもから離れることができたのだと思う。子ども達の中心となっている、結び付けているポジションの子の両親であったため、距離の取り方や、コミュニケーションが上手な方なのかもしれないと感じた。電車の座り位置は、行は子どもの真横で、帰りは子どもの正面であった。これは、1日の中で子ども達が仲良くなったことや、他の両親の信頼度が高いことを表しているのではないかと推測した。

中立型は、基本的には離れているが、時々様子を見に行くというスタンスであった。おそらく、べったり型の両親がいなかったら、母親は常に子ども達のそばにいただろうと考えられ、バランスのよい人達だと感じた。両親の中で一番自然に対する関心が高く、気になったことを現地の人に質問をしたり、体験を楽しんでいる姿が印象的であった。それ故か、この両親の子どもが一番体験を楽しんでいる印象を受け、両親は子どもに大きな影響を与えるものだ改めて感じた。電車の座り位置は、行きも帰りも子どもから見て、斜め前に座っていた。これは、バランスよく見守るというスタンスからくるものだ推測できる。

あえての無関心型は、基本的にずっと子どもから離れており、自由にさせるスタンスであった。他の両親はたまに自分の子どもをスマホで撮っていたので、ずっと離れているのも珍しいなと感じた。しかし、「この機会を大切にしている。」とおっしゃっていたので、大切にしているが故の行動であると共に、何度も自然クラブへ参加しているため、運営側を信頼している面もあるのだらうと思う。お昼のときの様子や子どもの接し方から、心理的に一番近いのはこの両親だろうと思った。あまり周囲とコミュニケーションをとっておらず、子どもも人見知り傾向が強いと感じたので、あまり

コミュニケーションは得意ではないのかなと思った。電車の座り位置は、行き帰りともに子どもからは一切見えないところに座っていた。子ども達の世界を大切にしているからくるものであると推測した。



○玉ねぎの苗植え



○芋掘りの様子



○穴掘りに夢中

6 日目：いけぶくろ自然クラブ - 収穫祭 -

○行ったこと

- ・稲刈りしたお米で炊き込みご飯
- ・収穫した里芋で芋煮
- ・前期の振り返り

○感想

前期の振り返りを行い、自分が行かなかったところのものまで見ることができるため、次への期待や行ってみたいという想いが強くなることは良いことだと感じた。料理に関する注意点を確認した後、大人は見守る・量が多くて大変な里芋の皮むきは手伝う等の対応をしており、子ども達が自分から進んで何かできることを探しに行っている姿が印象的であった。料理を作るのは初めてな子もいれば、普段から手伝っている子といろいろいたが、皆で協力してできていたと思う。自分たちの手で収穫したものを、自分たちの手で料理することは、良い食育になると思う。とても美味しかった。



○注意点の説明



○料理の様子



○出来上がったもの

5. 首都圏との連携方策について

今回の実習では都心でもできる環境教育と地方に行かないと体験できない自然体験の両方を見学させてもらった。そうしたことで分かったのは、環境教育・自然体験学

習は教える側教わる側、地方の人都心の人と相互にニーズがあり、共に学習できるという点である。都心で行う環境教育では、ガーデニングについて学びつつも、ガーデニングについて学ぶという目的だけでは完結せず、新たなことに興味・関心を持ち、学習を発展させていった。講座と聞くと話を聞いているだけという一方的なものを想像してしまうが、自然に触れ作業をする環境教育は、相互に良い影響を与えることができる。地方で行う自然体験では、都心からきた子どもたちにとって目には見えないけれども、得るものが多いだろうということは想像に難くない。子ども達の親にとっても、自然に触れさせたいという思いがあり、都心では得ることができない経験をつまませてあげたいというニーズがある。これは、都心からくる人が一方的に多くのものを受け取っていると見えなくはないが、地方の人も多くのものであり、もちろんニーズもある。例としてあげると、地域のことを知ってもらえること、地域の魅力の再発見、災害応援の関係づくり等に効果があると考えられる。それにはできるだけ長く関係を築いていく必要があり、決して一方的な関係で完結させてはならないのだ。

地方でできる自然体験は魅力的だが、都心に住む人々にとって非日常のできごとである。これは受け入れる地域側にも言えることだと思うが、今回は都会の人に焦点をあてていきたい。都市部にも少なからず、自然はある。小学校の校庭に行けば多くの植物があるだろう。それぞれの校庭に生えている植物を収集し、それぞれ見ることができればそれだけで環境教育になるだろう。そういったことをしていき、都市部でも自然に触れ合っていくことが連携する上でも大切だと考える。

6. 生涯学習の視点から考察

○イングリッシュガーデン講座

みらい館大明では、多くの団体が活動しており、種類も豊富かつ幅広い年代の人達が利用している。このことは、みらい館大明の大きな強みであると考えられる。大明にいれば、自分がしたいと思っていることはだいたいできるだろう。しかし、大明の主な業務が部屋の貸し出し業務であることも関係しているのだろうか、それぞれの活動がそれぞれの活動の中で完結してしまっていた。それはそれでよいのだろうが、せっかく様々な活動をしている団体が多いため、もったいないと感じてしまう。学びを発展・充実させていく上で、何かと何かをコラボレーションする動きがあってもよいのではないかと考えた。イングリッシュガーデン講座の方々もおっしゃっていたことだが、お節介な接続詞のような人、ファシリテーター的な役割を担う人が必要なのではないかと思う。例えば、11月27日(日)はイングリッシュガーデン講座の活動日でもあったが、同じ日にミニクリスマスツリー作りが行われていた。イングリッシュガーデン講座と繋ぐことができれば、本物の木を用意し飾り付けるといったようなこともイベントとしてできたのではないだろうか。何かと何かを繋ぎ、掛け合わせることで、新しい学びや交流が生まれ、発展していく可能性を秘めている。生涯学習を考えたとき、

ファシリテーターはほしいと感じた。

○いけぶくろ自然クラブ

一般的にも子どもの自然体験が子どものコミュニケーション能力や社会性、人間性等に大きく影響するといわれている。よって、親が子どもに自然体験をさせたいと考えることは自然なことであり、むしろ優しい親だろう。特に、都心に住んでおり、ほとんど自然に触れ合うことができない環境にいるのならば尚更だ。子どもの自然体験は、親の優しさと言っても過言ではない。しかし、やはり気になってしまうのは“やらされ感”だろう。“やらされ感”が強いと楽しくないただの作業であるし、良い影響があるとも思えない。そんな親と子の意識の差を縮め、繋ぐのは、現地の人間であったり、同行スタッフだろう。豊かな自然が繋いでくれることもある。親が現地に行かない場合、親が子ども以外で唯一関わる人は同行スタッフだ。そのことから考えても、親は同行スタッフに対して、自分の子どもを預けても大丈夫だというような安心感を求めるだろう。同行スタッフは親としっかりとした信頼関係を築く必要がある。親が現地と一緒に向かう場合でも同行スタッフに求めるのは、安心感であろう。現地の人々には自然に関する専門性が求められる。親は、一緒に行く別の子ども達やその親、豊かな自然等、様々な関わりを経て、子どもとのズレをできるだけ少なくしていくだろう。親が楽しむことができるものならば、子どもも自然と楽しむことができる可能性がある。楽しむという姿勢を見せることも重要であると考え。

子どもは自然体験を通して“心”を学ぶとされている。“心”は、信頼であったり、愛、価値観、情緒、情操等様々な在り方がある。子ども達は学校教育やマスメディアの発達により、大人よりも多くの知識や情報を身につけている時代だ。しかし、知識だけでは現代を生き抜くことはできない。フィーリングが重要だといわれているが、それは、学校教育や家庭教育のみでは培うことが難しい能力だ。自然に順応するための考え方や感情、自然とどう生きるか等、その在り方が人類共通の文化であり、生きる力となる。なすことによって学ぶ力を基軸とし、自主的、実践的な力を育成し、思考力、判断力、表現力、行動力等が重要視される。私たちは生きていけば肉体的に大人になることはできるが、精神的には社会刺激がなければ成長することができない。そのためにも自然体験は重要な社会刺激であると考え。よって、一緒に体験する仲間、ありのままの自然を受け止めること、そのためのサポートをする大人が必要であると考えた。

7. 参考文献

- ・豊島区公式ホームページ

【<http://www.city.toshima.lg.jp/>】(取得 10/12)

- ・東松山市ホームページ

【<http://www.city.higashimatsuyama.lg.jp/>】(取得 10/12)

- ・熊谷市ホームページ

【<https://www.city.kumagaya.lg.jp/>】(取得 10/12)

- ・河合隼雄(2002)『河合隼雄著作集第Ⅱ期 5 臨床教育学入門』、岩波書店

【実習報告 3 東京都豊島区】

地域を学んで内外にコミュニティを広げる

～豊島区 地域エリアガイドボランティア事業～

大正大学文学部歴史学科 3 年 眞野聡美



キーワード 地域学 歴史 コミュニティ活性

地域を学び、その魅力を発信し、内外へとコミュニティの拡大を
はかるエリアガイドボランティア事業とはどんなものなのか？

1. 豊島区の概要

豊島区は人口約 28 万 4000 人、面積 13.01 平方キロメートルで、全体的に台地の地形をした区である。巣鴨や雑司ヶ谷などの観光地のほか、様々な年齢層の人々が集まる池袋、歴史的な人物が眠る染井霊園が存在し、ソメイヨシノ発祥の地でもある駒込など、特徴的な地域をもつ区でもある。

豊島区は『文化』を基軸とした街づくりを進めており、さまざまな文化政策を推し進めている。閉校した学校施設を利用した「みらい館大明」や「にしすがも創造舎」（現在は施設を仮校舎として使用することにより閉館）や地域文化創造館、舞台芸術交流センター「あうるすぽっと」など、ハード面が充実していることが大きな特徴である。

また、これらの施設が各々でイベントや講座を実施し、人々の幅広い学びの場となっているほか、参加者同士、ひいては地域住民のコミュニティ形成に寄与する形となっている。

区は文化政策を進めるにあたり、「生涯学習」が重要であるとしている。「文化は、一人ひとりの豊かな学びを軸に創り上げていくものです。そして、区民一人ひとりが学んだ成果を紡いでゆくことが、文化を発展させる原動力へとつながっていきます」（『豊島区生涯学習基本計画』 年）とあるように、個々の学びを社会へ還元し、それを循環させていくことで文化は発展する、と区は考えているということである。

では、その中核を担う生涯教育計画はどのようなものなのだろうか。

豊島区の生涯学習計画は「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」の4つの基本理念のもとに策定されている。

これは、個々の学びを持ち寄って成果を出し、それを社会に還元することによってまた新たな学びの機会が生まれる、という一定のサイクルを生み出すためのものである。具体的には、「つどう」の段階で個人的だった学びは、「つながる」で同じような学びをしている人や、そのことについて知識をもつ人や教えることのできる人を探して、「つなげる」の段階でコミュニティや団体を形成し、互いに学びあうようになり、「つくりだす」の段階で学んだことを広く発表することのほか、地域での活動を始めるという一連の流れが繰り返されることを指す。

そのうちの一つ、「つなげる」理念の中で推し進められている事業が「エリアガイドボランティア養成事業における団体形成」である。では、エリアガイドボランティアとはこういった活動をする団体なのか、次の項で説明したいと思う。

2. エリアガイドボランティアとは

エリアガイドボランティアとは、その名の通り一定の地域の中で、観光客などに対

して案内をするボランティアのことである。ただただ道案内をするのではなく、地域の文化財や資源、あるいは特産品などに対する知識が求められるうえ、ガイドとしての話し方やコミュニケーションの取り方も重要となってくるため、ガイドとして活動したいと考える人々はそれに合った学習が必要となってくる。

また、団体としての活動の母体によっても少し形態が異なってくる。

第一に、観光協会を母体とした「観光業型」があげられる。活動する人々は観光協会へガイドとして登録し、観光協会を通して依頼を受け、活動を行う。

第二に、行政を母体とした「生涯学習型」があげられる。豊島区の活動がこれに当たり、区など各自治体の学習活動を通して団体をつくり、活動する団体を指す。

第三に、ボランティア団体が自立し、単独で活動する「独立型」があげられる。この型の団体は依頼を受けるところからガイドの派遣、団体の運営に至るまでのすべてを自分たちで行う。豊島区の講座では最終的にこの型の団体ができることを目標としている。

3. エリアガイドボランティア養成講座とは

上記のように、ガイドとして活動してみたいと考える人々や、興味のある人々のために開始した事業が『エリアガイドボランティア養成事業』である。

そもそもの始まりは、区の事業であった雑司ヶ谷学等の講座を受けていた人々を対象に、そこで学んだ知識をガイドとして生かすという目的の元始まった講座であった。

その後、駒込地域においても勉強会を中心にガイド活動が始まり、現在は各地域文化創造館が中心となって巣鴨・千早・大塚の3地域へと活動の場が広がりつつある。

・事業の柱

事業の柱は大きく3本ある。「地域ごとの魅力を掘り出す」・「団体の運営能力やガイドとしての技能を身に着ける」・「活動の支援」である。この柱のうち、前半2本を担うものが『地域学習講座』と『としまガイド養成講座』である。

ガイドとしての技術や、団体としての運営方法などを学ぶ各地域共通の『としまガイド養成講座』は入門コースと応用コースに分かれており、入門コースで学んだ基礎を生かし、より実践的な演習を行う内容となっている。

また、各地域についてより深く学ぶ『地域学習講座』では、各地域の特徴を生かした講座が行われ、実際に史跡や文化財を訪れて見学するほか、英会話等の講座が行われている地域もある。

最後の3本目、『支援』は、この事業にかかわる地域文化創造館や、行政がどういった支援ができるのかということを指す。現在、活動の拠点を提供する、講座を開くといったことを含め、団体のスムーズな活動を促進できる諸設備についても検討され

ている。さらにどういったことができるのかを考えている段階である。

・想定されるステップ

事業には踏んでいくべき理想のステップが4段階設定されている。

1 段階目は、『自己完結型学習』である。個人それぞれの学びのことで、地域に関する興味を持ち、その歴史や文化を学ぶことが目標となる。

2 段階目は『参加型学習』である。個々の学びを繋ぎ合わせ、ネットワークづくりをすることが目標となる。

3 段階目は『参加型学習』から『自立』への移行期間にあたる。2 段階目で学んだことを生かし、ガイド活動を開始することが目的となる。

4 段階目は『自立』であり、団体の自主運営を確立していく段階にあたる。

これらの段階は各地域の団体形成や地域学習の状況に合わせ、参加者を変えて何度か段階に合わせて講座を変える。4 段階目に達した人々も講師として一段階目の講座に関わるほか、団体として活動することで地域社会へ学習成果の還元ができるようになっている。

4. 各地域のエリアガイドボランティアの活動事例

a) 雑司が谷地域

雑司が谷地域は区の南部に位置する地域である。鬼子母神堂や雑司が谷旧宣教師館など、歴史的な建造物があり、著名人の眠る雑司ヶ谷霊園なども高名である。前述のとおり、ユネスコの未来遺産に地区一帯が登録されている。

この地区のエリアガイドボランティアは「としま案内人雑司ヶ谷」という団体で、2011 年から活動を開始した。豊島区の中では最も進んだステップで活動をしている団体であり、独立が進んでいる。

現在のメンバーは 20 名ほどで、今年度 3 期生を募集中した。主な活動はモデルコースの案内及び小学校の社会科見学のコース案内である。

b) 駒込地域

駒込地域は区の東側、北区や文京区に接する地域である。染井霊園や六義園などがあり、区内でも緑の多い地域となっている。

この地区のエリアガイドボランティアは「としま案内人駒込・染井」という団体として活動中である。親子で街歩きをするコースや、江戸時代の正月に関するコースなど、特色のある案内を中心に、街づくりや子どもの教育に寄与するべく活動している。

c) 巣鴨地域



巣鴨地域は区の北東部に位置する地域である。古くより中山道が通っていたためにぎわっていた町で、とげぬき地蔵で有名な高岩寺や、江戸六地蔵の一つである眞性寺などがある。

この地域のエリアガイドボランティアは現在、講座を受けている段階である。

d) 大塚地域

区の東部に位置し、江戸時代には巣鴨村という地名で呼ばれていた地区。

山手線に加え都電荒川線が通っており、その線路沿いに植えられた薔薇が毎年5月頃に見ごろを迎える。

エリアガイドボランティア活動は現在、講座を実施している最中である。そのため、正式にボランティアとしての活動が始まったわけではなく、その準備段階にあたる。

e) 長崎・千早・千川・要町・高松地域（区西側地域）

長崎・千早地域は区の西側に位置する地域である。千早の地域文化創造館は区の西側を対象としており、かつてのトキワ荘や、「池袋モンパルナス」などがある。

エリアガイドボランティア養成事業としては現在、「地域学習」講座が実施されている最中である。そのため、正式にボランティアとしての活動が始まったわけではなく、今は活動のための準備段階にあたる。

5. 実際に参加してみて

a) 巣鴨ガイドの会



8/27 に巣鴨地域で活動を始めている「巣鴨ガイドの会」の活動に参加させて

いただいた。なお、この会はガイド養成講座のカリキュラムの最終段階として立ち上げが設定されている団体ではない。しかし、実際に墓蘭亭アガイドとして活動を開始している団体の例として今回挙げさせていただいた。

会のメンバーと学生の参加者を3チームに分け、地藏通り商店街方面、大正大学方面、染井方面に散って街歩きをした。

私は大正大学方面に参加させていただき、普段通学路として利用している道の周囲をまた違った視点から見ることとなった。コースは巢鴨の地域文化創造館を出発し、庚申塚、明治女学校跡、延命地藏堂を經由、大学の脇を歩いて千川上水についてお聞きし、大学の正門前を歩いて妙行寺方面へ向かい、最後に地域文化創造館へ帰ってきた。何気なく前を歩いていた建物が特殊な作りをしていたり、マンホールにも意味があるなど、とても興味深く、楽しく街歩きができた。

ガイドの会のメンバーはその地域の名物や食べ物にも詳しく、この日は昼食を食べることのできる場所を紹介していただいた。

しかし、説明を受けていて感じたことは、私は歴史学科の学生であり、もっともそういったことに興味があったため、非常に興味を持って聞くことができたが、観光に来る人々がこの解説を聞いて果たして楽しめるのかどうかという点である。

ガイドの皆さんの解説は非常によく研究されており、深いところまで理解が及ぶが、その反面深すぎて初めてその地域に来た人にはわかりづらいかもしれないという印象を受けた。

b) としまガイド養成講座

・実習概要・目的

私は、社会教育主事課程を履修中及び歴史学科の学生として、この事業に今回の実習で関わらせていただくことになった。歴史は何も、古代の遺物や日記、文書の中だけでなく、もっと身近なところにあるものなのだと私は考えている。

歴史は地域に根差していることが多く、観光資源となっている土地もそれに伴って数多くある。観光資源となっている土地にはゆかりのある武将や事件、文化財があるというケースが大半だが、前述のとおり歴史はもっと身近なもので、日ごろ何気なく前を歩いている建物が百年以上続く問屋であるかもしれないし、道の幅が広いのは昔の街道だからかもしれない。こんなにも要素が普段の生活に溢れているのに、そのことに気付かないのは、「教えてくれる人がいないから」である。

私は、この理由を解消しえる活動がこのエリアガイドボランティアだと考え、この事業をもっと知りたいと思い、実習をさせていただくに至った。

その過程で、これまで社会教育主事の講座で学んできた地元学が生かせることと、この活動が地域のコミュニティ活性化につながることを教わった。短い期間の実習ではあるが、どのようにして「教えてくれる人」の基礎がつくられていくのか、また、地域について学ぶ人々はこういった過程をたどるのかを実際に自らの目で見たと、歴史と地域コミュニティの活性化について改めて考えたいと思っている。

・実習日程

11/19 第1回：ガイダンス

→先輩ガイドボランティアの体験談を聴く

豊島区の文化、観光政策について、参加者自己紹介

11/25 第2回：ガイドツアー体験(1)

→雑司が谷地域でのガイドツアー体験(鬼子母神堂など)

既に実際の活動を開始している先輩に案内してもらい、ガイドがどういったものなのかを体感する。

12/3 第3回：ガイド技術(1) 資料のつくり方・情報の集め方

→資料の種類に関する講義、パソコンでの情報収集の実習

12/10 第4回：ガイド技術(2) 話し方・伝え方

→人にわかりやすく伝える話し方のコツなどについてグループディスカッションを通して学ぶ

12/17 第5回：地域学習(1) 豊島区の歴史・地理

→豊島区の歴史を紀元前から振り返る

また、土地の利用や道などについて学ぶ

・講座の内容

1 回目のガイダンスでは、今後の講座の進め方が大まかに説明された後、講師のとしま案内人雑司ヶ谷の方と区の観光課の方に、それぞれガイドボランティア団体の成り立ちからどういった活動をしているのかについてと、区の方策としてどういったことを観光施策の方針としているのかについて講義をしていただいた。後半は参加者の自己紹介となり、区内のどこに住んでいるのか、どういった興味・関心をもってこの講座を受講することになったのかについて一人一人話していただいた。

2 回目のガイド体験では、会場となっていた雑司が谷地域文化創造館の周辺(雑司ヶ谷鬼子母神堂や雑司ヶ谷案内処、大鳥神社など)を、としま案内人雑司ヶ谷の方々に案内していただいた。

3 回目のガイド技術の講座では、前半を座学、後半をパソコンでの実習とし、講義で学んだことについて実践するプログラムとなった。前半の講義では主に資料の種類と作り方について学んだ。具体的には資料の提示の仕方や、そ

これらの作成時に注意すべき著作権について、情報の検索・取捨選択の仕方などについてである。後半の実習は講師から提示されたお題についてインターネットで検索し、班ごとに情報の取捨選択をしたものをまとめるという内容であった。

4回目のガイド技術の講座は「話し方・伝え方」をテーマとして、グループワークを中心に講義が行われた。図形の描かれた紙を3・4人グループの1人だけが受け取り、言葉だけで位置や形を伝えるワークでは、グループごとに様々な工夫を凝らしてほかのメンバーに伝えようとしていた。しかし、2回のうち1回目は質問をしてはいけなかったことから、どのグループも難航していたように感じられた。2回目は質問が可になったほか、1回目の反省を生かしてどのグループもよりスムーズに意思疎通ができていたように思う。

5回目の地域学習では、区の学芸員の方を講師として招き、豊島区の歴史について学んだ。歴史は紀元前まで遡り、一帯を支配していた豊島氏やその子孫、「豊島区」として成立する前後のことなど、現代にいたるまでのことをおおよそ時代の流れに沿って解説していただいた。講座の中や質疑応答の時間には、長く地元に住んでいる人ならではの「このような施設があったはずだ」などの質問が出ていた。

・反省点

私は「受講者」でなく「運営」側での参加となったため、地域文化創造館のスタッフの方々と共に講座記録や受付、進行役などを務めさせていただいた。実習開始以前にも講師の方との打ち合わせに同席させていただくなど、たくさんの「学び」の機会をいただくことができた。しかし、私自身は予定をお伝えしただけであり、すべてを地域文化創造館の方にお任せする形になってしまっていたのである。実習生であるのだから、あまりにも身勝手な要望を先方にお伝えすることはもちろん失礼であるが、もう少し準備したり、活動できることがあったのではないかと考えられる。

また、学期中の実習となったため、授業が直前まで入ってしまい、先方への到着が遅れ気味であったことも反省すべき点であると考えられる。

全体的に先方に任せきりになり、自分から行動を起こすことが少なかったことが、今回の実習の最大の反省点であると私は考える。

・実習を通して学んだこと

私は、歴史を教える人になるためには地域のことについてよく知らなければならぬと考えていた。しかし、よくよく考えてみればそのことだけに目が行ってしまい、ほかの側面について考えが及んでいなかったのである。

実際に講座に参加し、カリキュラムを見て、歴史や地域の知識だけではガイドすることはできないと思い知ったのである。まず、誰かを案内するため

には、案内される者とのコミュニケーションが必要になる。これは普通の一対一のコミュニケーションではなく、多対一のものであり、ガイドする側はいかにわかりやすく伝えるかに心を配らなければならない。

今回の講座の内容でいうと、第 3・4 回のガイド技術の内容にあたる部分である。深い知識を持つ者が、それについての知識がない、もしくは浅い他者にわかりやすく伝えるには、口頭だけでは難しい。図や写真、レジュメ等の資料や、事前にどういったことを説明すればより簡潔に、正確に伝わるのかを情報や知識をして取捨選択して考えておく必要がある。

コミュニティ形成について考えるためにはコミュニケーションをどのようにとるのかという点が重要であるというのに、実習開始前に目的を設定したときにはその視点が完全に抜け落ちていたのである。

これは私の『ボランティアガイド』というものへの見通しや理解が浅かったことの証明であり、このことに実習の中で気づくことができた点が最大の成果であったといえる。

6. ガイドボランティア事業の今後の展望について

現在、事業が進行中の 5 ヶ所の地域文化創造館のうち、本格的に活動が始まっているのは 2 ヶ所のみであり、全体として本格始動に至っていないのが現状である。

事業を手動している地域文化創造館及びその管理・運営をするとしま未来文化財団は、それぞれが独立し、各々が独自に団体を運営できるようになり、さらには地域ごとの区切りをなくして区全体へ活動が広まっていくことが望ましいとしている。また、この段階へ各団体を進める期限として、財団の指定管理の権限が切れる平成 30 年度を目安としている。

・今後出てくると思われる課題

ガイドを依頼する観光客は、その地域に対して興味があるということであり、ある程度事前にそこがどういったところなのかを調べてくる場合が多いと考えられる。このことから、ガイド一人一人が区の各地域のことを良く知っていなくてはならない。

そのため、客はガイドに自分が調べて分かったこと以上の知識の教授を求める。そのジャンルが何であれ、より深い情報を欲しているのである。ガイドは活動の幅が広がるにつれ、広い地域に対して深い情報を持っていかななくてはならないということになる。このとき、客の求める情報は歴史だけとは限らない。現代における生業や産業、もしくは美味しいものの食べられる飲食店等のことを聞かれることも考えられる。

また、それをよりわかりやすく、正確に伝える技術や、客とのコミュニケーション能力等、ガイドとしての技能が必要になってくる。

もちろん、これを個々の学習で身につけることは難しく、不可能に近いといえる。そこで、各地域の団体同士、ガイド同士での学びあいの場の設置が求められてくると考えられる。そのためには、としまガイド養成講座のカリキュラム内の講義や実習だけではなく、フォローアップ講座などによって補っていくことが有効であるといえる。

・今後の展望

では、区全体にエリアガイドの活動が拡大した場合、どのような効果が表れるだろうか。

まず挙げられるのは「観光業への寄与」である。一般にはあまり知られていなくとも、魅力のある場所や、興味深い場所は地域の中に必ずある。反対に、その地域の人々が何気なく触れているものが、外部の人間にはかえって珍しく、面白く感じられることもある。しかし、この気づきは地域住民と外部の人間が揃っていないと得られない。この条件がそろえば機会として、エリアガイドボランティアは非常に優れているといえる。

その場で得られた気づきは、その地域の観光や文化などの振興につながり、そのことによりその土地の魅力が増し、地域に来る人も増加し、その度に気づきも増えていくというサイクルが出来上がるのである。

このとき、来てくれた人々から得た疑問や、意見などをデータベース化するか、書面にまとめておくことを提案したい。何らかの形でいつでも情報を引き出せるようにしておけば、後のガイド活動に生きるだけでなく、前述の各団体間のギャップを埋めねばならなくなった際にテキストとして利用できるのではないかと考えられる。

また、地域内部のコミュニティも強化される。地域を案内して回っていくということは、実際に街の中を歩きまわるということであり、何度も繰り返していったインコースを回っていれば必然的に周辺の人々と関わり合いができる。例えば、必ず紹介する商店の店員であったり、通りすがりの人であったり、さまざまな人とかかわる必要が出てくる。そのコミュニティが、エリアガイドの活動拡大に伴って区内全体へ広がったとき、現代ではあまり見られなくなった人のつながりのある社会の姿が見えてくるのではないだろうか。これは十分に地域としての魅力たりえる要素であり、前述のように人を引き込む際にも有用な武器になりえる。

人と人をつなぐ「おぶせまちじゅう図書館」のまちづくり

- 本・学習施設・商店のネットワークによる地域活性化の試み -

大正大学文学部 3年 藤井 祐里



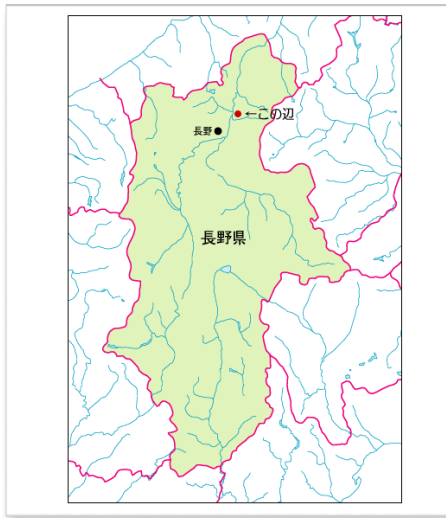
今回の実習で私は、長野県上高井郡の小布施町を訪れました。活動拠点は、小布施の町立図書館「まちとしょテラソ」（以下、テラソもしくは図書館）としました。そこで主に館内業務を体験しつつ、同地域内の他の生涯学習施設の見学、および取材を行いました。

住民が主体となり、また施設と連携し、取り組まれている学習活動取材したことで、人と人の繋がりを丁寧に保っていくことが、活動継続の上で非常に重要であると考えました。

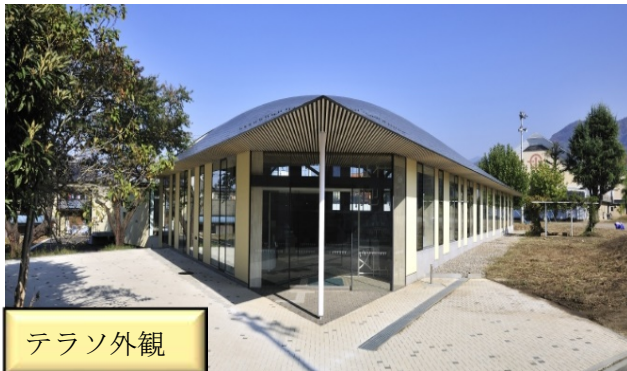
1. 地域・施設紹介

小布施町は長野県の北東部に位置し、面積およそ 19 km²の県内で最も狭い自治体です。すべての集落が町の中心部から半径 2 km 圏内にあり、生活面でも行政面でもコンパクトにまとまった町となっています。人口は 30 数年、11,000 人前後を維持していますが、高齢化が進行しているため、定住促進が大きな課題となっています。

産業としては、農業が大きな割合を占めています。名産品である栗に、ぶどうや桃などの果樹・根菜類・稲など、多様なものが栽培できる、恵まれた土地柄をしています。また、古くからの商家が多いことを生かすため、街並みの景観保全を行う、世界的にも有名な葛飾北斎と、小布施の縁をアピールするなど、近年は観光業も盛んです。



まちとしょテラソは 2009 年 7 月に開館した、比較的新しい公共図書館です。小布施の町立図書館は、過去何度か移転を繰り返しており、ある時期には、役場庁舎内 3 階に設置されていましたが、利便性に欠ける上、狭隘であったため、住民から独立建造物としての図書館を求める声が上がリ、現在の館が建設されました。館名のテラソは「世の中を照らしだす場」「小布施から世界を照らそう」などの意味を込めて、町民による公募で命名されました。従来の公共図書館にない特長として、館内での私語や飲食が許容されていることなどがあります。これは、利用者の自主性を尊重し、自由な空間を提供することを意図したものです。三角形の特徴的な建物は、全国公募で設計案を募集し、建築家・早稲田大学教授の古谷誠章氏の案が採用されたものです。明るく開放的な空間設計のため、随所に工夫がなされています。このため施設の趣向はもちろん、建築物としての評価も高いです。



テラソ外観



テラソ館内

2. 活動趣旨・概要

4泊5日の日程で、図書館業務と町内見学を行いました。期間中はユースホステルに滞在。本実習ではまず、【まちづくり】と【生涯学習施設】の関連がメインテーマとしてありました。私は図書館司書を目指しているため、生涯学習施設の中でも、公共図書館に最も関心がありました。そのため、【まちづくり】と【図書館】の要素をもとに、実習候補となる地域を探していきました。その中で小布施町およびテラソを実習先として選定した一番の要因には、「まちじゅう図書館」という取り組みがありました。「まちじゅう図書館」とは、小布施町内にある一般の店舗(カフェや酒造など)の店先に本棚を設置し、貸し借り等自由に交流できる場とすることで、いわば、小さな私立図書館を町中に設立する、地域連携活動です。図書館が先導し、町民が主体となっているこの取り組みに関心を持ちました。このため、以下の2点を主な学習目的としました。

1.公共施設としての図書館で行う地域連携

2.市民参加による学習活動・地方創生

そのうえで、テラソでの業務実習と、「まちじゅう図書館」の参加店舗での取材が主な活動内容として事前に想定されていました。実際の活動では、それに加えて同町内の、「高井鴻山記念館」「小布施ミュージアム 中島千波館」などに訪問してお話を聞く機会ができました。

3. 活動の詳細内容

5日間の実習日程（原則として 8:30~17:00 が実習時間。昼に1時間と15分の休憩）

1日目：現地到着。実習内容の相談、館内通常業務の説明・体験。

2日目：終日、配架・カウンターなどの館内業務。

3日目：「高井鴻山記念館」「小布施ミュージアム 中島千波館」等を見学・取材。

4日目：午前中は館内業務、午後から「まちじゅう図書館」での取材。

5日目：午前中は館内業務、午後は町内見学・再取材。現地撤収。

1. 館内実習を通して

前半2日の終日と後半2日の午前中は、館内通常業務を行いました。業務内容は一般的な公共図書館と同様で、配架・カウンター対応・蔵書管理・受け入れ処理などです。

まちづくりに関わりのある業務としては、小布施町や図書館に関連のある新聞記事を、デジタルアーカイブ（記録・電子資料）として収集するためのチェック作業がありました。このデジタルアーカイブは地域文化をさまざまな視点から見直し、地域資源を発見・運用するために保存・公開されています。これにより、文化の伝承や後継者の育成、来訪者・定住者の増加につなげていくことを目指しています。さらに、外部からアドバイザーを招き、アーカイブについて町民と考える勉強会が開催されることもあるようです。

また、おはなし会ボランティアの方たちによって、月2回「読み聞かせ会」が開催されています。テラソでは絵本だけでなく、紙芝居も貸出し可能なため、おはなし会の方や子供連れの方がよく利用しているようです。「読み聞かせ会」といったイベントは公共図書館では代表的なサービスです。しかしそれは、利用者（子供たち）に館員が読んで聞かせるサービス形態が多いです。テラソの「読み聞かせ会」

のように、図書館側は本と場だけを提供し、活動主体は住民となっていることが興味深かったです。

2. 記念館・ミュージアムでの取材

当初の予定では、館内業務とまちじゅう図書館訪問の2つが主な実習内容として想定されていました。しかし2日目の業務時間内に関館長から、町内にある他の生涯学習施設で、ヒアリング取材を行うご提案をいただきました。小布施の生涯学習施設はテラソに限らず、幾つもあります。その中でも、実習テーマである【まちづくり】を学ぶ上で参考になる施設として「高井鴻山記念館（以下、鴻山記念館）」「おぶせミュージアム 中島千波館（以下、おぶせミュージアム）」の2館を紹介してくださいました。そこで3日目は、「鴻山記念館」「おぶせミュージアム」に伺ってお話を聞くことになりました。電話で見学のご都合を伺った後、午前中に「鴻山記念館」、午後に「おぶせミュージアム」に見学に向かいました。

I. 「高井鴻山記念館」施設紹介と概要

「高井鴻山」は小布施を出身とする江戸時代の豪商です。多くの思想家・文人と交流していましたが、葛飾北斎とも親交があったとされ、北斎が小布施の地を幾度か訪れ、滞在した足跡が残されています。鴻山は北斎のパトロンであり、弟子でもありました。いわば北斎と小布施の縁を結んだ立役者であり、小布施の文化振興に多大な貢献をした人物です。高井鴻山記念館は、鴻山の活歴や妖怪画などの作品を紹介・研究していくため開館されました。近隣には葛飾北斎の北斎館もあります。

私が伺った時は、耐震工事のため休館となっていました。（2017年春頃から開館）事務所内ではちょうど、館長の金田さんと職員の久保さんが話し合いをされていたため、お二人の会話に混ざる形で、金田館長からお話を伺うことになりました。

I. 記念館の開館から現在までの経緯

高井鴻山記念館は昭和58年に開館しました。関わりが深い北斎館の方は、昭和51年開館ですので、6年ほど後になってからの開館でした。というのも、北斎の知名度や評価の高さに反して、鴻山の功績はほとんど注目されてなかったのです。鴻山の人物像や業績についても裏づけが取れておらず、伝説に過ぎないといった認識もされていました。なかには、北斎と親交があったこと、その縁で北斎が小布施の地に滞在し、作品を残したことまで疑問視する考えもあったそうです。小布施と北斎の縁について知るためには鴻山についても知る必要がありました。鴻山がいなければ北斎と小布施の縁もなかったのです。北斎について伝承していくだけでは、町の歴史を伝えることにはならない、だからこそ、特に地元の人には、鴻山について伝えていかなければならない、という信念から開館されました。

開館時もまだ研究が不十分だったため、鴻山に熱意のある住民や、研究者の協力のもと、調査研究を進め、昭和62年になってようやく、一つの成果として、『高井鴻山伝』を刊行することができたそうです。



II. 現在の記念館での運営・取り組み

休館中である今現在は、古い家々にあった古文書をいったん役場に集め、今後管理していくための作業が進められているとのこと。

ふだんの開館時期には、「友の会」という住民による有志団体が、積極的に館の運営に参加してくださるそうです。「友の会」は鴻山記念館以外にも、北斎館やおぶせミュージアムなど町内にある美術館・博物館施設に各々存在しています。鴻山記念館の友の会では、館内の案内や切符切り（受け付け）といった業務から、庭の草取りまで手伝ってくれるうえ、年4回ほど開催しているイベントでも、企画から反省会まで自主的に参加してくれるそうです。友の会や小布施町民について金田館長は、「(みんな) 自分たちの意思で動く」「動きすぎるほど動くし、皆勉強家」だとおっしゃっていました。実際に、鴻山記念館の友の会では、鴻山に関心の深い人が集まっていて、すでに皆さん知識が豊富なのだそうです。それでも「何でもいいから（学びたい）」となお意欲をみせてくれるので、月に1回は勉強会を開くことにしているそうです。友の会の唯一ともいえる課題としては、参加者の年齢層が高齢化していることがあるようです。最近では、交通網が発達して、短時間で東京や大阪に行けるようになったのもあり、どうしても若い人の気持ちがそちらに行ってしまうのかもしれない、とおっしゃっていました。

ちょうど開催時期に近い取り組みとして「妖怪夜会」の話題もありました。

「妖怪夜会」は鴻山記念館で開催しているイベントの一つで、鴻山の妖怪画にちなみ、いわゆる<肝だめし>を鴻山記念館の敷地で行うものです。先ほどの友の会やほかのボランティアの人が妖怪に扮し、訪れた人をおどかします。地元の人、特に子供たちに楽しんでもらいつつ、鴻山について知り、興味をもってもらおうとはじまりました。初年度(2012)は、テラソと連携もしており、テラソで妖怪にまつわる話を聞いた後、町の歴史についてガイドされつつ鴻山記念館まで移動、妖怪画の特別展を見る、という形をとっていたそうです。以後も鴻山記念館主導で毎年開催されています。年々来場者が増えており、昨年は1000人を超える方が来場されたそうです。今年は記念館が工事で使えないため、別の場所で開催されることになりました。

これらのお話の最中、今年のポスター(左)と昨年度のポスター(右)を見せてくださったうえで、どちらのポスターがいいと思うか私に聞かれました。

私「うーん…インパクトがあるのはこちら(今年)でしょうか」

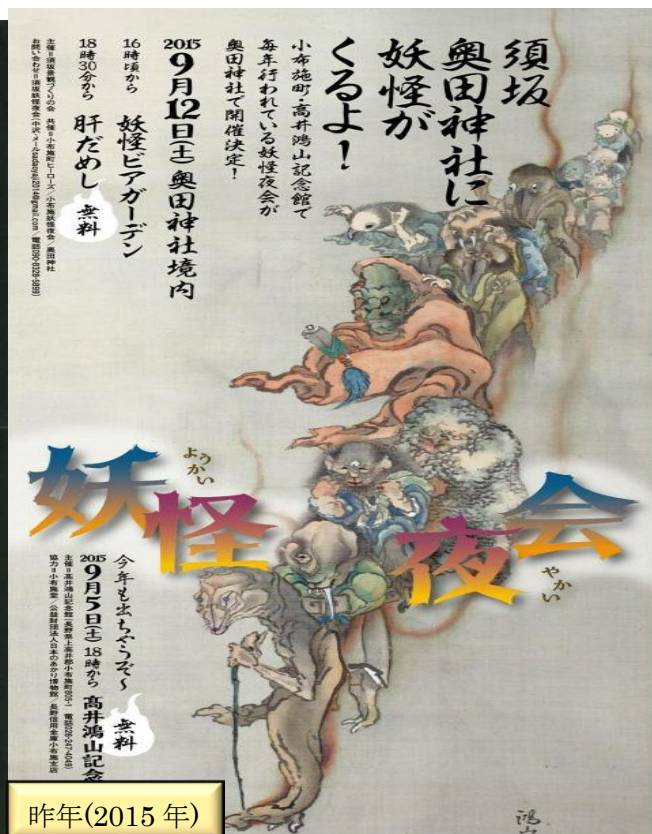
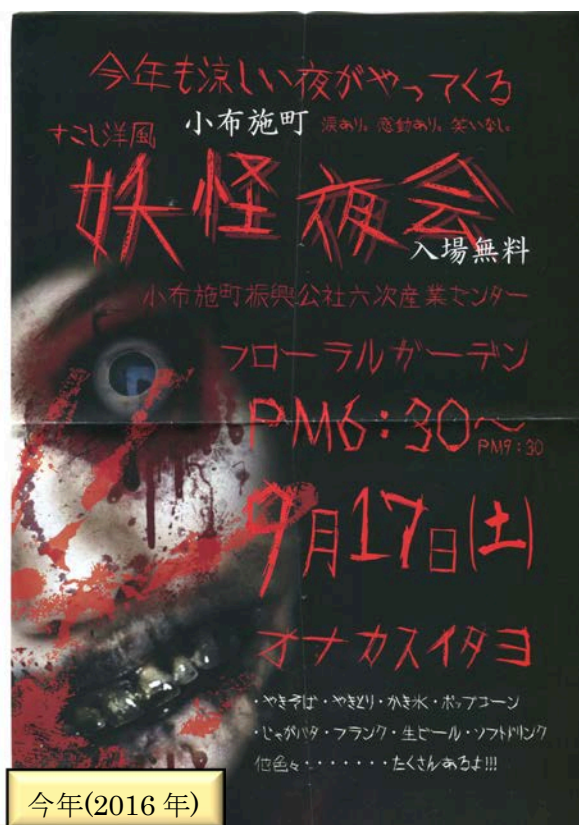
金田館長「こっち？」

私「はい」

金田館長「これねえ。…」ここの”、” 鴻山の” 妖怪画とか、ようかい夜会らしい…かな？どう思う？」

私「あまり…日本の妖怪とか、妖怪画らしくはない…ですね」

お話によると、開館当初などは、チラシやポスターといった広告は、不慣れながら館長さん自ら制作し、鴻山の妖怪画をメインモチーフにしていたそうです。後にボランティアの中で、デザインの心得がある方が協力して制作するようになりました。今年のポスターもまたボランティアの方と縁のあるデザイナーの方が制作したものだそうです。有志で引き受けてくれたものですが、流石にこなれている良いデザインではあります。しかしながら、イベントの趣旨、その根幹である鴻山の要素が感じられないのもたしかです。デザインはほぼ決定の時期まで来ていたのですがその点に関して、割り切れない思いがあったようです。館長さんいわく、「人情」が大切であったのだそうです。これまでずっと協力してくれている方たちなら、完成前にも確認や話し合いができる人間関係ができています。しかし今回は、新しいえに間接的な人脈からの参入だったこともあってか、お互いの意思疎通が不十分になってしまったようです。



III. おぶせの地域活性について

私の実習の動機や、テラソを選んだ理由についてお話した際、特に「まちじゅう図書館」の取り組みが全国的にも有名だということを伝えました。すると、館長さんも久保さんも「まちじゅう図書館」はご存知でしたが、知名度の高さはあまり実感していらっしゃらなかったようでした。そのうえで、まちじゅう図書館が日本唯一というわけではなく、他にも細々と似たような取り組みをしている町はあるのかもしれない。ただし、宣伝が上手くないとあまり知られないままになる。(テラソのように) 有名にな

るには、やはりそれだけアピールをしていくことが重要なのだろう、とおっしゃっていました。

小布施は長野で一番小さい町であるゆえに、隣の須坂町との合併話が何度もありましたが、住民の自立心や団結力が高いため、合併には至らずにいるそうです。それでも観光化し始めた当初は「栗菓子屋だけが良い（＝名物になる）」という認識の町民が多かったそうです。しかしそれは僻みにすぎず、今のよう、鴻山などの文化資源で町をアピールしていくにつれ、認識が変わり、積極的に動いてくれるようになったそうです。小布施は商家の街並みが目につきますが、農業で成り立っている町です。しかし、今の若い人の中で農家を志す人は少なくなっているのが現状だそうです。さらに、自分の子供には農業をさせたくないと考えている農家の方も多くなっているようです。しかし人が生きていく上で、まず第一にあるのは“食”であることを分かっているなければいけない。今の若い人は育てる楽しさを知らないのかもしれない、と感じているそうです。

館長さんの持論として、(地域に)人を呼ぶ魅力としてはまず“食”と“美への憧れ”があるそうです。小布施は、栗菓子や北斎の芸術など、その両方があることが強みのようです。また、鴻山が象徴的であるように、小布施では江戸の頃からおもてなしの精神が息づいていたようです。なかでも「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という概念が住民の意識の中にあるそうです。このため、まちじゅう図書館以外にも官民一体となった取り組みとして、およそ 130 軒が参加しているオープンガーデンなどの取り組みがされています。個々の力を大切にしつつ団結し、意欲的に活動する町民気質が現在まで続いているのだそうです。

(1) 「おぶせミュージアム 中島千波館」施設紹介と概要

小布施町生まれの現代日本画家、中島千波氏の作品を常設展示している他、特別室ではイベントや企画展を開催しています。また、町の民俗文化財である「祭り屋台」を保存・展示している屋台蔵も同敷地内にあります。

まず、職員の宮下さんにお会いして、常設展と特別展の内容と館内について端的な説明と案内をしていただいた後、自由に見学して、アンケート型のレポートの記入と報告をしました。その後、近隣の日本のあかり博物館まで案内していただき、自主見学した後、テラソへ帰館しました。

I. 複合的な学習施設であるおぶせミュージアム

敷地内にある広い庭の小道から奥に進むと、二階建ての本館と中庭の屋台蔵が見えてきます。館名にもある通り、本館の中島千波氏の個人常設展が主力展示です。しかし実は、祭り屋台の保存のための屋台蔵こそが設立の発端だったそうです。祭り屋台は江戸末期から明治初期にかけて造られたもので、地区ごとに特色ある造りをしており、7 台が現存しています。うち 5 台が屋台蔵（おぶせミュージアム）、2 台が北斎館にて保存・展示されることになりました。その際、新たな文化拠点として、より機能することを目指し、大規模な施設にする案が上がりました。そして幸先良く同町に縁のある中島氏の協力を得られたため、現在の施設形態となりました。

そうして建設された、本館の特別展示室では、美術的な企画展だけでなく、コンサートなどの地域イベントの場としての役割も担っているそうです。本館内にはカフェも併設されている他、2 階の常設展示室では、本棚と座席が設置されており、小さな図書室のようなスペースになっています。このように、ミュージアム全体でみると、美術館でもあり、博物館でもあり、交流や憩いの場ともなりうる、多角的な文化施設であるようでした。

見学後、徒歩十数分の距離にある日本のあかり博物館に移動しました。町内にある博物館・美術館同士は、共通券を発行するなどある程度の連携をとっているそうです。先の鴻山記念館で、友の会の存在について聞き知っていたため、移動中に、地元の方の利用具合についてお聞きしたところ、ミュージアムの来館者としては、千波氏のファンや観光で訪れる人が多く、地元の利用はあまり多くないとのことでした。地元の小中学校の授業などで利用されることはままあるそうですが、その一度限りしか接点を持たない住民が多いそうです



おぶせミュージアム 外観

3. まちじゅう図書館

4日目の午後からはまちじゅう図書館を訪れました。

現在、まちじゅう図書館は18軒が開館していましたが、ほとんどが個人経営の飲食店で、営業中であるため、お話を聞くのは難しいかもしれないということで、比較的取材しやすい上、事情通な店舗として、穀平味噌醸造場（以下、穀平）とかねいちくつろぎサロン（以下、かねいち）をお勧めされました。そこで、その2店を訪問し、他のお店は、時間の都合とその場の状況に合わせて、取材するか否かを判断するという方針で、出発しました。



まちじゅう図書館 MAP

まず、穀平味噌醸造場から伺いました。穀平味噌は天明4年(1784年)創業の老舗味噌屋です。お店の片隅に、まちじゅう図書館の本棚が設置されています。ちょうど、客足が少なくなっていた時間帯だったので、お店の方に取材することができました。所蔵している本は店主さんが収集したもの以外にも、町の人から寄贈された本も置いてあるそうです。本の貸し借りは、専用のノート帳に名前などを記入してやり取りするルールになっています。当初は、地元の方も多く訪れましたが、最近は観光で来た方や、筆者同様、図書館の関係者がよく来るとおっしゃっていました。

こちらのお店はまちじゅう図書館始動時から参加している10店舗のうちのひとつです。テラソの建設時に、町民で構成された図書館づくりの会という委員会があり、こちらの店主さんも参加していたそうです。当時、図書館は休館中で本の貸し借りができなくなっていました。そこで貸し借りや読書活動を行う場が他にもあると都合がいいということもあって提案されたそうです。店主さんも本が好きで提供できるだけのコレクションがあったため、協力することになったそうです。地元の方にもそれなりに親しまれてはいいますが、「自分の趣味を公開するのは恥ずかしい」ということで、本が好きでも図書館運営には乗り気でない人もやはりいるようです。また、テラソは企画や運営だけでなく設計にも色々と町民の要望が取り入れられていて、調整に苦労していた様子が印象に残っているそうです。



穀平味噌醸造場



本棚

次に伺ったかねいちくつろぎサロンは、明治時代から続く商家を改装したお宅を、サロンとして開放しています。図書館の利用に限らず、自由に立ち入って、思い思いに過ごしていい場となっています。不定期営業ということで、運が悪ければ閉まっていることもあるのですが、幸いなことに営業していらしたため、おかみさんにお話を伺いました。

もともとは、物置同然の使われ方しかされない空間だったそうです。そこにまちじゅう図書館の誘いがありました。本ならたくさんある、他にこれといってできることはないが、場所を提供することならできると参加を決めたそうです。穀平さんと同様、初期から計画に携わっていましたが、家屋の改修工事に時間がかかったため、開館は17番目となったそうです。ついでに、オープンガーデンの誘いもありましたが、庭の手入れにまで手が回らないため断念したそうです。こちらの図書館では、貸し借りは完全自由制で、記帳なども設けていません。おかみさんいわく、「勝手に持って行って2か月でも何年でも借りて行っていい」ぐらいの心持ちなのだそうです。所蔵している本はすべて館長ご夫妻の私物で、現在1500冊ほどあり、どんどん買い足して増えて行っているそうです。よく聞かれるそうですが、テラソから借りた本など一切ないそうです。置いてある本のジャンルも、絵本や児童書・漫画から歴史小説など実に多様です。たまに、見覚えのない本があるため、利用者が要らなくなった本をこっそり置いて行っているかもしれないとおっしゃっていました。

サロンも基本自由で、読書会・短歌の会・英語の会といったイベントを予約申告制で開催しているそうです。原則17時までとして開けていますが、大人のみ参加するイベントの際など、場合によっては夜間も開けているそうです。サロン内には、お茶やコーヒーだけでなく、キッチンと調理器具もあり、もちろん自由に利用することができます。様々な年代の方が利用できる場としていますが、特に、小さい子を連れた親や、小中学生の利用が多いそうです。図書館などの公共施設であると、度を過ぎてうるさくしていると、利用できなくなってしまうのですが、かねいちなら、いくら騒いでも平気だということで、よく訪れるのだそうです。また、小布施町には小中学校が各一校ずつしかないため、遠くから登校している子などは帰宅してしまったら友達と連れ立って過ごす時間と場所がないのだそうです。そこでこのサロンに集まって宿題をしたり、おしゃべりしたりして過ごしているとのことでした。夏休みなどは、館長さんにアドバイスをもらいつつ、読書感想文用の本を借りて行ったり、サロンで書いたりもするそうです。

実は、小布施町内には本屋が一軒もないそうです。最近では、ネットショッピングで購入できるせいか、町の小さい本屋は皆無くなったとのことでした。そのため、新刊本に触れる機会が得られることも、テラソやかねいちの果たしている役割として重要であるようです。

5日目（最終日）にも伺って、お礼を述べると共に、まちじゅう図書館とテラソの関わり方について、少しお聞きしてみました。それに対し、図書館側のしてくれたことといえば、参加店舗用の旗をくれたことくらいだった。（余談ですが、オープンガーデンの参加形態もおなじように旗を配った後は住民任せなのだそうです）改修工事もすべて自分たちで行った。あとはもう自由にやっている、と明朗におっしゃいました。そこで、「図書館の方に何かしてほしいことはありますか？」とお聞きしたところ、せっかく同じ活動をしているのに、他のお店との繋がりが全くない、とりあえず一度、参加店舗の店主皆で集まって話し合う機会をつくってほしいと、お答えになりました。

図書館が何か働きかけるというより、まとめ役／仲介役としての要望であったことに、少し意外だと感じました。まちじゅう図書館の当初の構想として、各店舗の蔵書に管理コードをつけて、図書館側で

まとめて管理をするという案もあったそうです。しかし予算の都合などで、結局は個々の店舗で利用法などすべて決定する形になったそうです。その結果として、各店舗の個性・自由性が生じました。今回お話を伺った店長さん達はいずれも、そのことを前向きに捉えているようでした。だからこそ、現状の図書館に望まれている姿勢も、総元締めとして指揮をとることより、連携の後押し、補佐をすることになっているのかもしれません。



かねいちくつろぎサロン 外観



かねいちくつろぎサロン 内装

館内業務の合間、職員の佐藤さんとこれまでの実習で得た情報について、話しました。基本的に運営体制が異なるためか、博物館や美術館の活動については、必ずしもご存知でいるわけではないようでした。一度共催したためか、鴻山記念館の「妖怪夜会」はご存知でしたが、その後については、把握していられなかったようで「まだ続いていたんだ」と少々驚いたようにこぼしていました。

まちじゅう図書館について話題が移ったところ、佐藤さんから、お店の方たちが何か、図書館に対するご不満や要望といったことをおっしゃっていたか尋ねられました。そう聞かれたものの、ほとんどは好意的なお話ばかりでした。強いて言うなればと、かねいちサロンのおかみさんから、「まちじゅう図書館のパンフレットの新しい版は出ていないか、出たらずひサロンに置こうと待っているのだけれど、なかなか新しいものが出ないようだ」と言われたことを伝えました。実はまちじゅう図書館は、各店舗では活動が続けられていますが、先導役であったはずのテラソが、その活動にあまり関わっておらず、各館の実態も、把握しているとはいえないのが現状なのだそうです。その背景として、テラソの人事の変容があるそうです。

まちじゅう図書館の企画は、テラソの建設時から進められていたもので、当時の館長であった花井裕一郎氏が舵取りをしていました。その花井氏が任期を終え、退職される際の引継ぎに難事があったらしく、一時館長不在で運営していた時期もあったそうです。同時に、開館当時から関わっていたスタッフもほとんど退職してしまい、現在残っているのは佐藤さんを含めて2人だけになってしまったとのこと。当初5年で100軒を目標としていたまちじゅう図書館も、5年目の2016年、18軒にとどまっています。そんな風に、各店舗に任せきりにしていることに対し、申し訳ない気持ちがあるとおっしゃっていました。

企画や取り組みは「やることは簡単」だけれども、継続していくためには、人材の育成や先見性が重要とのことでした。また、民間が参加することの難しさもあるそうです。町には町の言い分、企業には企業の言い分があるとのこと、それらを汲み取りながら計画を進めなければならない困難が生まれるようです。テラソでは、新しい図書館を目指し、館長を公募しました。前館長の花井氏も現在の関館長

も、図書館とは違う業界で活動してきた方でした。これは同じ長野県内の図書館が前例となっているほか、全国的にも同じ試みが広まりつつあります。ツタヤ図書館をはじめ、現在、市民と公共施設・民間企業と公的機関の連携はますます増えて行っています。一方で、企業・施設・住民間のズレによる問題が発生し、各地で議論を呼んでいます。まちじゅう図書館やオープンガーデンのように、官民一体となった取り組みが生む新しい力は、大きい反面、舵取りを重くすることにも繋がるのかもしれないと考えました。

4. 活動の成果 苦労したこと、良かったこと、学んだこと

① 苦労したこと・反省点

これまで観光以外で他県の町に滞在したことがなかったため、東京とは勝手が違うことに、新鮮さと戸惑いを感じました。特に長野市電が電子券使用不可の有人改札だったことや、電車の本数がかなり少ないことに驚かされました。

今回の実習で一番、反省すべきと感じたことは、実習先とのコミュニケーション不足と、自分の認識不足でした。先方が公共施設で、過去に実習生を受け入れた経験があることや、全国的にも知られていることから、それだけ魅力や得るものが多く、アピール力があるのだらうと甘えてしまったことです。館内業務をして、街でインタビューして回っているだけでもおのずと情報が入ってくるものだと浅い認識のまま考えてしまっていました。

しかし、実際には図書館の向いている方向は、私が関心を持った取り組みを行っていた頃と少し変わっていました。私自身、自分がどうしても知りたいと考えていることが何であるか、はっきりさせないまま、実習に臨んでしまったことあり、予定が二転三転するなど、結果として実習先の方に、多分に気を使わせてしまったことが悔やまれます。

② 学んだこと

I. 広告・宣伝の重要性

まちじゅう図書館が全国的に知られるようになった背景には、アピールも欠かせなかったというお話がありました。今回の実習で伺った施設においても、館の魅力・町の魅力を発信していくことは、使命でもあり活動の原動力にもなっているようでした。何か活動を進めていくためには、外部だけでなく、協力者となりうる地元の方にもまた周知していくことが必要となるでしょう。内からも外からも関心を集められるよう宣伝をしていくことが重要と感じられました。

II. 人材育成と人情

どんなに素晴らしい取り組みであっても、後続となる人材育成をうまく行わなければ、それまで積み上げてきた人脈や、相乗効果を捨ててしまう事にもなりかねません。まちじゅう図書館や妖怪夜会の事例に見られるように、人が変わってしまったために、発信し続けてきていた情報が途切れてしまったり、変容して伝わってしまうことがあるのだと実感しました。しかし、その一方で、まちじゅう図書館の各店舗自体は、もともと目指していた、読書活動／交流の場として機能を果たし続けているようにも感じられました。それはおそらく、店主さん達の努力によるものでしょう。テラソの介入が少なくても成り立たせられるだけの、意志を持った活動を続けていたからこそ、片一方の環境が変わっても続けていくことができるのかもしれないと思いました。

参画者の強い意志が活動の原動力であると、活動を取り巻く環境や事情が変わっても、何かいい成果

を残し続ける底力が発揮されるのかもしれませんが。その反面、お互いの希望や意志が衝突してしまう恐れもあります。相手と歩み寄るための努力、気遣い、そういった互いの意思を尊重する上で必要となるのが、すなわち人情なのでしょう。

III. 施設間連携

今回の実習では、公営施設から私営店舗まで、様々な学習施設を訪れました。施設には、運営をはじめとした相違点が多々あります。しかし、町づくりや学びへの意欲・取り組みにおいては、同じ目的の下で繋がっているように考えられます。まちじゅう図書館の店舗同士、テラソ、そしてまた博物館・美術館などの施設間で、情報共有をし、ネットワークを構築することで、学習者にとってより利用しやすく、また、活動が活発になるのではないかと考えました。各施設が持っている情報・資料・人材を相互に把握し、活用していく。そのためには、集まること、そして話し合いの場を設けることが必要となってきます。はじめは、不定期イベントやキャンペーンなどの開催で協力し、徐々に定期的な場を設けたり、委員会を立ち上げるなどして、段階的に共有を進めていくことが、良いのではないかと考えました。

③ 良かったこと

3日目に訪問した鴻山記念館とおぶせミュージアムは予定にない活動となりましたが、小布施町の歴史についてなど、興味深い話を多く聞くことができ、広い視点から考える契機となりました。自分の関心事だけに気を取られていては、おそらく得る事のできない有意義な経験であったと感じています。町や施設・活動を見るだけではなく、人が持っている知識・経験を聞くことが、どんなに大切か改めて思い直しました。実習の間や後日、見聞きした事を書き留めている時には、長い本を読んだ後のような充足がありました。拙い聞き手だったにも関わらず、それだけ多くの情報を話してくださったことが、感慨深く思えました。

ついで余談ですが、最終日の朝、宿泊先のユースホステルから駅と図書館の方に向かっていたところ、車で通りがかった地元の方が、ご厚意で駅まで乗せて行ってくださいました。本業とは別に資源回収のため、町内を回っている途中だったそうです。また、同日にはちょうど、小布施町出身で、リオ五輪競歩で銅メダルに入賞した、荒井広宙選手のパレードと祝賀会が開催されていました。その祝賀会が行われているホールの前を通りがかったところ、地元の方が屋台でおでんを振舞っていました。その方達もボランティアで、イベントがあると活動するそうです。実習の間、話にはよく聞いていて、それまでお世話になった方々にも感じていたことではありますが、自分から親切にすること、他人のために動くこと、それが当たり前のようにできる、人の良さが感じられて、幸せな気持ちになったことが印象に残りました。

5. 今後の課題と展望

まちじゅう図書館の活動は、各店舗の努力によって維持されているのが現状です。今は事情をよく知る方たちが館長として活動を続けているため、テラソや各店舗同士によるコンタクトを取れば、改めて今のテラソによる、まちじゅう図書館の未来図を描くことができるでしょう。参加者の方が意欲的に動いている間は、図書館に求められている役割は、個々を尊重したまま、緩やかな繋がりを保つための仲立ちだと思われます。そして、何か変化が起こった際には、先導役として動くことが求められるでしょう。たとえば今後、お店の方が引退や継承により、事情が変わってしまった際、どのように継続していくか、他の店や図書館が、知恵や人材を貸せるような協力体制を構築していくことが必要になってく

ると考えました。まずは、各館の実情と要望を話し合える機会を持ち、今後、運営を続けていくため、規模を拡大していくための提言や、委員会などの組織構築を行うべきだと考えます。

出典・画像引用サイト等

- ・小布施町立図書館まちとしょテラソ of 「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」
<http://machitoshoterrasow.com/>
- ・小布施町公式ホームページ ホーム
<http://www.town.obuse.nagano.jp/>
- ・小布施文化観光協会公式サイト「信州小布施案内図録 - 小布施日和」(小布施観光協会)
<http://www.obusekanko.jp/index.php/>
- ・小布施散策ガイド～栗の町で歴史にふれる～
<http://www.gobuse.com/>

【実習報告 5 滋賀県近江八幡市】

おやじ達の背中から学んだコミュニティづくり

ー退職男性グループ「おやじ連」の活動からー

人間学部人間科学科 4 年 戸澤奈未

キーワード 伝統文化 ボランティア 地域づくり 仲間づくり



地域住民の手によって保全された八幡堀

私は近江八幡市での約一週間の実習を通して、人との関わり・コミュニティづくりの大切さを学びました。おやじ連の様々な活動に参加させていただいた経験から、仲間と共に活動することの楽しさや苦勞を伝えたいと思います。そして、今後の課題や若者との関わりについて考察しました。

1. 地域紹介

近江八幡市は滋賀県のほぼ中央に位置し、総面積は 177.45 km²（うち琵琶湖 76.03 km²）、2016 年 10 月現在の人口は 82,117 人です。

市内北東部に広がる琵琶湖最大の内湖である西の湖には、湿地帯が広がっており、そこでは一面にヨシが生い茂るヨシ原の光景を目にすることができます。このヨシ原を中心に、周辺の田畑、里山、西の湖と琵琶湖を結ぶ八幡堀といった水郷景観が、重要文化的景観の第一号として選定されました。八幡堀は時代劇の撮影場所としても使われています。このような自然豊かな景観や風情のある街並みが、多くの人を魅了しています。

2. 実習概要

(1) 実習の趣旨

近江八幡市の文化的資源を活かした学習と地域づくり活動を学ぶことを目的としました。地元「おやじ連」の活動に参加させていただき、まちづくりに関わるボランティア学習や地域活動の体験実習を行いました。また、地域活動団体の一つである「NPO 法人百菜劇場」の活動にも参加させていただき、地域づくり学習に関する理解を深めることができました。

(2) 背景—近江八幡市を選んだ理由—

近江八幡市のおやじ連を知ったきっかけは社会教育主事の資格を取るための必修科目である「生涯学習施設実習」という講義を受けたことです。この講義では生涯学習を取り扱っている施設や団体を訪問し、その地域に根付く学習を体験的に学ぶことを目的としています。私が社会教育主事の資格を取ろうと思った理由は、社会教育主事が公民館などの社会教育施設で講座の企画や実施をするという仕事内容を知り、興味を持ったからです。社会教育主事の講義の中では、度々「生涯学習」という言葉が出てきました。私は最初、生涯学習は学校教育のような勉強のイメージを持っていました。しかし、講義を重ねていくにつれ、生涯学習とは学校教育や社会教育、そしてボランティアや趣味活動など様々な機会において行う学習ということが理解できました。子供からお年寄りまで全ての人の学びであること、さらに趣味といった自分の生きがいになるものまで生涯学習に含まれることが分かり、とても素晴らしい考え方だと思いました。

私が今回実習先として選択した近江八幡市は、まさに「生涯学習」という言葉がぴったりの場所でした。様々なスキルを持ったおやじさん達が、定年退職後に新たなフィールドでボランティア活動や趣味の活動に励んでいるとのことでした。「おやじ連」はこのようなおやじさん達の集まりということで興味を持ちました。当初は知らない土地、知らない人々のところに行くことに大きな不安を抱いていましたが、近江八幡市やおやじ連の活動を調べていくうちに、ワクワクとした感情が芽生えました。

(3)生涯学習としての位置づけ

おやじ連の活動の学習形態は、イベント型・団体型・社会貢献型です。一人で行う場面は少なく、みんなで取り組むことが特徴です。学習課題については、「要求課題」と「必要課題」が挙げられます。要求課題とは、明確な学習への動機付けとなっている顕在的テーマや関心のある課題のことを示します。一方必要課題は、学習者の要求としては自覚されませんが、教育目的や目標に照らし学習する必要性のある課題のことです。おやじさん達は、自発的な興味、関心によって様々な活動していますが、同時に環境課題などの必要とされる課題にもアプローチしているため、両方の課題を満たしているといえます。

(4)実習の日程

- 1 日目：8 月 22 日(月) いまさかプロジェクト、近江八幡市案内
- 2 日目：8 月 23 日(火) ポレポレ 25 の料理作り定例会
琵琶湖へのドライブ案内、
- 3 日目：8 月 24 日(水) 白鳥川の景観を良くする会のヒツジの牧柵・宿舎の撤去
水曜サロンの水彩画制作
- 4 日目：8 月 25 日(木) NPO 法人百菜劇場のイベント参加、八幡堀の見学
- 5 日目：8 月 26 日(金) 出川先生の運転で水郷や西の湖の探索
- 6 日目：8 月 27 日(土) 八幡山の景観を良くする会のコナラ林&遊歩道除草作業

3. 実習内容

(1)「おやじ連」とは

近江八幡市では、平成 13 年度から退職男性の閉じこもり対策、居場所作り、仲間づくりを目的として「男の料理教室講座」が開催されました。そこに参加した“おやじ”たちが、毎年 1 つずつ料理教室同窓生による退職男性グループを結成しました。やがて、グループの所属に関係なく参加したい人が定期的に集まって活動する地域のボランティア団体がいくつも立ち上がりました。このような経緯から、現在では 25 団体・350 名の近江八幡おやじ連（通称：おやじ連）が誕生しました。

～近江八幡市退職男性グループ～

平成 14 年 健康推進友の会：料理教室

平成 26 年 ポレポレ 25：料理教室・スポレク・ボランティア

平成 28 年 ひつじの会シープス：料理づくり

～自由参加のボランティア団体～

【環境活動系】

白鳥川の景観を良くする会：白鳥川の草刈・ゴミ拾い

八幡山の景観を良くする会：竹林・コナラ林整備

市民・生ごみリサイクルプロジェクト：生ゴミリサイクル学習会の開催

いまさかプロジェクト：いまさかの整備

【趣味・親睦系】

水曜サロン：水彩画や紙芝居の制作

よし笛会：びわ湖よし笛ロードに四季の花を咲かせる活動

頂いた資料を参考に作成。25 団体中の一部の団体を表記。

(2)いまさかプロジェクトー耕作放棄地の再生ー

おやじ連の有志が参加するいまさかプロジェクトの活動を見学しました。近江八幡市円山町の中洲に位置する放置田圃の再生利用に着手し、このプロジェクトが立ち上がりました。10 年以上放置された元田圃は雑木・茨が茂りジャングルと化していたそうです。約一年の歳月をかけて整地し、野原に戻すことができました。毎月の手入れを実行することは、想像するよりも遥かに大変な苦労があったのではないかと感じました。

いまさかにはカヌーに乗って上陸しました。この日は 9 人でいまさかの整備を行いました。先月できなかったから 2 カ月ぶりとおっしゃっていて、草が生い茂っていました。草刈り機を使い、それぞれ分担して草を刈っていました。とても暑かったこともあり、皆さん汗だくになっていました。私は作業がひと段落した後、カヌーイストでもある江川さんと一緒に、いまさかの周りをカヌーで一周しました。カヌーを漕いだのは初めてでした。風が強くなると漕ぐのが大変で、腕が筋肉痛になりそうでした。ですがそれ以上に、自然の中を巡ったカヌー体験は気持ちよく、楽しかったです。

いまさかでは野菜や果物を作っています。春にはサツマイモ掘りをする収穫イベントを開催しているそうです。「八幡には山や川など遊べる所がたくさんある、とても良い所。子ども達に近江八幡を親しみ、愛してもらいたい」とおっしゃっていたことが印象的です。たくさんの親子が参加する、楽しそうな写真を見せていただきました。



写真 1：生い茂る雑草とおやじ達



写真 2：カヌーから見えた風景

(3) ポレポレ 25 の料理教室－料理は人との距離を縮めるもの－

今回私のホスト役を引き受けて下さり、大変お世話になった東森さんが率いるポレポレ 25 を紹介します。ポレポレ 25 は平成 26 年に誕生した退職男性グループの一つです。タンザニア語で「のんびり・ゆっくり」という意味のポレポレと、平成 25 年の料理教室講座のメンバーで結成したと言う事で、【ポレポレ 25】に決まったそうです。ポレポレ 25 の皆さんは小学校にゴーヤで作った緑のカーテンを設置する活動など、積極的に地域活動に参加しているようです。集まったときにも、2 カ月先の予定を決めたりと、忙しそうな様子でした。月に一度の料理教室は、総合福祉センターのひまわり館という場所で行われました。この日は“トマトとキュウリのサラダ”“ジャガイモと玉ねぎの塩肉じゃが”“イカと野菜の炒め物”の 3 品を班に分かれて作りました。メニューや作り方も、それぞれの班が月ごとに担当して決めるそうです。おやじさん達は料理教室講座で初めて料理をしたという方が多いとおっしゃっていましたが、皆さんとても慣れた手つきでした。時にはどのように切ればよいか話し合いながら、協力して料理を作りました。一緒に作るということは楽しく、仲が深まるように感じました。料理教室では料理が得意な人は苦手な人に教える、双方の学びが生まれていました。その他にも、英語が得意な人に英会話を教えてもらうことがあるとおっしゃっていました。自分のこれまでの経験が学習資源になっています。学び合えるということが、様々な知識やスキルを持った人が集まるおやじ連の特徴ではないでしょうか。



写真 3：美味しくできた料理

(4)環境ボランティア活動ー汗を流す気持ちよさー

私が参加させていただいた環境ボランティア団体が2つあります。一つ目が、白鳥川の景観を良くする会です。近江八幡市中央部を流れ、琵琶湖へと注ぐ一級河川が「白鳥川」です。白鳥川の景観を良くする会は、この白鳥川沿いの散策路の整備をしています。私は羊の牧柵・宿舎の撤去活動に参加しました。羊に雑草を食べてもらい除草すること、住民の癒しの空間にすることが目的で羊を放していたのですが、この日は最終日で、羊を県畜産技術振興センターに返す日でした。朝8:30から開始だったのですが、8時すぎには皆さん集まっていて作業を開始していました。おやじさんは早起きで少し気が早いようです。私は宿舎に使われていた木材を運ぶ手伝いや、雑草刈りをしました。



写真4：雑草を食べるヒツジ



写真5：宿舎を解体する様子

二つ目に参加した団体が、八幡山の景観を良くする会です。八幡山の麓の竹林は放置され荒廃してしまいました。さらに、コナラ林も雑木やクズのツルに覆われ密林状態になっていたそうです。そこで八幡山の景観を良くする会を立ち上げ、定例的に竹林・コナラ林の整備活動が行われるようになりました。

小雨が降る中、草刈り機や蚊除けの線香をもって作業を行いました。私は遊歩道に生えているアサガオのツルが伸びてしまった部分を鋏で切る作業や、手作業で雑草を抜いたりしました。この会の代表である村西さんに、「きれいになると気持ちいいでしょう？」と話しかけていただきました。本当にその通りで、うっそうと茂っていた草がなくなると気持ちよく、達成感を味わえました。作業をしているとすぐに時間がたってしまいます。この有意義な時間の活用も、活動の魅力ではないかと感じました。

(5)NPO 法人百菜劇場ー人の繋がりを実感ー

おやじ連の活動ではなく、NPO 法人百菜劇場という地域団体が開催しているイベントにも参加させていただきました。百菜劇場は安心・安全な食のネットワークづくりを目指して活動をしています。農薬や化学肥料に頼らない農業を広めるための講座やイベントを開催していて、この日はピザ作りをするというイベントを行っていました。百菜劇場で作っ

た野菜を使い、生地から手作りのピザを作りました。近所に住むお子さんやお母さんが参加していました。子どもたちは上手に包丁を使い、力を込めて生地をこねていました。トッピングには一人一人の個性が現れ、とても面白いなと感じました。また、畑にジャガイモを植えるという農業体験もしました。

最初は大人しい子もいましたが、段々と周りの人に慣れていき、子ども達の楽しそうな笑顔をたくさん見ることができました。東京では中々体験することができない、地域の人々の繋がりがあからこそできる活動だと思いました。



写真 6：野菜やチーズをトッピング



写真 7：ジャガイモ植え体験

（6）まちづくりー住民の意識に感動ー

近江八幡のシンボリック存在である「八幡堀」は、運河として近江商人の交易を支えていました。しかし生活排水によって汚染され、ヘドロが溜まり悪臭を放つようになったそうです。このような問題から、八幡堀の再生・保存活動が行われるようになりました。近江八幡青年会議所によって始まったまちづくり運動は市民にまで広がりました。昭和 63 年には「八幡堀を守る会」が設立されました。市民の参加によって、定期的な清掃活動や周辺環境整備が今でも続けられています。八幡堀を守る会の幸村さんに八幡堀を案内していただきました。八幡堀を再生した理由は「観光のためではなく、八幡堀があるから今の近江八幡がある。それをなくしてはいけない」という声があったからとおっしゃっていました。

八幡堀をはじめ、伝統的な街並みや自然が保全されているのは、地域住民の参加・協力があったからです。歴史や人々の想いを知ること、近江八幡の良さをさらに感じることもできました。

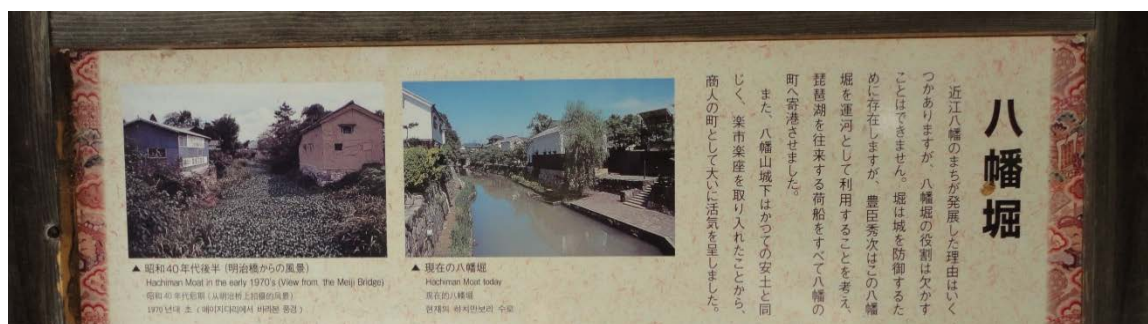


写真 8：八幡堀の案内看板（左の写真が昔の八幡堀です）

4. 実習を通じて感じたこと

(1) 仲間づくりの大変さ

おやじさん達は皆仲が良く、楽しそうに活動している姿が印象的でした。現役時代の役職などと言わないことがルールとなっていて、平等な関係が築かれていました。私がこの実習を通して最も苦労したことが、グループの中に入ることです。既存のグループ、誰も知らない人がいる中に入ったとき、どのように振る舞えば良いのだろう、どうすれば皆さんに馴染めるだろうとモヤモヤと考えてしまいました。緊張してしまい上手く話せなかったり、積極的に行動することができないこともありました。実習を終えて、もっと自分から話しかければ良かった、もっと自発的に動ければ良かったと反省点ばかりが浮き彫りになりました。

私が感じたことは、おやじ連に所属する人誰もが経験したことがあることかもしれません。最初は皆知らない人同士が集まり、一から関係を構築していきます。時には気が合わないと感じる人が現れることもあるでしょう。仲間というものは、お互いの良いところ、悪いところを認め合いながらできるものだと思います。生きていく中で幾度と新しい関係を築いていくことがあると思いますが、それは生涯続くのだと実感しました。私のもっとこうすれば良かったという経験は次に繋がります。このように学び合いながら、おやじ連はそれぞれの個性を活かしながらも、まとまりのある集団になっているのではないかと考えました。

(2) 人との出会いの素晴らしさ

実習期間中、色々な人に出会いました。生ゴミの処理について詳しい人、ひもの結び方に詳しい人、60 歳以上の方が通う大学に行っている人など、物知りな方ばかりです。その中でも、多くの時間を一緒に過ごしたポレポレ 25 のリーダーである東森さんを紹介したいと思います。東森さんは一見怖そうに見えましたが、とても明るく、とても優しい方です。近江八幡市観光ボランティアガイド協会にも所属しているため、近江八幡のことに詳しく、街の中を案内・説明していただきました。そんな東森さんですが、ガイド協会に入る前はあまり近江八幡のことを知らなかったそうです。入ってからどんどん興味を持ち、近江八

幡の歴史の奥深さに触れていきました。おやじ連の皆さんに共通してある特徴が、学びたいと思う気持ちではないかと感じました。新しいことに挑戦し、自分の視野を広げているようでした。その他にも、「おやじ連に入る前はあまり活動的ではなかったが、おやじ連に入ったことがきっかけで外に出るようになった人もいる」とおっしゃっていました。

このように、おやじ連の活動を通して出会う人がたくさんいます。色々な人の刺激を受けてもっと自分を高めたいと思う人や、もっと皆と活動したいから健康に気をつけようと思う人もいるかもしれません。人との出会いの素晴らしさこそ、おやじ連が長く続く秘訣ではないかと感じました。



伝統的な街並みと筆者

(3) 楽しさと生きがい活動の源

「なんで皆笑顔で楽しそうにやっているか分かる？それを考えたらおやじ連のことが分かるよ」おやじ連の代表高橋さんの言葉です。それは“自分のため”“皆のため”の活動だからではないかと考えました。やらされているのではなく自分がしたいからボランティア活動を行う、全部自分の判断で主体的に活動していました。そして、暑い中でも皆さんいきいきと活動していました。自分自身も暑くて大変だなと思う反面、綺麗になる喜びと皆で一緒になって活動する楽しさを実感していました。また、趣味の活動で水彩画を描いている水曜サロンを訪問した際には、好きなことを共有できる楽しさを感じました。

自分たちの楽しみや健康づくりの活動が派生して地域づくりへと繋がっていました。自分たちの活動が地域の人のためになる、誰かの役に立てることはとても嬉しいことです。おやじ連の活動は、おやじさん達一人一人の生きがいとなっていました。



写真 10：水彩画制作。女性も参加

5. 首都圏の施設との連携方策について

おやじ連では毎年1月に「近江八幡おやじ連作品展」を開催しています。絵画・写真・陶芸・竹&木工芸・ほか各グループの活動紹介パネル等が展示されます。私は展示された作品の写真を見せて頂いたのですが、本当に多種多様で、素晴らしい作品ばかりでした。

この作品展を東京都池袋にある生涯学習施設、みらい館大明で行われる「大明まつり」

で開催するのはいかがでしょうか。私はこの実習に行くまでおやじ連という言葉を知ることがなく、全くの無知の状態でした。実際に行ってみて、一番驚いたことはおやじさん達の元気さです。私の父はまだ働いていますが、特に趣味があるわけでもなく、将来はどのように老後を過ごすのだろうと心配になります。そのため、おやじさん達の動きっぷりや楽しそうな姿に衝撃を受けました。私はインドアで運動することはめったにありません。しかし、一週間おやじさん達と一緒に過ごし、体を動かすことの気持ちよさを学びました。そしてたくさんの元気やパワーをいただきました。このおやじ連の活動をもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。そこで大明まつりでの展示は、とても良い機会だと思いました。大明まつりに訪れた人が展示品を見て、自分もおやじさん達のように生き生きと活動したいと影響を受けるかもしれません。そしておやじ連のような活動が都市部にも広がり、高齢者の活躍の場が増えるきっかけになってほしいと感じました。

6. 今後の課題と展望

おやじ連の活動は、強制されることなく、自由参加が基本となっています。しかし、ボランティア活動をするにあたって人手が必要だったり、人数が集まらないとできないこともあるようです。より多くの活動に参加したいと思う人もいれば、気が向くときだけで良いと思う人もいます。一人一人の気持ちを尊重しながら、継続させるためにどのように折合いを付けていくかが活動の課題ではないかと感じました。

また、毎年新しい仲間が増えることで生じる問題もあるのではないのでしょうか。同期グループの活動以外の環境活動などは、誰でも参加可能です。そのため、上手く仲間に入れないことがあるかもしれません。もともといる人は経験豊富で知っていることが多いですが、初めて参加する人は何をすれば良いか分からないことがあると思います。実際に私も、皆さんがてきぱきと動いている中、いったい何をすればよいのだろうと戸惑いました。それは私の周りの方とのコミュニケーション不足が一番の要因です。この経験から、新たなメンバーと既存のメンバー同士の関わり合いが重要だと思いました。自分で判断して行動することも大切ですが、どんどん話しかけて仲間になりたいと思う気持ちを表現することが、コミュニティに所属する上で大切なことだと学びました。

7. 若者との関わりについて

前原（2008）は、エリクソンの発達理論を基に、老年期における社会との関わりについて述べています。老年期の発達の課題は、自我の統合性と絶望です。エリクソンによれば、老年期の発達課題である統合は、若い世代とのかかわり、祖父母的生殖性を発揮することによって促進されるといいます。ここでの祖父母的生殖性とは、「親としての生殖性に固有の責任は負わずに、孫たちを導き、愛し、世話し、役に立ってあげることができる」という意味です。孫を世話し、孫の成長を見守ることはこれまでの自分の中年期の発達課題である生殖性を再評価し、受け入れることにつながると述べています。さらに、伊藤（2013）

によれば、エリクソンは、個人が高齢期に遭遇する数々の危機に直面し自らの課題を解決する過程は、その解決を通じて本人の中に人生を生き抜いていく自我の強さが獲得されるだけでなく、その姿も見ている若い世代を同時に育て、将来彼らが高齢期を生きていく時の良きモデルとなるのだと指摘しています。

このように、老年期において自我の発達を促すには、子どもとの関わりが重要ということが分かります。また、若い世代にとっても高齢者と接することは成長につながると考えられます。実際におやじ連の活動の中にも、子どもが参加・見学できるイベントが開催されていました。しかし、いまさかでのサツマイモ掘りのイベントを始め、小学生までの子ども達が多く参加している印象を持ちます。私も小学生のときには地域の催し物に参加していましたが、中学生になるとあまり顔を出さなかったように感じます。そこで、私は近江八幡市に住む中学生・高校生を対象に、おやじ連の活動に参加できるプログラムを提案したいと思います。そのプログラムは、私が行ったように、夏休みを利用して一週間の体験学習を行います。少人数のグループで参加して、ボランティア活動や料理教室を通しておやじさん達と触れ合うことを目的とします。普段の生活の中では、祖父母との関わりのみで他の年配の方と関わることは少ないと思います。また、思春期になると都会への憧れが強くなったり、地元の良さが分からなくなることもあると思います。そのため、おやじさん達の言葉で近江八幡の良さを聞くことや、他愛ない話をするのは刺激になると考えます。そして実習の成果を新聞のような形でまとめ、子ども達の親にも配ります。親世代でも、おやじ連の活動の存在は知っていても具体的にどのような活動をしているのか知らない人もいるのではないのでしょうか。地域で活躍するおやじさん達を知ることは、地元への信頼感に繋がると考えました。そして、おやじさん達にとっても様々は想いを持った中学生・高校生と接することは、生きる上での活力になると感じます。したがって、おやじさん達と若者達が結ばれることで双方が学び合い、より良い地域づくりへと発展していくのではないかと考えました。

8. おわりに

私はおやじさん達の姿をみて、「自分もこんな風になりたい」と感じました。仲間とともに汗を流し、楽しそうにおしゃべりする姿はとても輝いて見えました。私は自ら人と関わることに苦手意識を持っていましたが、人と関わることの良さをたくさん知ることができました。一人でいる方が楽だと感じる一方、寂しさや孤独感を感じることもあります。充実した人生を送るためには、一人では成し遂げられないことを学びました。私はこれからの人生において、積極的に自分を表現し、楽しい時間を共有できる仲間を多く作ってみたいと思いました。そして、自分を表現するフィールドは、学校生活や職場だけでなく、地域に根差す活動やボランティア活動、趣味団体など地域社会に多く存在することが分かりました。多くのことに気づかせてくれたおやじ連の活動は、私にとってとても価値のある経験になりました。おやじ連の活動がこれからも長く続き、おやじ連の皆様が元気に活

躍される姿を期待しています。

参考・引用文献

近江八幡おやじ連・冊子プロジェクト「おやじ達の青春物語」暮らシフト研究所，2016

大正大学社会教育主事課程「地域づくり学習のフィールドワーク手引きー平成 27 年度生涯
学習施設実習報告ー」株式会社ティー・マップ，2015

前原武子「発達支援のための生涯発達心理学」株式会社ナカニシヤ出版，2008

伊藤俊夫「新訂 生涯学習概論」株式会社ぎょうせい，2013

Ⅱ. 研究報告

【1. 新潟県粟島浦村】

粟島しおかぜ地域共生プログラムの実践研究

高齢者のお手伝いプログラムを軸とした観光・産品開発・首都圏連携活動の創出



指導教員：地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

参加学生：

文学部歴史学科	4年	角田祐基
文学部歴史学科	3年	高橋咲紀
文学部歴史学科	3年	飯塚仁美
人間学部教育人間学部	3年	幅野裕敬
人間学部人間科学科	2年	須藤彩乃
人間学部臨床心理学科	2年	本多 龍
人間学部臨床心理学科	2年	兵頭衣織

※本章の内容は「H27～28年度新潟県大学生の力を活かし集落活性化事業」の支援を受けたものです。

I. 地域とプロジェクトの概要－前年度事業経過を踏まえて－

1. 栗島浦村について

栗島浦村内浦集落・釜谷集落は、人口350人余り、日本海に浮かぶ周囲20kmほどの離島である。本土側からは、新潟県最北端の市である村上市より汽船で一時間半ほどの場所に位置する。澄んだ海と豊富な海産資源、そしてかつては野生馬を産んだ里山の恵みが魅力だ。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯で、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明媚な景観が広がる。

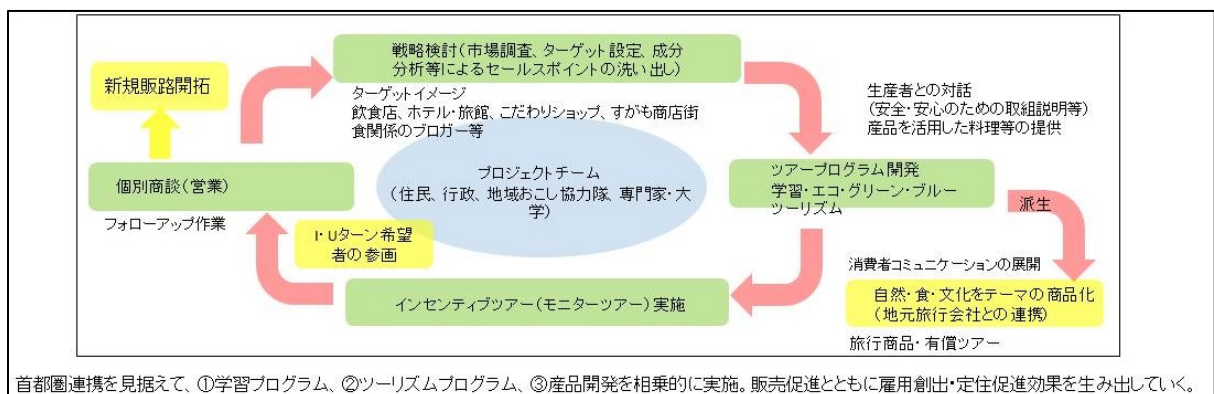
近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口は最盛期の半分以上となっている。若手の人手不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されている。そのため、村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につなげる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めている。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが必要であり、島外に暮らす地元出身者や島暮らしに興味をもつ若者等協力した地域おこしによる地域経済の活性化が求められている。

2. 事業全体（H27～28年度）の概要

（1）プロジェクトの概要

人口減少が著しい社会的条件の中、栗島においては離島の自然・文化的特性をいかしながら島内住民だけではなく島外者とも協働連携しながら取組んでいける新たな方策が必要不可欠となっている。

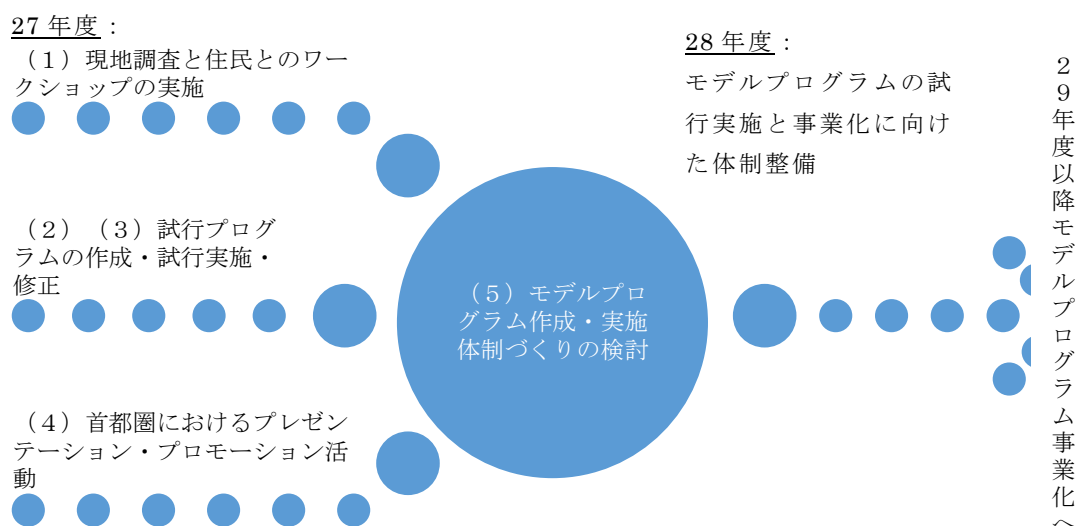
本事業では栗島浦村の地域に根ざした自然・文化・人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを軸に取り組みを進める（下図）。



プログラム作成のための調査、プログラムの試行、事業化に向けた体制整備検討活動を通じて、既存団体を含む活動体の組織強化を図る。あわせて首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたロードマップとヴィジョンを明確にしていく。

3. 前年度（27年度）事業の概要と課題

27年度は、プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行った（下図参照）。



以上の結果を踏まえて、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラム「あわしまおじいちゃん・おばあちゃんとの出会いとお手伝い」を構想し取りまとめた（次頁参照）。島内の様々な身近な資源を島外者との交流の中で保全・活用していくことを構想したものとなっている。

あわしま

おじいちゃん・おばあちゃんとの 出会いと島のお手伝い

お手伝いプログラムの概要

栗島の美しい海は、里山や畑で育てられずにはいられない。島民の生活に
よって育まれていく。そこに里山のおじいちゃん・おばあちゃんたちは
長年わたって里山の手入れを行い、海を眺め、この美しい海を
守りつづけています。

このツアーは、島外からの来訪者と島の人がたがもに、里山・畑・共
同作業・各種行事・伝統行事の参加を兼ねた観光の機会として、お手伝
いに参加して頂くことで、心と自然を元気にしていくプログラムです。

栗島とは

栗島浦村は人口300人余り、日本海に浮かぶ面積20km²ほどの離島の
村です。本土側からは新潟県最北端の市である村上市で、汽船で1時
間ほどの位置にあり、豊かな海と豊かな山を背景として、里山や野
生鳥を育んだ里山の恵みが魅力です。西海岸は日本海の荒波に洗われ
た岩場と、東海岸は穏やかな湾に囲まれ、まさに絶景と評される、自然の
絶景が広がっています。

モデルスケジュール例

<1日目>

昼	栗島港到着・昼食とレクチャー
午後	プログラム1 里山・畑・共同作業から季節に応じ て選択 ※雨天時はテゴ編み作り
夕	プログラム2 郷土料理教室・会食

<2日目>

午前	プログラム3 里山・畑・共同作業から季節に応じ て選択 ※雨天時はテゴ編み作り 乙姫の湯(温泉)入浴
昼	昼食・出発準備
午後	栗島港出発

持ち物・服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)
帽子・手ぬぐい・入浴用具等

東京から岩船港まで

村上駅から岩船港まで

バス

村上駅 約20分 2,900円
岩船大町 徒歩10分 岩船港

乗り合いタクシー※要予約

15分 中学生以上700円
小学生350円(未就学児無料)
乗車30分前までに予約
予約先: 栗島汽船株式会社 (tel:0254-55-2131)

フェリー

普通船「フェリー-栗島」 新高速船「awaline きらら」

※高速船は要予約
予約・問い合わせ
観光案内所 tel:0254-55-2146 受付 8:30-17:00
当日の問い合わせ先
栗島汽船
岩船 tel:0254-56-7792 受付 7:30-17:00

本プログラムに関するご相談は、
随時と都庁を結ぶ地域づくり学習研究会
(大正大学地域構想研究所・出川)まで。
tel 03-5394-3048
fax 03-5394-3055
mail s_degawa@mail.tais.ac.jp

島のおばあちゃん・おじいちゃんお手伝いプログラム

①春: 畑仕事のお手伝い 3~10月
3月~5月種まき・6月~10月収穫
葉物類の収穫と、じゃがいも・えんどう・玉ねぎ・金時
豆・かぼちゃ・さつまいも・長芋などの栽培のお手伝い。
島のお母さんたちと一緒に畑仕事をして、採れた食材を
使った伝統料理に親しむことができます。

②春: ワカメ採り・浜清掃・山道作り 3~4月
集落の大切な生業の一つワカメ採り。集落共同でワカ
メの収穫を行い、部位で分け、干していきます。作業後の
交流会でいただく生ワカメのしゃぶふは絶品です。
また、浜清掃や大工仕事が必要な山道づくりなど、島の
暮らしに欠かせない作業のお手伝いをします。

③春: 山菜採りのお手伝い 3月~5月
里山を歩いて山菜の収穫、そして塩漬け・蒸すな
どの加工のお手伝い。山菜は月によって採れるも
のが違い、様々な収穫物を味わうことができます。
また、作った料理は食べたり、お持ち帰りしたりで
きます。

④春・秋・冬: 郷土料理教室
山仕事や畑仕事の後は、その恵みを
料理に。収穫したばかりの山菜や野菜
を、栗島の海の幸と合わせていただくプ
ログラムです。島のおばあちゃんたちから
郷土料理、手料理を学び、一緒に試食
をします。

⑤秋: 畑仕事のお手伝い 10~11月
大根・かぶ・大豆などの収穫と、にんにく・葉つ
葉の種入れ、キャベツの種付けをお手伝い。
来春に向けて作物を植え付けたり、島の冬の畑
について体験することができます。また、冬なら
ではの郷土料理を楽しむこともできます。

⑥秋: 磯道普請のお手伝い 11月
冬の岩海苔つみのための道づくりのお手伝
い。海の裏手の山にクワなどを使って通り道を
作り、冬でも海におりられるようになります。また、
磯道を使って収穫できる岩海苔・その他海産
物を楽めます。

⑦秋: 里山再生のお手伝い 9~11月
竹・杉・雑木林の手入れをお手伝い。竹の伐採、
杉・雑木林での薪取りをした後、竹灯籠やおもちや、
ストロー・ポリマー用の薪を作ります。作った竹の
おもちやを持ち帰ることができます。

⑧冬: テゴ編みのお手伝い 12~2月
紐、カツラなどの植物で、ポシェットバッグのような
万能物入れを編んで作るお手伝い。島のお母さんた
ちによく使われているテゴは、山菜採りや海産物採
りにも役に立ち、カバンのように使うこともできます。
※雨天時のプログラムにもなります。

島外者もお手伝いできる島行事

島には100近い年中行事が存在していました。その中か
ら島外の方も一緒に参加できる年中行事を5つ厳選。お手
伝いプログラムと共に島人との交流を深めましょう。

- ① 乗り初め漁神楽(1月11日)
漁師の祭り
- ② セタ(8月6日)
舟を流す
- ③ 盆踊り(8月13・14日)
楽しくおどる。事前練習参加
者は太鼓・うたいも可能
- ④ 釜谷六所神社祭礼(10月8日)
竹灯籠作り
- ⑤ 八所神社祭礼(10月26・27日)
灯籠やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ

Ⅱ．本年度（28 年度）事業内容と結果－お手伝いプログラム試行実践を中心に－

1．事業目的－試行研究における 2 つの視点－

平成 27 年度は、首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたヴィジョンについて模索・検討した。その結果、島の里山・畑などの身近な資源、お手伝いプログラムを構想した。本年度は、構想したプログラムを試行実践し、実際に島民・島外者が取組める事業構築を図ることが目的である。

実施に当たっては、次の 2 つの視点を重視した。第 1 に、おじいちゃんとおばあちゃんの魅力と島の底力を引き出すための視点。島外者が島や島に生きる人々を知っていること、あるいは知りたいと思うことがお手伝いプログラムの基盤となるからである。目の前の相手が大切な存在だということにより、その相手の想いや魅力を汲むことができる。この Respect〈尊敬〉の感情をプログラムの中でいかに育んでいけるかということが試行実践のポイントとなる。

第 2 に、島内・島外者が一緒にかかわりながら共に学び・育つという視点である。ここでは、お手伝いプログラムの実施を通じて、島外者の学びや面白さ、尊敬の感情を湧出させていくとともに、それを島民も感じるようにすることで、両者が自己効力感や自尊心を育んでいくことがポイントとなる。これは、短期的な観光では生じることはない。栗島に存在する自然文化人物資源の活用であり、いわゆる栗島の「島時間」の中でこそ培われるものではないかと考えられる。

以上の 2 視点を重視しながら、お手伝いプログラムの試行実践を軸とした調査研究を行った。また、試行実践を踏まえた首都圏での栗島の PR 活動を実施した。

2．事業経過

28 年度の実践研究スケジュールは以下のとおり。

（1）栗島浦村における試行研究

1）第 1 回試行研究（栗島浦村）

- 1 日目 7 月 9 日（土） 地域調査（地元学講習会）
自然体験学校スタッフと調査ノウハウを共有
- 2 日目 7 月 10 日（日） 地域調査（地元学調査）の取りまとめ
自然体験学校スタッフをモニターとして調査体験。

2）第 2 回試行研究（栗島浦村）

- 1 日目 9 月 3 日（土） 島内行事（運動会）の見学
打合せ（自然体験学校・全体行程等確認）
- 2 日目 9 月 4 日（日） 里山（竹林）保全整備活動・海での体験活動
竹を使った流しそうめん 子ども達との交流

- 3日目 9月5日(月) 子どもたちと地元学習会
釜谷・内浦量集落でそれぞれ現地調査・発表
- 4日目 9月6日(火) おばあちゃん畑と食
季節の畑仕事の実施Ⅰ
郷土料理調査・試食
- 5日目 9月7日(水) 島内巡検・観光
- 6日目 9月8日(木) 防災訓練参加
夜、有志にてタコ釣り活動(2杯捕獲)
名古屋大学院生(野鳥研究者と交流)
- 7日目 9月9日(金) 伝統的な竹林作業・記録作業
テゴ編み体験・記録調査
- 8日目 9月10日(土) 11:10 栗島発
- 3) 第3回試行研究(栗島浦村)
- 1日目 11月12日(土) 畑作業の取材・調査
- 2日目 11月13日(日) 村資料館での情報収集
村役場にて今後の活動についての意見交換

(2) 首都圏における発信活動(東京都巣鴨・池袋・神楽坂)

1) 首都圏生涯学習施設での発信活動

10月29日(土)・30日(日)

豊島区生涯学習施設みらい館大明文化祭での展示・発表

2) 大学祭における発信活動

11月5日(土)・6日(日)

大正大学学園祭「鴨台祭」での報告・発表

3) 首都圏飲食店を活用した発信活動

2月25日(土)

神楽坂「離島キッチン」でのトーク&ワークショップイベントの実施

3. 栗島における試行研究内容と結果

(1) 「お手伝いプログラム」試行実施の背景

栗島浦村では、これまで地域振興策として島外者の受け入れを前提とした観光分野や、周辺海域を利用した漁業分野〈海資源の活用〉を主眼に置いてきた。

私たちの前年度からの取り組みでは、この観光・漁業の基盤となる島周辺の海洋環境は、島の里山・農地の健全な営みとつながっているものであることがわかってきた。しかし、島の里山・農地の担い手は高齢者となっており、高齢化と人手不足でその将来像が危惧されている。こうした課題に対して、「お手伝いプログ

ラム」では、島の高齢者が担う里山や農業の知恵技術の継承と人手不足の解消に寄与することを狙っている。

構想した複数のお手伝いプログラムから以下の3プログラムを選択し、試行実施した。

- 1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム
- 2) おばあちゃんの畑仕事と食
- 3) 「島の子どもたちとの地元学」

以下に詳述する。

1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム

粟島の里山では、竹林の荒廃が問題となっている。かつて良質な竹材を産出していた歴史があった。しかし、竹林管理・活用の伝統や技術は、産業構造の変化、人口の減少、高齢化等が相まって、消滅しようとしている現状となっている。本事業の中でどのように竹林管理していけばよいか詳しい方〈男性高齢者〉がご健在であることが分かった。「お手伝いプログラム」を通して、整備保全のためのお手伝い試行を行うとともに、伝統的な竹林整備方法について確認し記録した。

①高齢者の担う知恵・技術による伝統的な竹林整備試行実践

かつて島の竹林産業に携わった経験のあるおじいちゃんお二方に伝統的な竹林整備について教わった。粟島で受け継がれてきた伝統的な竹林整備を知っている方々であり、的確で力強いナタさばきで竹を伐採していた。竹林の現場できばきと指示を出していただき、切った後の竹の置きかたや倒す向き、理想的な竹林としていくためにどの竹を残していくかなどの具体的な指導をいただいた。





今回の活動では、参加した学生たちも果敢に竹に向き合い、最後のほうにはナタもノコギリも上手に使いこなすことができた。最初は鬱蒼としていた竹やぶが自然光の入る竹やぶに変わったのを実感したときは達成感があった。また、お二方からは好意的な褒め言葉もあった。今回整備したことにより、来年以降はタケノコがとれるかもしれないという言葉には皆‘やりがい’を感じた。栗島では、畑をしおかぜから守るため、伐採竹を材にして竹垣を利用しているところも見受けられる。新しい活用方法とともに伝統的な活用方法も改めて見直して、いかに伐採した竹の有効利用を図っていくか検討することが今後求められている。

②あわしま自然体験学校との協働による竹林整備プログラムの試行実施



本年度設立された「あわしま自然体験学校」では『バンブー体験』を体験プログラムに設定しようとしている。体験を通して、自然環境について考え、昔なが

らの工夫や技術についても学ぶことを目標としている。また到達課題として、自身の創意工夫する心を養うことを掲げている。

竹林整備は a. 伐採 b. 運び出し c. 余分な葉を落とす d. 加工という流れで行う。

a. 伐採では、最初手にしたノコギリの使い方が分からず苦戦したが、現地の方に教えてもらうなかで、比較的短時間でコツをつかむことができた。皆で声を掛け合いながら周囲の安全を確認し、竹を倒していく。

b. 運び出しでは、山の斜面から竹を引っ張り出し、トラックへ積載していく。伐採し切断した各3～4メートルほどの長さの竹を一人で引っ張り出し運ぶことは力も体力もいる本来つらい作業である。しかしこの作業を皆で行う中で、運動会の“竹取合戦”を彷彿とさせる楽しく感じることができるよう演出することが可能である。

c. 余分な葉を落とすという作業では、学生たちの多くが初めてナタを使った。指導に当たっていただいたのは島内の女性だが、ナタなどの道具の使い方は、自身の母や嫁ぎ先のお姑さんに教わったとのこと。周囲に十分に注意し、安全に使用しなければならないが、適切な使い方をすれば、腕力に乏しい女子学生でも簡易に葉を切ったり、適切な大きさにわることができた。

d. 加工では、小刀とナタを利用し、伐採竹で箸コップお皿などのオリジナルの食器を作った。作業を行っていると、牧場に遊びに来ていた数人の小学生たちが「何しているの？」と声をかけてきた。この小学生たちも上手な小刀さばきで箸を作り、丁寧にヤスリで竹をみがいた。また、大学生のなかには余った竹で竹トンボをつくり小学生に慕われる者もいた。なかには、自分の自転車の前かごに竹をさして帰る子もいた。現場の工夫で日曜大工的に様々な展開が可能であることが確認された。

以上の竹林作業の後は、作成したオリジナル食器や伐採竹で流しそうめんを行った。食器づくりを手伝ってくれた子たちの他にも島に住む小学生が食べに来てくれた。自分から流し役を立候補したりお手伝いをしたり、下の子の面倒をよく見ている子が多く、楽しい手作りイベントとなった。



栗島自然体験学校と連携したバンブー体験の試行実践の結果、竹林作業を行う以外にも、周辺フィールドでの活動やクラフトを利用した食イベントなどを設定することが可能であることが分かった。こうした一連の体験を通じて竹の手入れ

作業を楽しみながらその意義を理解することができるのではないか。また、初めての人たちや普段話さない人と一緒に具体的な作業を行うことは、コミュニケーションを深め、新たな発見、尊敬の醸成、参加者相互及び自分自身の理解促進につながるものと実感された。

2) おばあちゃんの畑仕事と食

島内の畑作業は小規模、多品種生産という特徴をもっている。そして高齢女性が主な担い手となっている。平成 27 年度のヒアリングでは、高度な機械での作業ではないため、島外者も参加できるものが数多くあることが分かった。今年度は、おばあちゃん 1 人のもとに 2 人の学生が赴き、お手伝いプログラムが運営可能か検証することとした。9 月、11 月の期間を変えて実施し、計 5 組のご家庭の協力を得て実施した。そのうち実施モデルとして 1 組について以下の通り詳述する。

①食のお手伝い

おばあちゃんの生活時間に合わせて、5 時に起床。5 時半には、内浦集落にあるハイシーズンのみ民宿を行っているおばあちゃんのお宅を訪問した。旦那さんは島外の市内の病院に入院し、子どもや孫たちも市内のほうに暮らしているとのこと。にこやかな笑顔と優しい物言いに遠くにすむ祖父母の家に訪れたかのような感覚を持った。

天候が荒れていたため、朝の畑仕事は食事をとってからとなった。朝ごはんのお手伝いを申し出たが 2 度ほど断られた。だが、簡単な食器出しを頼まれてから



は、食材を切ったり混ぜたりするお手伝いをさせていただいた。前日に畑で採ってきてくださったお野菜をたくさん使用し、豪勢なご飯が完成した。民宿をやっているだけあって、レパートリーに富んだ品々のレシピ本の料理より格段に美味しかった。食事をする中では、お孫さんのお話や島のことについてお話しした。

②畑のお手伝い

おばあちゃんは大の畑好きで、痛い足も畑にたつと痛くなくなるそう。実際よく手入れがされた大きな畑を家の近くに 1 か所、車でしか行くことができない山の上に 2 か所も所有している。移動に使う軽トラックを運転するための免許も 50 歳になってから一発合格で取得したとのこと。



私たちは、おばあちゃんに耕運機の使い方や熟している野菜たちの判別など一から教わった。そして畑の整備や種まきを一緒に行った。おばあちゃんは、数え切れないほどの果物から野菜まで幅広く育てている。各々の収穫時期や数年先の畑の敷地の使い方が、年間スケジュールで頭の中に完璧に入っていることには驚かされる。また、毎日の収穫を怠るとすぐ大きくなりすぎてしまう果物や野菜を私たちは適宜収穫した。一人で食べるには、あまりにも多いため、普段は人におすそ分けしたり、遠くに住む子どもや孫に送るとのこと。持ち帰った野菜で昼はかぼちゃのお餅などを教わるなど楽しいひと時を過ごした。



総じていうと、島のおばあちゃんは、学生の私たち以上にキビキビと動くことができるので、今回の試行実践では、「お手伝いプログラム」というよりは「体験プログラム」と表現したほうが正しいと感じた。また、収穫した多くの野菜たちをおすそ分けしてくださったり、私たちのために作業の世話をしてくださったりするなど、かえっておばあちゃんの負担が大きくなってしまう可能性もあると感じ

じられた。一方で、おばあちゃん側からの要望としては、お手伝い要素として、野菜運び・背の高い果物の保護カバーつけ・風で倒れた野菜を立てること、きめ細かな草取り作業など、季節ごと営農段階ごとに具体的に挙げてもらうことができた。長期的で具体的な視点に立ってお手伝い要素を検討していくことで、畑仕事に素人の島外者でもその力を活かしていく可能性をみつけることができたといえる。

また、おばあちゃんからは「たのしかった」「ありがとう」「またおいで」という言葉をかけていただいた。学生たちの中には、普段早起きも虫も得意ではないし、まして畑仕事は疲れるし大変そうという印象を抱いていた者もいる。しかし、最初は上手にできなかった耕運機を上手に使えるようになって褒めてもらったり、この日植えた種が3日後に芽をだしているのを確認したとき、誇らしい気持ちを感じたようである。取り組みの中に自己効力感を感じさせ自尊心を高めさせる力があることを示しているといえるだろう。



3) 島の子どもたちとの地元学—

今年度、島に新たに設立された「あわしま自然体験学校」は、島の自然・文化を活かした学習資源を観光に活用しようとプログラム開発に取り組んでいる。7月の第1回の試行研究では、あわしま自然体験学校のスタッフに対して、島資源の再発見活用策を考えるための手法を学ぶという趣旨で、前年度に取り組んだ地元学を自然体験学校のスタッフ研修として行った。さらに9月訪問の際には、島に住む子どもたちに島の魅力を見つめ直し知ってもらうために実施してもらいたいという村役場と自然体験学校からの要望で、子どもたちとともに地元学を実施



した。

①あわしま自然体験学校との地元学研修会（7月）

内浦地区において、地元の方や自然体験学校のスタッフと地元学を行う中で、多くの守り神、地元で見かけない多様なものが実っている畑、民家の軒先につるされた芸術的にかわいらしい玉ねぎ、小学生の時に遊んだ路地を彷彿とさせる狭い歩道などを見させてもらい、多くの不思議さや面白さを感じた。一緒に歩いている地元の方が、小学生を見かけると名を呼びかけながら、「仲直りしたんか？」と聞いたりするなど、島のコミュニケーションや近所づきあいの風景の一旦に触れることができた体験となった。

②子どもたちとの地元学（9月）

第2回目試行研究（9月訪問）では、内浦地区・釜谷地区の両地区において島の小学生と地元学を行った。午前中は内浦2チーム釜谷2チームに分かれて地元学を行い、昼食後、取材カードの整理を行い、「興味を持ったカード」を選び発表しあった。意欲的に取り組んだチームもあったが、一方的で子どもたちのなかには「なんで(地元学)するのかわからない」「つまらない」「特に歩いたところでここ〈栗島〉にはなにもない」という声も聞かれた。7月の内浦での地元学とのギャップに最初驚かされたが、子どもたちの話を聞いていく中で、こうした思いがうまれる背景に子どもたちの多くが忙しいスケジュールの中で無理にこのプログラムに参加した者が多かったことを知った。

ここに、子どもたちにとってお手伝いプログラムや地元学等の地域学習活動を進めていく際の留意点が垣間見られる。島の子どもたちはそれらを遊び・知り尽くしてしまったから栗島がつまらない、なにもないと評価したのではなく、詰め込みの傾向があるプログラムに対する反動ではないかと考えられる。都会から訪問した学生たちは、島に来てから、天の川を肉眼で見ることができたことに感動し、太陽が海に少しずつ沈んでいくことに夕食の時間を忘れて見入ったり、自分のペースでのんびりと過ごすといったいわゆる「あわしま時間」の魅力を満喫してきた。こうしたゆったりした幅を持ったプログラムの実施環境が特に島の子どもたちには求められていると考えられる。

4. 首都圏における発信活動-「離島キッチン」でのイベントを中心に-

今年度は、「お手伝いプログラム」の試行実践とともに、首都圏と結ぶ活動にも注力し、豊島区生涯学習施設みらい館大明や大正大学学園祭「鴨台祭」での研究報告や展示発表を行った。

さらに、島根県海士町観光協会が運営する「離島キッチン」と共同で『【離島研究 × 離島キッチン】～大学生とめぐる『栗島』2時間ランチ会～』を開催。学生

による研究発表、移住者による体験談、栗島の料理による交流会を通し、栗島や島・地方の生活の魅力を探った。以下に詳述する。

（１）イベント概要

１）日時・場所 平成２９年２月２５日（土）東京神楽坂・離島キッチンにて

２）実施体制

総括責任者 幅野裕敬（大正大学人間学部教育人間学科３年）

共同責任者 兵頭衣織（大正大学心理・社会学部臨床心理学科２年）

サポーター 高橋咲紀（大正大学文学部歴史学科３年）

サポーター 本多 龍（大正大学心理・社会学部臨床心理学科２年）

顧問 出川真也（大正大学地域創生学部専任講師）

３）実施内容

①研究発表

研究学生による調査で見つけた「栗島の魅力」、離島と都市を結ぶ「お手伝い活動」の紹介を実施。

②ワークショップ

隣席でグループを作成し、栗島体験カードを活用して、１泊２日の体験プランを作成。その後、グループごとに発表してもらい全体で共有。

③トークセッション

Iターン者による「おむすびの家」のご紹介、栗島に移住した理由及び起業した理由をお話頂いた。

④県内大学である敬和学園大学からアマドコロ茶について紹介

⑤特別栗島ランチ御膳でランチ交流

⑥アンケート記入（本報告書末に掲載）

（２）イベント結果

１）研究発表

お手伝いプログラムをはじめとして、栗島での調査活動・体験活動の発表を行った。参加者の方々にお手伝いプログラムに興味を持って頂くことができ、プログラムの詳細やいつから参加することができるのか等多くのご質問を頂くことができた。お手伝いプログラムに対する需要の有無を確認する良い機会となった。

２）ワークショップ

ワークショップの実施により、参加者が栗島へ実際に行くイメージ、行った際の観光イメージを作っていただくことができた。また、都市部の方々が実際にどのようなプランを組むのか見ることができ、今後の研究活動の参考にしたい。

３）トークセッション

トークセッションでは、青柳さんから島外から栗島を見た魅力と島内へ移住して感じる栗島の魅力を語って頂いた。島内・島外、両方の視点をお持ちの青柳さんにお話頂けたことで、別の視点でも栗島の魅力をお伝えすることができ、参加者の方々へ、栗島の生の魅力をお伝えすることができたと思う。

4) ランチ交流

ランチ時は、座席での交流であったが、様々な方と意見交換や情報共有をすることができた。発表ではとりあげきれなかった栗島の魅力や取組の紹介を行うことができた。料理に関しても、参加者の方からは、満足の声が多く、食材に関するエピソードを研究会学生と一緒に話すことで関心をより高めることができた。

5) イベント全体をとおして

栗島のことを知らない方や「淡島」と勘違いしていた方など、栗島についての情報を殆ど持っていない方の参加もあり、本イベントの最も大きな目的である栗島のPRという点について微力ながら栗島の魅力を都市部の方々にお伝えできたのではないかと考える。



(3) イベント来場者からの感想から

イベント来場者からは数多くのご感想をいただいた。次に紹介する。

・3回程度栗島に行ったことがありましたが、新たな発見があり楽しく過ごさせていただきました。

- ・タラの刺身を島では是非味わってみたい。枝豆は素朴な味で飽きずに食べられます。粟島に興味・関心のある方々がこれだけ集まったのはすごいと思いました。まだまだ様々な取り組みの可能性があると感じました。
- ・とてもまとまっていて素晴らしかったです。
- ・ワークショップをしたことで、一方的なプレゼンよりも参加者が島へ行ってみるイメージが描けたと思います。お料理も美味しかったです。
- ・粟島についていろいろ知ることが出来た。何も無いからこそある魅力を感じた。
- ・粟島のこと以外にも、その関係者の方と知り合えてよかった。
- ・粟島の郷土料理を味わうことが出来た。
- ・学生さんたちのパワーを感じました。楽しい時間でした。
- ・学生の方、島に委譲して島の発展に携わって下さっている方たちに感謝の気持ちでいっぱいです。これからもがんばって下さい。
- ・参加者とたくさん話す機会があってよかった。
- ・若い人たちのフレッシュな感性に触れて、元気が出ました。大学の時にこうした活動をするのは良い。
- ・新潟人として枝豆は冷凍だとちょっと。。。最初にスケジュール説明や注意事項を入れるとか。最初の紹介がやや長い。
- ・世代を超えて粟島を話の中心に交流できてとてもよい時間でした。また、毎月の「今月の島」と出して料理を提供している離島キッチンにとっても魅力を感じました。
- ・都会の雑踏の中で生活している若者たちにとって、離島での自然な時間の触れ合いは、大変有意義で貴重だと思うし、日本には 600 もの離島がありますのでこの活動を広げていってほしいと思います。
- ・島での体験、研究発表、これからの取り組み等々大変良かったと思います。島にある眠っている物を探して下さい。
- ・島の良いところをつまみ食いしたような楽しい間隔で、またお料理もとても美味しく満足です。
- ・離島が大好きで卒業論文テーマを離島にしようと思ったこともありましたが。一人で行うのは自信が無く断念してしまったので、少し研究室の皆さんがうらやましいです。私的な出会いを有難う御座います。
- ・離島キッチンはもともと興味があったのでこれで良かったです。学生さんたちから生の声として、島での出来事や感じたこと紹介してもらえて良かったです。
- ・真鱈は癖が無く、油が乗りおいしいので、フライなどは是非商品化していただきたいです。
- ・粟島のじゃがいもを食べてみたいです。粟島ファンを増やしたい。

・その物を感じ、その土地を感じ、とても素敵な商品だと思いました。

(4) イベント運営学生の所感から

イベントの運営に当たった学生の所感を以下に紹介する。

①兵頭衣織

参加者は熱心に大学生の話に耳を傾けてくださり、栗島らしさを伝えることができたのではないかと感じた。

ワークショップの班では、昨年栗島に三度訪れてから大ファンになった男性、別の「あわしま」と勘違いして参加した若い女性、旅行が趣味の男女など出身地・動機が様々な方が栗島について思いを馳せることができた。【一泊二日のプラン作成】においては「二泊三日にしよう!」という話もでたり、サップ(スタンドアップサーフィン)をやってみたい・あわ島のあわにかけてバブルラン等の都会的な若者らしい意見もあった。また、プラン作りの中では「ぼんやり過ごす時間がほしいなあ」などの長期滞在を希望するかたもいた。やはり海の活動が人気で、竹などの活動は安全面の心配や時間についての質問が多く出た。気付かなかった意見や新しい視点が多くあった。

発表では、とても緊張してしまいましたが、栗島の雰囲気や島外者・栗島一ファンとして自身の思いを伝えることができました。ハナコさんが時間の話にふれてくださったり、アンケートにも離島と都市の比較をしてくださる方がいた。

お食事の中では、栗島の村長さんのお姉様と旦那様、お子さんが離島高校に進学している方、地域おこし協力隊を希望する女性などが美味しい食事をきっかけに栗島について活発な意見交換をしてくださった。アイランダーを知らない方がいらっしやったり、料理の作り方を教え合ったり、都会にいらながらも離島に触れたい方は多いのではないかと感じた。

たくさんの方の協力のおかげで、このような素敵な企画をつくりあげたことに感動した。また、大学生だからできる企画だなと感じた。

②本多龍

離島キッチンイベントでは、参加者は地元の常連さんから、その友人である福岡に住んでいる方、他多くの方にいらっしやっていただき、多くの人に栗島の存在を知ってもらえたと感じる。活動報告の後に行ったグループワークは4班になって行った。そこでは夕焼けと星空の観賞を入れている班がほとんどで、みなロマンティックなものに興味があるのだと感じられ、夕日や星空も栗島の自然の一部なので観光資源や自然体験プログラムの一つに十分入れることが出来ると考える。これに関連して、船の上から夕陽を見たいという意見が出ていた。今回の話し合いのテーマが自分たちで旅行の予定を考えるというものの為か、研究会の発

表にあったお手伝いプログラムについて触れる人は私がお話を聞いた人の中にはいなかった。私は調査という形で栗島に行っていたので、何が島のためにどんなことに使えそう、といった視点で見えていた。だがこのイベントでは参加者の方々がどのように島を楽しむかという視点で見えており、楽しそうに話をしていたのでここからもっと栗島の事を知ってほしいと感じた。

③高橋咲紀

私は、主に参加してくださったみなさまとディスカッションをさせていただきました。発表の時点から、栗島がどのような所なのか興味深く聞いていらっしゃる方ばかりで、一泊二日のグループごとにツアープランを考える際にも積極的にたくさんの意見を出してくださいました。使用したカード以外にも違った活動ができるのではないかなど、学生では思いつかないような活動もあげてくださったので、今後の我々の活動の参考にもなる良い時間を過ごすことができました。また、印象深かったことは、同じ班でディスカッションをしていた女性の方が、「こんなにもできることがあると一泊二日ではもったいないね」とおっしゃっていたことです。この言葉を聞いて、栗島には夏の海水浴や釣り以外にも楽しめることがあるということを、都市部の方に少しでも伝えられたのではないかと非常に強く感じました。

(5) イベント総括と今後の課題

都市部でのPRという点において概ね成功と言える結果となった。集客に関しても、栗島浦村の皆様をはじめ、多くの方々のご協力により、当初予定の20席を超え30名近い方々にご参加いただき、満席とすることができた。内容に関しても、比較的好意的な意見が多く栗島の魅力を伝えることができる内容であったと考える。

課題として、進行に乱れが生じた個所が数か所あったことや料理との兼ね合いもあり終了時間が押してしまったこと、不測の事態への対応の遅れ等が挙げられる。今後に向け会場をコントロールすることが難しくなった場合の対処法を考える必要がある。

5. 事業結果の考察

(1) お手伝いプログラムの事業化と活用可能性

本事業の結果、次のことが明らかになった。

1) 島外者におけるプログラム可能性について

試行実践の結果、「お手伝いプログラム」の取組は、島外者でも行うことが可能だということが明らかになった。新たにイベントやプログラムを構築するという

ことではなく、既存の島の日常的な暮らしを題材にしている本活動は、島民の営みの一部に島外者が参加可能か（つまりお手伝い可能か）どうか最初の条件となる。前章で確認したように今回プログラム試行実践に参加したモニター学生の動向をみると、里山（竹林）、農業（畑）、食、さらに工芸品づくり（てご編み）や集落行事など、最初の取り掛かりに戸惑う場面は見られるものの、すべての試行実践において当初予定の活動をやり遂げていることから、事業化を十分に検討できると考えられる。

2) 島民（おじいちゃん・おばあちゃん）におけるプログラム可能性について

島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとって本プログラムは、人手不足や知恵・技術の継承という点でメリットがあることが実施のための条件であると考えられる。今回の試行実践の結果、人手不足の解消（つまりお手伝い）という点では、十分な効果が見込めるかどうか不透明なプログラムもあることが分かった。また、島の営みに不案内な島外者を受け入れるにあたって、むしろその準備や説明のために負担が増してしまう可能性があることも明らかになった。

3) プログラムの事業化のために

プログラムの本来目的である人手不足や知恵・技術継承といった効果を高めるための、具体的なモデルプログラム、事前教材や手引書、島外者とおじいちゃんおばあちゃんをつなぎプログラムを運営するコーディネート体制が必要である。このため、本年度試行実践を行った里山（竹林）、農業（畑）、郷土料理について、補助教材の試案を作成した（本章末資料参照）。

4) プログラムの波及効果と活用可能性

島外者にとって、お手伝いプログラムは、単なる手伝いのみならず、島の暮らしや生活の営みについて理解を深める学びの要素が大きいことが明らかになった。プログラムを通じて、島民とのコミュニケーションや、島の営みの実物に触れることや「お手伝い」という島へ寄与している感覚がもたらす楽しさや喜びが得られることがわかる。こうしたお手伝いによる島への貢献だけでなく、むしろ島外者が享受できる島から学びといった効果が着目される。これは首都圏での発信活動においても実感されたことでもある。

一方で島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとっては、本プログラムを行うことによって、自分たちの日常的な営みに新たな光を当てることにつながる。それは島外者の視線の違いを利用して、自分たちがこれまで受け継ぎ育んできた知

恵や技術を再評価・再発見していくこと、そのことによりこれまでの人生を統合し、彼らにとっても英知を得る効果をもたらす可能性があると考えられる。¹

本プログラムは、単なる島の環境や生業の保全継承といった機能にとどまらない効果があるといえよう。今後、こうしたプログラム試行実施の中で垣間見られた「島の教育力」（島民・島外者双方にとって学びを促進する力）の波及効果や活用可能性をさらに検討していく価値があると考えられる。

（２）参加学生から - 試行実践モニターとしての感想を中心に -

以下に、「お手伝いプログラム」試行実践のモニターとしての役割も担った参加学生からの所感を次に紹介したい。

１）学んだこと一島の魅力と島の生きてきた人々ー

９月上旬に実施された最も長期にわたった第２回目試行研究は感慨深い。滞在していた８日間、粟島は夏から秋へ景色を変えた。海の魅せる顔や空の高さ、吹き抜ける風によって、小さな変化が大きな実感を生む。四季をここまで強く感じたのは２０年生きていてはじめてだった。粟島にいと自然だけではなく、多くの変化に気付くようになる。島に暮らしている人々のやさしい眼差しを感じるからだろうか。自分自身を省みることや他者の良さ、クセに気付くことが増えた。出川先生の主張していた過疎地域の農山村の魅力的なコミュニティやチカラとは、個人にそのスポットが当てられていることなのかもしれない。また、そのスポットが自分にもあてられるということなのかもしれない。

２）プログラムがもたらす効用一島の魅力と島の生きてきた人々に触れるー

『俺がいまマリオなんだよ』島に来て子はゲームに触れなくなりぬ」俵万智という短歌がある。粟島は、暮らしやすさや派手な楽しさとは程遠い。でも、ここで生きている人々はみんなが主人公で、きらきらしている。ナタの使い方もかぼちゃの切り方も知らなかった私も“何も知らない私を知る”ことでどんどんきらきらしていく。普段、家と駅の往復しかしない私が空いている時間があれば散歩に出かけ、道行く人に声を掛けられたり声をかけたりする。粟島に来て、自己肯定感の形成のプロセスや自尊心の重要性を知ることができた。

３）新たな課題ー島の子ども達とのかかわりからー

¹ 高齢期の学習特性に関連してエリクソンは「個人が高齢期に遭遇する様々の危機に直面し自らの課題を解決する過程は、同時にその姿を見ている若い世代をも育て、将来彼らが高齢期を生きるうえでのよきモデルとなると指摘」（鈴木真理他 2014「生涯学習概論」p. 85）している。

実は、地元学の際に大学生メンバーがかかわった中にはあまり楽しそうではなかった島の子ども達がいたことに気づかされた。これは栗島に限らず私たちが出会う各地の地方地域の若者たちや子ども達に共通する側面でもある。しかしある子どもが島の魅力が理解できず、不便さを嘆いているばかりだったことが印象に残っている。ことによると彼らのおかれた環境〈しおかぜ留学が大多数〉も影響して、プログラムに対し拒絶感や強制感を感じるということがあるのかもしれない。私自身も島内者に「何しに来たの？」という質問を投げかけられることも多くあった。島内者にとっては、島外者が島に訪れてくれることを好意的に思っている反面、様々な不便さやギャップ、違和感を抱いていることに気が付いた。本来であれば、しおかぜ留学により島に訪れた島外出身の子どもたちが島を知り、島の資源を活用し、学んでいくなかで島内者や栗島にとっても新たな学びが生まれる状況が創造できると思う。しかしプログラムに固執して学ばせるという構造は互いの亀裂を生じさせがちな側面も併せ持っている。

子どもの会話の中では、「キャンプをしたことがない」という話があった。島にとって必要なのは、子どもたちと島内者の相互的で好意的な関係性であり、そこをなくしては今後の島外者とのプログラムでの有益な交流は見掛け倒しに終わってしまうのではないかと思った。そして子どもたちにとっていま本当に必要なのは、島の人にとっては普通の「栗島暮らし」や「栗島での思い出」であり、栗島に対する素直な尊敬と素敵な体験の一つ一つだと感じている。

4) 島に根差した学びの必要性―島の高齢者の子ども時代の話から考える―

島で店を営むあるおばあちゃんとのエピソードを紹介したい。彼女は生まれも育ちも栗島で、栗島の背景や歴史をよく知っていた。貧乏だったこと、島民たちが標準語を学ぶ過程、島の小学校のことなど幼少期について特に教えてくれた。山越えをする通学に一日の大半がとられ、家事をお手伝いしたり畑仕事を手伝ったりするなかで、忙しく自分の時間というものがあったそう。けれど、近所の子たちと道端で遊んだことやおにぎりをつくって海を見ながら食べたこと、男の子が木登りして食べ物をとってくれたことなどが印象深いと笑顔で話してくれた。

また、釜谷で散歩をしていると漁師になりたてというおじいちゃんたちが、秘密基地の話をしてくれた。「秘密基地は秘密だからいいんだよ。詳しいことは教えてあげない」と軽い冗談を交えながら懐かしそうに話してくれた。島には、大人にばれないような素敵な隠れ場所がたくさんあり、海に流れ着く宝物や流木を使っていたのかもしれない。

島という独特な自然環境の中で、おばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。

5) お手伝いプログラムを基盤とした新たな展開を

島という独特な自然環境の中で、お手伝いプログラムのおばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。子どもたちに20歳の私が聞いても面白そうだなと感じる「みんなでわいわいにご飯をつくって外で食べる」や「大人が関与しない空間を自分たちで作る〈基地〉」を島の子どもと行ってみたいと思った。学びが先に来るのではなく、遊ぶことに学びが含まれている。そのような形で島の子どもたちとおじいちゃん・おばあちゃんをつなぐことができる仕組みを考えられないだろうか。(臨床心理学科2年 兵頭衣織レポートより)

Ⅲ. 総括と提案 - お手伝いプログラムを軸とする多世代協働コミュニティ創出 -

大正大学出川真也研究室（地域創生学部・社会教育・生涯学習論担当研究室）では、平成 27－28 年度にかけて本事業に取り組んできた。

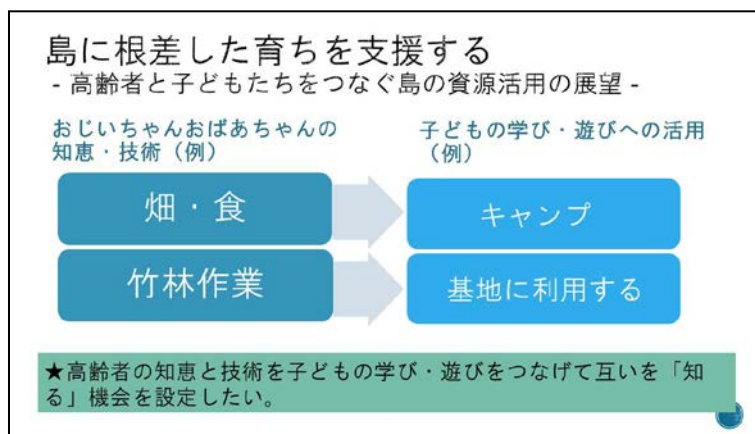
27 年度は、私たち島外者が関心を持って島民と取り組めるものとして里山（竹林）、畑、食文化、伝統行事や共同作業等を掲げた「あわしま おじいちゃん・おばあちゃんのお手伝いプログラム」（以下「お手伝いプログラム」別添資料参照）を構想した。28 年度はこのプログラム試行実践するとともに、首都圏での発信活動を行う中で、高齢者の担う知恵や技術を生かした活動には、周りの学習を促進する魅力があることが明らかになった。一方で、島の子どもたちは島の自然・文化に対する関心が必ずしも高くなく、島の良さや島に根差した知恵・習慣を知らない面があることに気づかされることとなった。

以上から、今後は、子ども達をはじめとした若手島民が、高齢者が受け継いできた島の自然・文化の魅力と価値を再認識できる具体的な取り組みや環境づくりが必要だと考えられる。粟島浦村では「島民による粟島創生戦略」（H28.3）において「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」を掲げている。今後の「お手伝いプログラム」を真に島の地域作りに以下していくために以下の取り組みを提案したい。

1. 提案概要—粟島の高齢者と子ども達をつなぐ学習プログラムの構築と実践—

（1）子どもたちが活用できる島の高齢者の知恵・技術の発掘調査

高齢者や子どもたちと協力して、島の高齢者が担う自然・文化・歴史的資源の調査を行い、子どもたちが関心を持って活用できるような方策を検討。検討結果を「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」として整備する。



（2）「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」の実践

「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」を実施する。実施に当たって、「お手伝いプログラム」の知見を活用していく。

（３）島内の若手組織を軸とする多世代協働のしくみ作り検討会の開催

調査やプログラム運営を通じて高齢者と子どもたちの絆を形成するとともに、運営面で若者が取り組みに関われる仕組みを検討する。島内の若者組織と意見交換を行いながら、島の子どもたち、高齢者組織、若者組織、都市部等島外の若者組織（大正大学の地域創生学関連の学生研究会ほか）がネットワークを組んだ持続可能な協働体制を構築していく。

２．実施方針

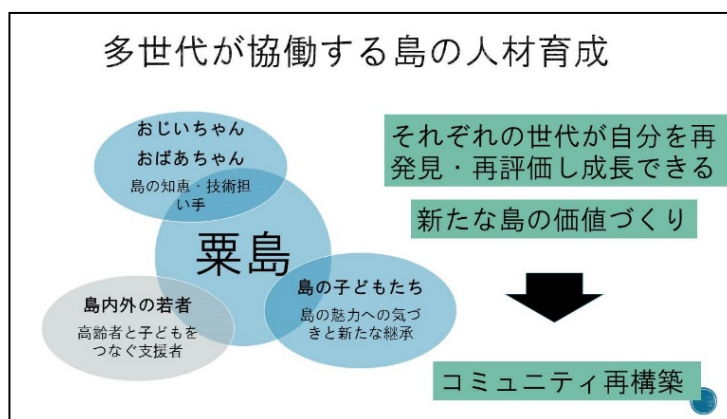
事業の実施に当たっては関係する島民のニーズに寄り添いながら、協働して取り組むとともに、島内外の若手世代層を巻き込んで継続的に事業実施できる仕組みを構築することが必要。以下の３点が実施方針として考えられる。

- ①高齢者・子どもたちのニーズ把握に努め、寄り添う姿勢
- ②高齢者・子どもたちとの協働による事業実施
- ③島内外の若者組織の参画促進と活動の継続性の確保

３．期待される効果

島内の高齢者が担ってきた知恵や技術に対する子どもたちの関心が高まるとともに、現状では高齢化や人手不足のために継承が危ぶまれている島内資源の保全活用が促進されることが期待される。このことは現在島ぐるみで取り組んでいる離島留学制度の教育効果をさらに向上させたり、子ども・高齢者・若者の協働やコミュニティ意識の醸成を促すものと考えられる。

これらは村が「島民による栗島創生戦略」で掲げている「新たなコミュニティ～多様性を前提としたコミュニティの再構築」「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」の実現につながるものと考えられる。



多様な世代の協働による人材育成とコミュニティの再構築

4. おわりに

以上の提案を本事業の総括にかえさせていただくと共に、私たちと島の皆さんとの今後の研究・実践課題としていければと願っている。

これまで2年間にわたって共に取組むことができた島の皆さん、首都圏の協力者の皆さんに感謝したい。

【2. 新潟県阿賀町】

地域青年会との協働による若者の 山村一都市交流と新たな地場生業の創出



指導教員：大正大学地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

東京農業大学多摩川源流大学プロジェクト事務室学術研究員 杉野卓也

参加学生：

文学部歴史学科 4年 角田祐基

文学部歴史学科 3年 高橋咲紀

人間学部教育人間学部 3年 幅野裕敬

人間学部人間科学科 2年 須藤彩乃

人間学部臨床心理学科 2年 本多 龍

人間学部臨床心理学科 2年 兵頭衣織

東京農業大学 井口春海

東京農業大学 新井 朋

1 はじめに

H28 年 4 月に設置された大正大学地域創生学部地域創生学科では、地方地域と都市地域の連携・協働による地域創生の実現に寄与するための研究・教育活動を開始しました。特に地域に根ざした多様な活性化活動に取り組むことができる地域人材の育成を目指しています。

本学部には所属する大川洋史研究室・出川真也研究室では、地域住民のアイデア創出が重要な意味を持つとともに、それら住民を構成員とする地域組織のあり方が集落活性化のための戦略的行動に大きな影響を与える点に着目して、人的資源管理や経営組織論を基盤とした研究を進めています。こうした研究を応用して、地域資源（人的・物的）の掘り起こし、外部とのネットワーク形成、地場に根ざした生業の構築といった面で、住民が主体となって集落活動を効果的に展開するための組織化や地域活性化方策について提案し実践方策を模索していきます。

本事業では、地域での交流と学習活動に取り組む東京農業大学源流大学プロジェクト事務室と協働しながら、新潟県阿賀町室谷地区の青年会の皆さんと共に山村資源を活かした地域活性化推進方策について検討していきます。

1-1 集落概要

- 集落名：新潟県阿賀町室谷地区
- 人口：115 人
- 世帯数：29
- 高齢化率：35.6%



1-2 「集落」の課題

- 過疎化高齢化に起因する集落活動の減退や地域資源保全管理
- 一方で、集落内の若手世代層を中心に構成される「青年会」による新たな活動展開の萌芽が見られることが注目される。

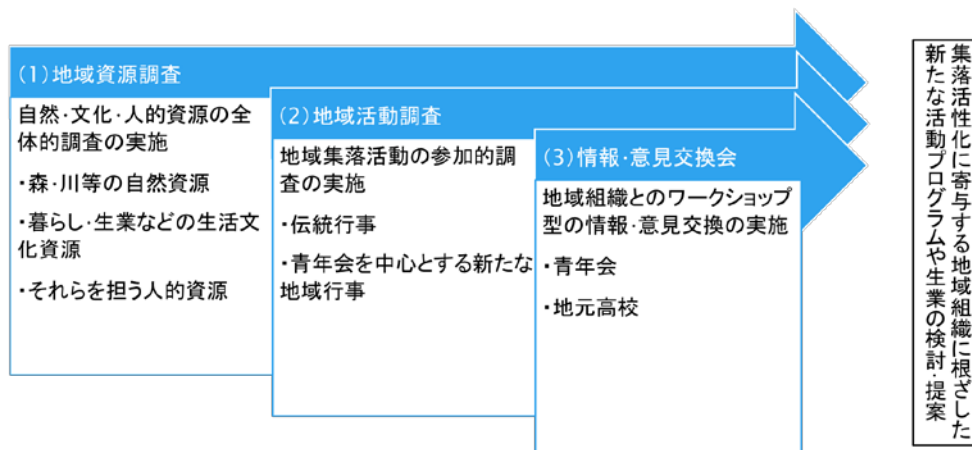
1-3 調査研究の目的

- 青年会がチャレンジ素養としていることに寄り添い、構成メンバーと協働しながら研究調査活動を実施する。
- 青年会・若手世代層が軸となって地域活性化に寄与するための集落の自然。文化的資源に根差した新たな活動プログラムや生業を提案する。

2 本年度事業の取組内容

2-1 本年度事業の流れ

研究目的を達成するため、現地集落にて青年会を中心としたその他地域組織等と連携・協働して（１）地域資源調査、（２）地域活動調査、（３）意見交換会を実施する。それらを踏まえて分析・検討し、新たな活動プログラムや生業の企画提案をおこなっていく。



2-2 事業結果概要

2-2-1 地域資源調査・地元学（資料編の調査データ参照）

青年会・住民と集落の資源調査を実施し、山林、川、食文化、住まい・暮らし、道具などの掘越を行った。

食文化では、地元の食材、山菜を使った郷土料理を作って頂き、食べる時期や調理法、山菜の価値についてのヒアリング調査を行った。山菜についてのヒアリング調査では、室谷区のぜんまいは日本で最も大きく室谷地区のぜんまいの大きさに等の出来によって、日本のぜんまいの価値が決まってきたというお話もお聞きすることができた。

川文化の調査では、実際に漁の様子を見学させて頂き川の生物調査を行うと同時に、漁の仕方を教えていただいた。



また、道具小屋も見せていただくことができ、漁に使う編み等も拝見させて頂くことができた。

山資源調査では、実際に山の中を歩かせていただき、山林の様子を説明して頂いた。木材資源の活用方法をお聞きし、炭焼窯も見学させて頂いた。



2-2-2 地域活動調査

(1) 9-10.11 室谷祭礼伝統行事神輿担ぎ、その後のお楽しみ会開催のお手伝い

実際に、御神輿を担がせていただき、集落内をめぐらせて頂いた。一軒一軒、飲食物が出され、それを飲みながらのお祭りに教員をはじめ殆どの学生がダウンした。飲めなくなると、ビールかけや水かけになりびしょ濡れになりながら集落内を回った。その後のお楽しみ会では、地域の子どもたちに対し、くじびきや射的、フランクフルトの販売のお手伝いなどを行った。子どもたちがとても楽しいそうに参加している姿が印象的であった。青年会をはじめとする地域の方々が、大事にしている雰囲気や青年会の考え方・気風といったものを肌で感ずることができた。青年会が目指しているところや求めている形は、我々研究室が求めていく方向性とイコールになる。その、方向性を改めて認識することができたお祭りであった。



(2) 10-8.9 おもっしえぞ祭り（旧神谷分校学芸会）開催のお手伝い・見学取材・出演

お祭り当日は売店など朝の準備からお手伝いをさせていただいた。また、突然舞台に上がることになったりとたくさんの経験をさせていただいた。お祭りには子供からお年寄りまで幅広い年代が参加しており、青年会の方々だけではなく子どもたちや女性の方々とも接することができた。歌や踊りなどの出し物の他、子供たちが昔話を地元の方言を使っての朗読などがあつた。青年会の方々による舞いはとても力強くとても印象的だった。お祭りの終わりには、青年会を中心とし

た祭りを盛り上げた方々との宴会があり、また室谷に来てと言われた時はとても嬉しかった。

私たちも楽しませていただき、皆さんの室谷に対する熱い想いや地域の連携をひしひしと感じたとても魅力的な祭りであった。そして、このように老若男女たくさんの人々が参加し、楽しむことのできる集落行事はなかなかないのではないかと強く感じた。



(3) 冬の生活 ・生業ヒアリング 等

副区長や昭七さんのご指導のもと、雪かきを行った。初めて雪かきを行う学生も多く、とても苦労した。素人が下手に雪かきを行うのは危ないと、昭七さんから早々の撤収を命じられ、生活文化のヒアリングを行った。



昭七さんからは、かんじきの作り方を教わることができた。昔は、集落内の誰もが作ることができたそうだが、今では作れる方の方が少ないということだった。その他にも昔の生活生業をお聞きすることができた。



● 昔の生業ヒアリング結果

- ・ 1 月：休み
- ・ 2 月中旬(11 日以降)から 3 月：山へ入り木材調達
- ・ 3 月：木材を川へ流し下流へ
- ・ 4 月：木材を業者へ（やっとお金になる）
- ・ 5 月：休み
- ・ 6 月～12 月：炭焼き釜作り(約 2 週間かかる)→炭づくりを繰り返す
- ・ 畑、田んぼは自分たちで食べる分を栽培→現在は販売も実施

- ・ぜんまい栽培

- もらい風呂ヒアリング調査

2月の調査活動のうち、1日はもらい風呂として、集落の方々のお家でお風呂を頂いた。

夏には運動会があつて子供から大人まで集落の人がほとんど参加していたというお話や冬にかんじき大会が3月頃にあり、こちらも子供から大人までレースに参加したという昔の行事についてお話をお聞きすることができた。

また、冬の暮らしに関しても様々なお話を伺うことができた。冬の暖炉の組み立ては基本的には自分たちで行い、1日に20個ほどの薪を消費することや 夏に貯めた薪は縦2m 横2m ほど（これが6つある）の物置に積み重ねておき暖炉が必要なくなる4月までにだいたい使いきるなどのお話を伺った。薪ストーブの長所はすぐ温まることであり、短所は消したらすぐ冷えることと地震時に火事になりやすいこと（電気ストーブなら自然と止まるけど薪ストーブは止まらないから）など薪ストーブについても詳しくお話を伺うことができた。

食文化についてもお聞きすることが出来、くじなという煮物があることや沢庵を漬けるときに大根の葉も一緒に漬けると美味しいこと、またなめこ、まいたけ、アジは缶詰にして保存食にすること等を伺うことができた。

2-2-3 情報・意見交換会（資料編 レジューメ・紙芝居資料参照）

(1) 青年会をはじめとする地域住民との情報・意見交換会

意見交換会は、伺うたびに実施させて頂き合計で5回行わせて頂いた。1回目には、地元学の結果を共有し、調査結果の活用方法を検討した。2回目には、都市部との連携方策について検討し、大学でのイベント実施の可能性や豊島区社会教育施設である、みらい館大明との連携活動等について検討を行った。3回目には、イベントを通じた地域活動の今後の展開について意見交換を行った。4回目では、調査結果の最終報告を行い、5回目には、今後の活動検討を行った。その際に、イメージ紙芝居資料（本報告書末掲載）等を用いながら青年会会長指揮のもと、ふるさと学習キャンプの実施について検討会を行い、運営方法や実施体制、プログラムの策定などを検討する企画会議を行った。

室谷内で実施が可能であり、青年会の方々をはじめとした地域住民の方々の負担になってしまわないよう考慮することはもちろん、如何に室谷の魅力を高校生

へ伝えていくかを検討した。そして、青年会及び青年会活動の充実を図れるようなプログラム設計を行った。

(2) 阿賀黎明高校へ調査報告

阿賀黎明高校の校長先生、副校長先生へ今年度の調査報告及びヒアリング調査を実施した。ヒアリングの際に、ふるさと資源を生かした教育プログラムを模索中であることをお聞きすることができた。

また、高校生と座談会の時間も取って頂き、高校生へ大学とはどのようなところなのか、我々大学生は大学で何を学んでいるのかなどのお話を高校生とさせて頂いた。

(3) 黎明学舎見学

公設公営の塾である、黎明学舎の授業風景を見学させて頂いた。塾長先生より、塾の運営方法についてお聞きすることができた。まずは、学習時間の底上げをとる考え方の元、学習時間の記録をとることにより、成績の上昇・下降に対するエビデンスを3カ月かけて作成してきたということであった。また、塾に来ていた高校生たちへお話をお聞きする機会もいただき、座談会の感想を高校生からお聞きすることができた。

3事業（調査）結果と考察

地域資源調査、地域活動調査、意見交換会を通じて、青年会をはじめ地域組織にはふるさと自然・文化を基盤として様々な学び（森、川、食、暮らし、産業、交流、環境、国際など）を促進する「教育力」が存在することが明らかになった。その一方で、地域資源が未活用であり、これら地域資源を担い手育成・町外若者の誘引のために活用していく新たな方策が求められていることが浮き彫りになった。

阿賀町室谷地区の青年会及び地域団体は、室谷の活性化に向けて意欲的に活動を行っており、地域資源を活用した担い手育成・町外若者の誘引においても意欲的である。また、青年会の活動をサポートする体制として、室谷地区の区長をはじめとした地域住民、地域組織においても青年会の活動に協力的であり、大正大学、東京農業大学からの人的支援、戦略支援の体制も整っている。

阿賀町では、阿賀黎明高校及び28年9月開設の公設公営塾「阿賀黎明学舎」において、ふるさと資源を活かした教育プログラムを模索中である。町外からの新しい高校生（留学生）の誘引や都市部への阿賀町教育活動の魅力の訴求向上を図っており、地域としてのニ

ーズがあると言える。

4 今後の方針

青年会をはじめとする室谷区地域団体及び阿賀黎明高校、阿賀黎明学舎において、ふるさと資源を活かした担い手育成、教育プログラムの構築に、ニーズがあると言える。

そこで、青年会を軸とする若者育成プログラムの構築と内・外協働の学習・交流産業作り（地域活性化と青年会の若手担い手育成・誘引を相乗的に向上させる地域生業作り）を実施する。

初動段階の取組として青年会・高校生・都市大学生協働による阿賀町ならではのサービスマーケティング、キャリア教育プログラムを設定・実施していくことを予定している。来年度は、青年会を軸とした教育・交流産業モデルとして、室谷の資源を活用して高校生と共にを行う地域学習プログラム「ふるさと学習キャンプ」（仮称）の試行実践を提案する。

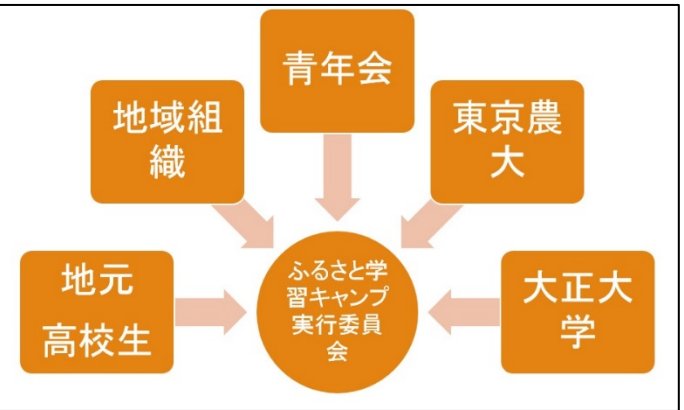
4-1 ふるさと学習キャンプについて

青年会を主体とし、地元高校生をはじめとする若い世代に対し室谷区の持つ魅力や昔ながらの生業を伝えるため、実施する。ふるさと学習キャンプの実施により、地元高校生の地域愛を育み青年会の次世代育成、地域の担い手育成を目的に実施する。

また、ふるさと学習キャンプの展開として、キャンプのプログラムの中で取り扱う食やクラフト活動を産品開発につなげることも目指す。今後、ふるさと学習キャンプの参加券や開発した産品を、ふるさと納税返礼品等として活用することも視野に入れ実施する。

実施体制としては、青年会の負担を協力減らし地元高校生や都

1日目	内容	2日目	内容
10:00	集合	8:00	起床
10:30	畑作業体験	8:30	朝食
11:30	郷土料理教室	9:30	地元学
12:30	昼食	11:30	発表会
14:00	川遊び(漁体験含む)	12:30	解散
15:30	昼寝		
16:30	活動取りまとめ		
17:30	自由		
18:30	夕食準備		
19:30	夕食		
21:00	就寝		



市部の協力者が柔軟に参画することができるよう、実行委員会形式の別組織の設立により行うことを想定する。

ふるさと学習キャンプ実施において、期待される効果として以下の4点があげられる。

- ① 地域志向
- ② 黎明学舎
- ③ 阿賀黎明高等学校
- ④ 都市部若者の誘引

①地域志向については、地元地域での主体的な活動及び多世代での交流によるメンターの発掘は、都市部に出た後にも自身の中に残るものであり、実際に地元で働いている青年のメンターがいることにより、自身の青年後の地元での生活をイメージすることができる、イメージすることができることにより、地域回帰はハードルの低いものになると考えることができる。

②③については、今後、青年会と実施するふるさと学習キャンプを活用し貢献できるような形を構築していきたい。

④都市部での自然体験に対するニーズは比較的高いと考える。広報の仕方次第ではあるが、都市部の若者をキャンプを中心とした自然体験を目玉に、阿賀に誘引することは可能であるとする。また、キャンプなどのイベントに参加することにより、室谷区をはじめとした阿賀町の魅力を知ってもらい、将来的には移住者の増加も見込めるのではないかと考える。

4-2 今後のスケジュール（案）

ふるさと学習キャンプへの参加をきっかけに、地元高校生の室谷区の伝統行事への参加、運営参加を目指す。

初年度は、青年会及び大学生にてふるさと学習キャンプのプログラムを作成する。初年度のふるさと学習キャンプを実行委員募集のツールとする。実行委員会設立後、実行委員会は伝統行事の運営等を青年会と運営を行う。

青年会は、主に実施プログラムの作成及び実行委員会の運営、イベント運営、地域との調整役を担う。大学は、地元高校への広報をはじめ、都市部でのPRや広報戦略の策定などを担う。

5 その他の首都圏等でのPRや波及展開活動

都市部との交流活動として、以下の活動を実施する。

5-1 コミュニティカフェ

地方地域と都市を繋ぐため、学生による活動紹介及び地方地域のPRを目的としたカフェを大正大学にて実施。

第1回：3月24日（土）実施予定

5-2 みらい館大明

地方地域のPRを目的に、都市部の団体と連携し、地域の産品を販売するカフェを1年間実施予定。都市部での経常的な販売・提供により、地域のPRはもちろんのこと、産品販売による経済活性化を促すことを目指す。

6 おわりに

今年度は、年間を通じて青年会をはじめとする地域住民の方々と信頼関係を構築し、イベント実施の体制を整える年であった。地元の青年会に皆さん方と共に提案を取りまとめていく中で、イベント実施に対し非常に協力的な関係を構築することができた。これは、青年会をはじめとする地域の方々が集落外の人間である我々を暖かく迎えてくださった結果であり、青年会の方々の室谷活性化に向けた熱意により実現できたものであるといえる。今後、青年会をはじめとする室谷区の方々と、より密な関係の構築を図りつつイベントの試行実践と波及展開策を検討していきたい。



【研究報告 3 埼玉県秩父市】

「学び」で繋ぐ秩父—東京間荒川流域の連携プログラムの検討

自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性

—秩父市大滝地区現地調査から—



大正大学地域創生学部地域創生学科 専任講師 出川真也

文学部歴史学科 4年 角田祐基

文学部歴史学科 3年 高橋咲紀

人間学部教育人間学科 3年 大金聖人

人間学部人間環境学科 3年 荒田仁志

H28 年度荒川ビジョン推進協議会「大学との連携による交流メニュー作り」委託事業により行われました。

「学び」で繋ぐ秩父―東京間荒川流域の連携プログラムの検討

自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性

―秩父市大滝地区現地調査から―

大正大学地域創生学部 出川真也研究室（社会教育課程担当研究室）
出川真也 角田祐基 高橋咲紀 大金聖人 荒田仁志

1. 調査研究活動の趣旨と目的

秩父市大滝地区における地域資源利用調査・活動に東京農業大学農山村支援センターメンバーとともに外部参加者として協力することを通じて、上流域（秩父）と下流域（都心）の連携・活性化に寄与する交流プログラムの検討を行った。地域活性化の軸として①地場産業育成、②食文化、③自然体験活動、④山やダムなど歴史的資源の活用といった4つの観点に着目して上下流域連携、地域活性の可能性を考察した。



写真1 現地の宿において地区の地図を広げて検討を行う（農大（左）および大正大（右）の混成メンバー）。

2. 秩父市大滝地区の概要

（1）主な産業について

1）林業の歴史

大滝地区は面積の9割が山林であり林業を主な産業としてきた。材木の供給地として、荒川を利用して江戸まで運ばれていた。その際、鉄砲関という方法を用いて搬入を行っている。これは林道や自動車などのインフラが整っていない時代に使われた手段であり、現在では文化的価値があるとして資料館に展示されている。

江戸時代には幕府直轄領として御山林となり、伐採等は規制されていたが、住民のための稼ぎ山として1里半（約6キロ）まで入山し8種類の材木加工品を生産し、搬出・販売することが許可されていた。

2）鉱業の歴史

江戸時代に鉱山開発が行われ、金・銀・銅・鉄など産出された。平賀源内が鉱山開発を行っていた記録があり、現在も住居が残されている（非公開）。



写真2 秩父市大滝地区の深い山々

2) 農業の状況

農業では中津川芋・大滝インゲン、大豆加工品としておなめなどの特産品がある。しかし、土地が急峻であり、耕作は逆さ掘りという方法で行うため平地に比べ概して困難な営農環境にあると言える。

3) 観光の状況

大滝地域全体が秩父多摩甲斐国立公園に指定されている。自然環境に恵まれた土地であり、溪流釣りやキャンプ、ハイキングを楽しむことができる。また、三峰神社では御守りが人気であり、行列ができるほどの盛況振りである。一方で、宿泊業は不振で、民宿が激減している。



写真3 今回お世話になった民宿。今では集落で唯一となっている。

(2) 地区の現状と課題

主たる産業であった林業は価格競争の影響もあり衰退し、現在はほぼ行われておらず山が荒れる原因にもなっている。上下流域交流事業においては、簡易製材機を使って、山林の活用や余っている木材を使った木製三輪車作りなどを行うなど、山林振興活動に取り組まれている。

観光面では、雁坂トンネルの開通以降、通過交通が増加し滞留者が減少している。そのため、以前は民宿等も多く営まれていたが利用者の減少や経営者の高齢化による廃業が多くなっている。

鉾山開発やダム建設による就業者の増加時期以降、人口は右肩下がりに減少し、平成28年8月には約800人となっている。また、大滝地区にあった小学校、中学校はともに閉校となっており、子ども達が外に出て行ってしまう傾向がある。農協か役場以外には働く場が少ない現状であり、新たな雇用の場の創出が求められている。

3. 調査活動の内容

(1) 調査研究活動の全体日程

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 6月 | 平成28年度荒川ビジョン推進協議会出席 |
| 7月 | 事前調査・資料収集 現地調査のための諸調整 |
| 8月 | 大滝地区現地調査 |
| 9～10月 | 現地調査結果の取りまとめ |
| 10月 | 豊島区生涯学習施設「みらい館大明」での研究報告と都市部住民の意見収集 |
| 11月 | 大正大学学園祭「鴨台祭」での研究報告と都市住民・学生の意見収集 |
| 12月 | 報告書作成 |

（２）現地調査の内容

１）現地調査の日程別概要

８月に行った秩父市大滝地区における現地調査活動では以下の取組みを実施した。

- １日目：８月 23 日 現地入り。秩父市大滝支所にて地区概要についての説明を受ける。
- ２日目：８月 24 日 山村資源保全への利用を目的とした未利用トンネル整備。
- ３日目：８月 25 日 トンネル整備作業及び周辺山林におけるマメガキの賦存量調査。
- ４日目：８月 26 日 集落において郷土食・伝統野菜に関する取材とヒアリング。

２）現地調査の日程別詳細

１日目（８月 23 日）現地入りと地域特徴の把握

台風の影響がひどく野外での活動ができなかったこともあり、秩父市大滝支所にて、大滝地区に関する概要説明（行政、NPO、民宿小河さん）を受けた。

役場職員は少数ではあるが、それぞれ大滝地区のことを熟知しており、台風被害の規模の推測や迅速な対応を行っていることが印象に残った。大滝地区周辺にある河川の様子を見ると、本来であれば透き通るほどにきれいな水が流れているものが台風の影響で泥のように濁っている状況だった。

今回の中心作業となるトンネルの整備は悪天候のため翌日に持ち越しとなった。



写真４ 秩父市大滝支所にて地域概要についての説明を受ける。

２日目（８月 24 日）地域調査（自然・文化・食）とトンネル整備

天候が好転したこの日は東京農業大学農山村支援センターのメンバーを中心として、大滝地区を流れる大血川河畔に位置するトンネル整備作業を実施した。もともと大血川周辺は石灰採掘場として利用されていたことがあり、今でも名残としてトンネルがいくつか残っている。トンネル内部の気温や湿度は一定に保たれており、その特徴を生かして農産物や林産物の保存活用の可能性を検討することがこの取り組み



写真５ NPO の吉田さんから現地の概要説明

の目的である。作業内容として①土嚢作り、②足場作り、③棚の作成の3つを行った。

・地元産品保存を企図したトンネル整備作業

土嚢作りは、トンネル内の水の量を調整するのに必要なものである。現在トンネル奥に掘削機が刺さっており、その隙間を通して水が流れトンネル内部は水が溜まり、トンネルの入り口から溢れている状態となっている。そこで周辺の山土を用いて土嚢を作り、トンネルの入り口及び奥に水量調整のための土嚢を敷き詰めることとした。山の土は都心の花壇や公園の土と比べると、程よく水分を含んでいて柔らかく、粘土質のものであり、水を止めるための土嚢作りに適しているものであった。



写真6 周辺の山土を利用しトンネルで使用する土嚢を作る

この作業と並行してトンネル内の足場作りを行った。トンネル内は冠水している状況であり、水面上に足場を構築するためプレートを敷き詰める作業を行った。

土嚢による水量調整とトンネル内部の足場作り後には、農産物や林産品、加工品を保存するための棚の作成を行った。鉄パイプを組み上げた工事現場で利用されているような構造で、非常に頑丈なものである。このため実際の土木作業現場で用いる道具なども必要であり、やや難易度の高い作業となった。



写真7 トンネル作業のメンバー



写真8 冠水するトンネル内での足場づくり



写真9 保存産物を陳列する棚の設置作業

- ・溪流魚の利用について

昼食は地元の食材を使った定食をいただいた。大血川上流部にある管理釣り場の食堂で食べたイワナは絶品であり、釣りなどのレジャーと合わせて溪流魚資源の活用可能性が検討できると考えられるものである。

写真9 溪流魚の塩焼き参考写真
(左ヤマメ、右上ニジマス、右下イワナ)



- ・ダム見学

トンネル整備作業後に周辺のダムを見学した。雨があがったため水は落ち着いていたのが、まだ水は濁っていて、ダム壁の近くには大量の流木が流れ着いている状態となっていた。こうしたダムにたまる流木は炭作りに再利用されているが、近年は炭焼きの担い手となる人材不足のため、技術継承が十分にされておらず、こうした流木処分に苦勞しているとのこと聞いた。



写真10 流木に覆われたダム湖

3日目（8月25日）山林におけるマメガキ等の賦存量調査

トンネル作業を続けるとともに、栃の実を収集するための網の拡張、マメガキの調査（本数、木の状態、実用化）を行った。

- ・トンネルの付随整備作業

トンネル整備では内部の整備はほとんど終わり、トンネルそのものの実用性を上げるために、上の滝から水を引っ張る作業や落石・土砂対策の防護網の取り付けを行った。



写真11 落石・土砂防止のネット張り作業



写真 12 トンネル入り口に引きこんだ水を利用
使用した加工設備の設置



写真 13 トチノミ調査のための収集ネット設置

・ マメガキ調査

マメガキ調査では山に入り、賦存量調査を行ない、実のなっている木とそうでない木の区分けを行った。いくつかマメガキを枝物として採取して、生け花として使えるように、葉をとるなどの軽加工を施すなどの試行を行った。

東京農業大学農山村支援センターではこれら林産品と地域農産物や加工品等をトンネル内の棚に保存し、今後どのような変化が生じるか調査研究することである。



写真 14～17(左上・右上・左下・右下) マメガキ賦存量調査(実のなる木となっていない木の分類)、マメガキの枝採取、枝物の加工(葉を取る)、出荷状態のマメガ木の枝物

4日目（8月26日）地区内集落における郷土料理と伝承野菜取材

地区内の集落に赴き、食文化や集落に関する聞き取り調査を実施した。山肌に沿って形成された集落は景観的にも印象的であった。地元産の特徴的な小ぶりのイモを田楽にした料理をいただいた。甘みが強くおつまみやお茶の時間のおやつとしても適しているものである。



写真 18 山の急斜面に立地する集落景観



写真 19 集落で取れる芋を使った田楽



写真 20 芋の大きさは小ぶり

集落の畑は斜面を利用したものとなっているため、平地とは異なる苦労がある。しかし集落に住んでいる方々は高齢の方が多く、住んでいた子どもたちも高校生ぐらいからは村を離れてしまい、そのまま地元以外で生活する傾向がある。また農業以外にも民宿を営んでいた時期もあったが、年々利用者が減ってしまい今では1軒しか残っていないとのこと。インタビューの中では、若者の力がほしいという要望を強く感じるものがあった。



写真 21 急斜面に立地する畑



写真 22 小石が混じる特徴的な畑土

4. 調査結果考察と上下流域交流プログラムの提案

今回の調査・実践活動を通じて、秩父の上流域と都市部の下流域をつなげるプログラムを検討するにあたって、4つの観点(①地場産業育成、②食文化、③自然体験学習、④歴史)から考察した。以下に考察結果を詳述する。

(1) 地場産業づくりー上下流域交流と「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」可能性

大滝地区にあるもの(地域資源)をどう生かすかが今後の地域づくりのカギとなると考えられる。地域資源を使って産業を作り、雇用を生み出すことができれば若者の流出を防ぐことにもつながるのではないだろうか。

地域資源としては、かつて使っていたが、現在は十分に使われてない「再利用資源」や、これまで使ったことがなかった「未利用資源」をどう生かしていくかがポイントになる。前者はかつての経験や知見があるが、新たな要素を付け加えて価値づける必要があり、後者はこれまでの実施経験・知見がない新たなチャレンジといえるだろう。また現在使われている資源(「利用資源」)の高度利用も検討の余地があると考えられる。

1) 「再利用資源」活用による既存産品と連動した地域産業開拓の可能性

今回の調査においては、具体的な再利用資源としてトンネルの活用が注目される。もともと大滝地区は鉱山として栄えた村であり、その作業跡として現在使われていないトンネルがある。トンネル内部の室内温度は13℃前後で外の天気や気温の影響を受けないため貯蔵庫として好適であると考えられる。このトンネルを整備し、貯蔵庫として活用することで、保存品を熟成させて付加価値をつけることが期待される。熟成させる物としては地域で作られているジャガイモや焼酎などが考えられる。トンネルに一定期間保存し、熟成等による価値づけを行った商品として販売することができれば、農業だけでなくトンネルの貯蔵庫業としての雇用を作っていくことができるのではないかと考えられる。また、付加価値商品を下流の都市地域に販売するなど流通面でもさらなる雇用の増加につなげることができるのではないかと考えられる。

2) 「未利用資源」の活用 - マメガキを通じた山の手入れ作業と防災交流の可能性 -

未利用資源としては、マメガキが挙げられる。これを生け花や柿渋として販売することで、地域にお金と人を生み出すことができるのではないかと考えられる。生け花として販売する場合すぐに出荷しなくてもトンネル保存によって時期を調整することで、需要に応じた販売を行うことができる。また、マメガキは地区内に数多く生育しており、これを山仕事の一環として整備していくことは、マメガキの商品としての産業化だけでなく、山の手入れを促すことにつながり、結果として山林の防災上の効果が見込めるのではないかと考えられる。これは下流域にとっても防災政策上メリットがあるものといえる。

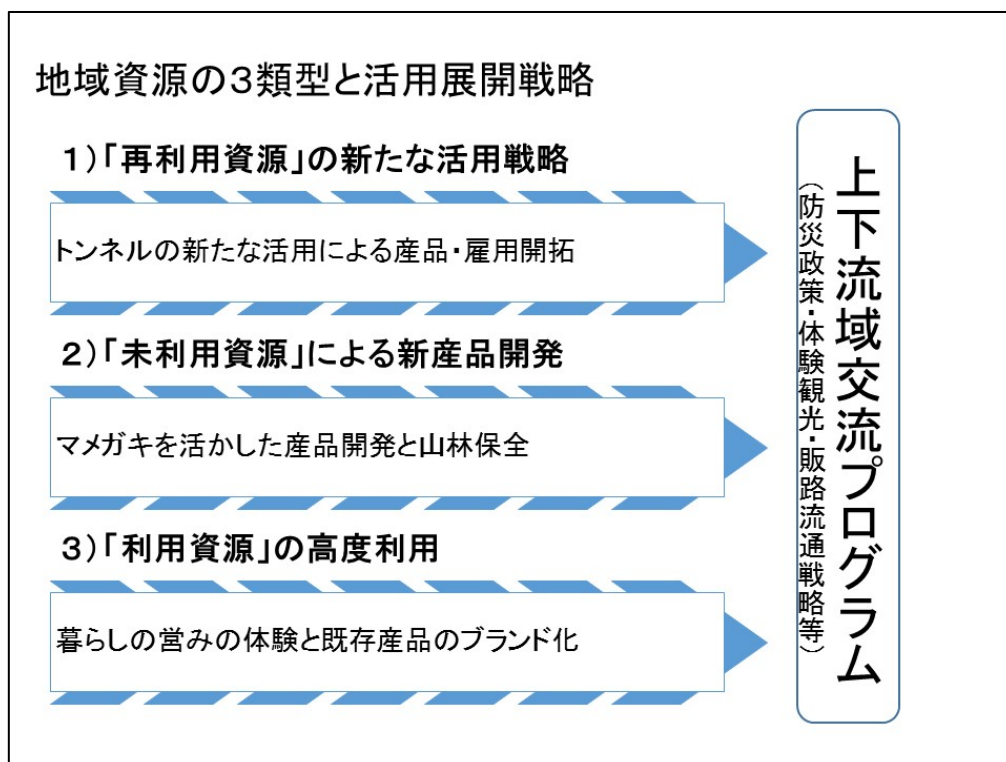
こうしたストーリーから考えると、上下流域の連携のシンボルとして、マメガキを軸とした山の手入れ作業やマメガキの販路として都市が協力することが考えられるのではないだろうか。いわばマメガキを通じた防災交流プログラムである。

3)「利用資源」の高度利用について一体験を通じた利用の可能性一

現在利用されている資源の高度利用策としては、大滝地区における農業や林業体験が考えられる。農業においては、急峻な土地環境のため平地とは違った苦労や工夫がある。そのギャップを逆手に取った山村ならではの農業体験（逆さ掘り体験ツアー）が考えられる。

こうした体験を、現在実施されている都市住民が来訪して行っている簡易製材機を使った林業体験と組み合わせることで、上記「未利用資源」「再利用資源」の活用と合わせて総合的に地域資源を活用し、発信力を高めていくことができるのではないかと考えられる。

にぎわいをつくり出すという点で「体験」活動は有効であると考えられる。ただ体験してもらいだけではなく、地域の日常的な作業を体験プログラムとして設定したり、耕作放棄地となっている場所を利用してもらいなど地域ニーズに合わせた工夫をすることで、地域の人手不足に対する対応や土地の有効活用にもなるのではないかと考えられる。



以上のように、大滝地区の資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型からそれぞれ上下流域交流の視点からその特徴に合わせて戦略的に利用していく方策を考えられるのではないかと。次節からは、食文化、自然体験、歴史といった3つの軸から具体的なプログラムについて検討する。

(2) 食による上下流域交流の可能性一「料理」「定期市」の利活用可能性一

1) 下流域では調達できない食材の特徴

① 溪流魚 イワナ・ヤマメ

秩父において着目されるものとして独特な「食文化」があげられる。大滝地区には埼玉県

および東京都を流れ東京湾に注ぐ荒川の源流があり、イワナやヤマメが生息している。シーズンになると溪流釣りを楽しみに多くの観光客が訪れる。釣った魚は塩焼きにして食べるとおいしいことで有名である。

②農産物 伝統野菜：中津川芋・大滝インゲン

大滝地区の代表的な農産物とものとして、中津川芋・大滝インゲンがある。中津川芋は、私たちがよく見るジャガイモと比較するとかなり小さい芋である。大きいもので5cm、小さいものは3cmほどである。大滝地区ではこの芋を油いためや田楽にする文化がある。中津川芋は、日露戦争の時に極東ロシアに抑留されていた秩父市大滝出身の兵士が持ち帰ったといわれている。肥料を与えずに作るため、標高の低いところで作ると大粒になり、皮の赤色が淡くなってしまうといわれている¹。下流域部の都市では、標高が低いため大きな芋しか育たず、色も変化してしまうため、希少性の点でも中津川芋は魅力的だと言えるだろう。

大滝インゲンは、味の感じ方に個人差はあると思うが、非常に甘く、苦みが少ない。これほどの甘さを持ったインゲンは下流域では珍しいのではないかと考えられる。

③加工品 おなめ

「おなめ」は秩父味噌とも呼ばれ、重厚な味で味噌の香りが強く、旨みが強いのが特徴であり、秩父市の名産としても知られている。

2) 農業の衰退（高齢化・後継者不足）と厳しい自然環境

大滝地区の食文化について簡単に触れたが、その基盤となる農業は実際にはそれほど盛んに行われていない現状がある。その理由は、現在農業を営んでいる住民の高齢化が進んでおり、後継者もいないということが挙げられる。また、大滝地区は辺り一面が山で囲まれており、農業に適した土地が非常に少ないという地形的特徴を持っている。そのため、山を拓いた急斜面で農産物を生産している。秩父市全体でみても畑などで使われている土地はわずか5%しかないのが現状である。しかし、この量的には少ない農産物も活用の仕方を工夫することで、下流域である東京都との交流を図ることは不可能ではないと考えられる。

3) 大滝地区の「料理」を下流域に売り込むという戦略

①「料理」によるPRと活用

農産物そのものではなく「料理」とすることで、付加価値を付けた食文化の発信可能性を探ってみたい。

大滝地区の名産である中津川芋・大滝インゲン・おなめやそれを使用した料理で交流を図ることができると考えられる。この名産を使用した代表的な料理の一つとして中津川芋の味噌炒めがある。調理法は、湯がいた芋を油でいため、味噌と砂糖でからめる。その後お好みで黒砂糖による味付けをするといったものである。他にも魅力的な料理は多々ある。

料理を下流域に売り込むことで、都市部のレストランや学校の食堂、さらにはスーパーマーケットなど様々な場所で交流が生まれる。こうした下流域のレストランや食堂、スーパーマーケットなどで利用されることで経済的効果を生み、上・下流域の双方に利益がもたらさ

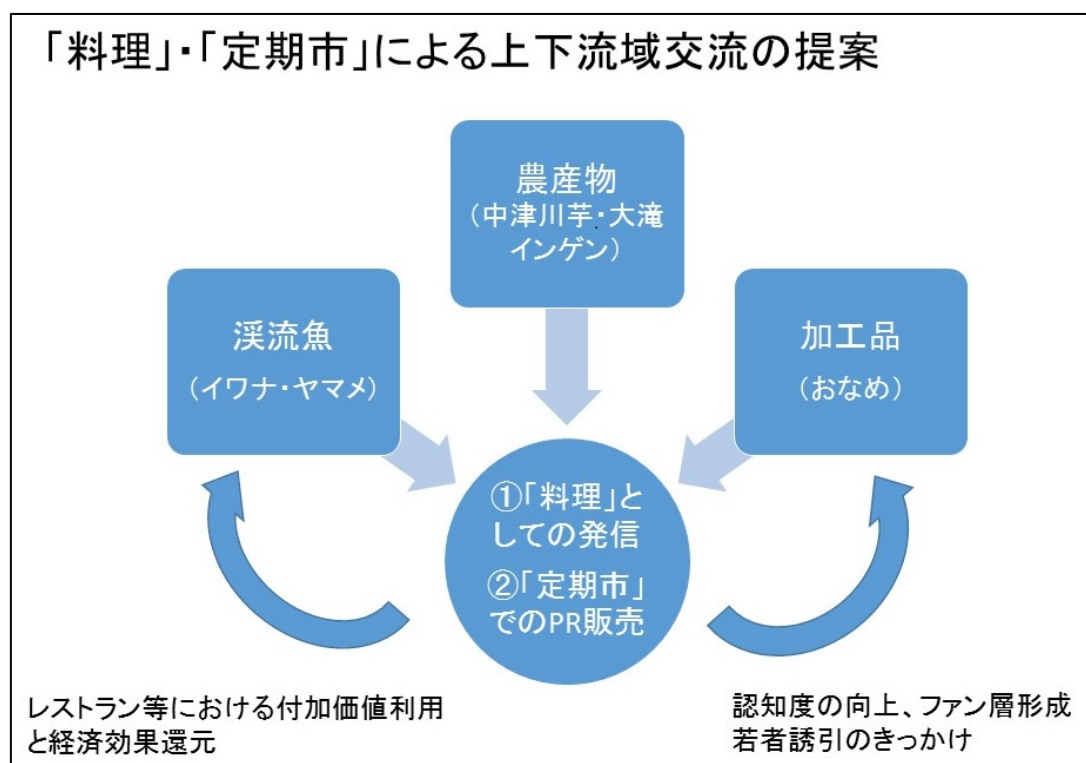
¹ <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0904/jibayasai.html> 2014年3月17日掲載

れるのではないかと考えられる。

②定期市を利用した販売促進

大正大学では、定期的に「朝市」という地方地域の産物を販売するイベントを行っている。こうした都市部の地域商店街に根ざした定期市で秩父市の農産物を売り込むというのも1つの方法ではないかと考える。大滝地区の名産は、下流域の人々にほとんど知られていない現状では定期的な機会を利用したPRは効果が高いと考えられる。

また後継者不足に悩む現状において、下流の都市地域の若者たちとの接点を増やすことは、少しでも後継者となりうる関心のある若者とつながりをつくる上でも有益ではないかと考えられる。



秩父市大滝地区の今まで知られていなかった素晴らしい食文化を基軸にした交流活性化策として、「料理」化によるPRと定期的な市の利用した販売を提案したい。

（３）自然体験 -ありのままの自然に触れて子どもたちの自然の再認識を図る-

1) キャンプ場、林間学校ハイキング、溪流

現在の大滝地区には、民間企業によるキャンプ場がいくつか点在している。夏季のみの営業だが、子どもたちが自然に触れ合える機会の1つとして挙げられる。また林間学校として大滝地区周辺からハイキングをすることといったことが夏季限定ではあるが行われている。

地区内を流れる荒川及びその支流での自然体験については、昔は遊び場として子どもたちが集まっていたが、現在では釣り場としての利用以外はあまりされていないようである。このように子どもの自然体験活動として夏の期間以外には継続的な実施があまりなされて

いない様子も垣間見られる。

一方で、山の地形を利用したバイシクルモトクロス(以後 BMX)やランニングバイクというスポーツが盛んに行われており、幼児から小学生の子どもたちが参加している。広大な自然を有しているという地域の特徴を活かして、従来の発想にとらわれずに、新たなスポーツやアクティビティを含めて、地域の自然利用の可能性を探っていく必要があると考えられる。

2) 険しい自然環境をいかに生かすかー都市住民とのギャップについてー

大滝地区は周りを山々に囲まれ河川が複数流れる自然豊かな場所であり、その自然環境にそった生活や作物などが存在している。このため自然体験をする場所として十分な価値があると考えられるが、一方で都市部と山村における自然観の違いといったギャップ、とりわけ都市住民(子どもたち)が山や河川を利用する際にどのように安全面で配慮するかが課題になるのではないかと考えられる。

本節の執筆担当者(荒田)は都会生まれ都会育ちである。自然が奥深い大滝地区を訪れてみて懸念されることは、単純に自然を重きとした体験プログラムを組んでしまうことにより、都市住民が抱いている自然の規模や体験の度合いの許容量を超えてしまい、かえって敬遠されてしまう可能性があるのではないかということである。

山も川もなく、ビル群の中で生まれ育った人にとっては等間隔に植えられた街路樹や公園にある幾つかの木のこと「自然」であり、自然体験は水族館や動物園といった管理され区切られた安全な場所で「観る」という動作だという程度にしか考えられていないかもしれない。少なくとも筆者はそうであった。一方で大滝地区では、自然は住んでいる環境そのものであり、自然と共生する日常そのものが自然体験と言えよう。

このように都市住民と山村住民では、生活圏や価値観が大きく異なっているため、地域の生の自然や暮らしをそのまま子ども向けの自然体験プログラムを設定しても、あまりの違いから危険と判断される可能性もあるのではないか。大滝地区のような場所に都市の子どもたちを迎えるなら、①自然に対する脅威、②その中で活動するための知識や方法、③自然に対する理解をしてもらう、など都市からの参加者側の目的や知識・スキルに応じた事前の準備学習のようなプログラム設定が不可欠であると考えられる。

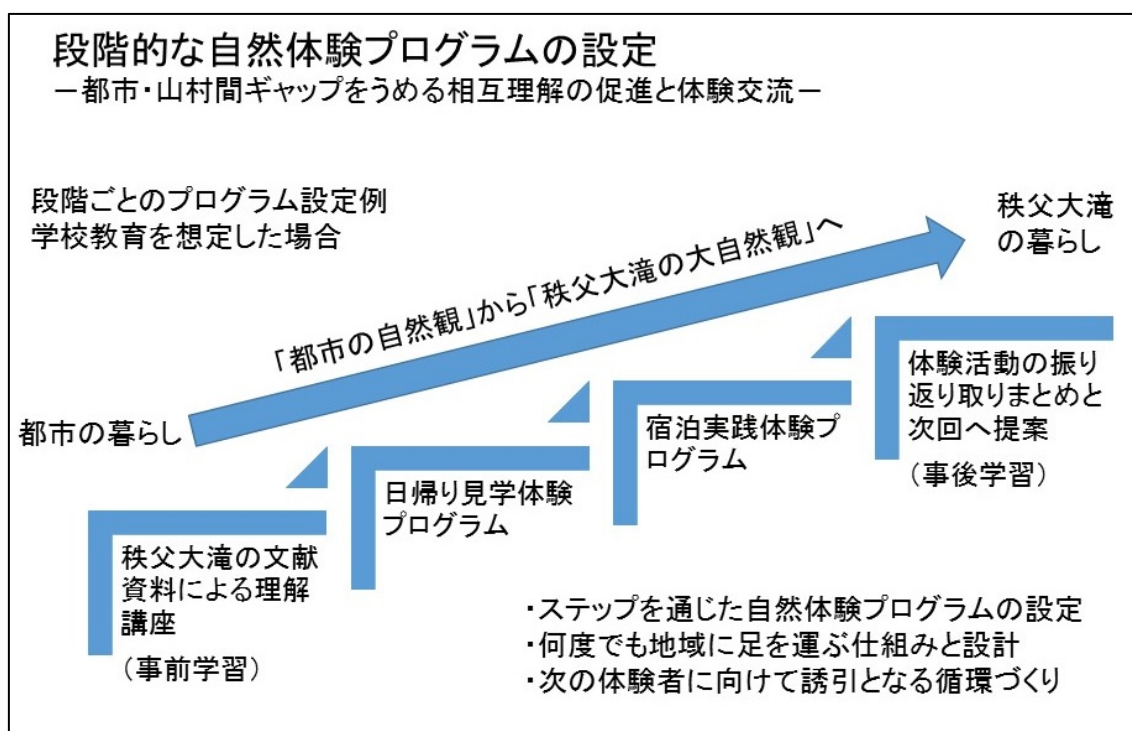
3) 相互理解と段階的な体験プログラムの設計

大滝地区の自然を利用した体験活動事業を立ち上げるとするなら参加者たちとの相互理解を得ながら徐々に実行していくことが重要だと考えられる。

そのための方策として自然体験を段階的に分けて実行するという企画を提案したい。何回かに分けて秩父について学んでいただき、その回数に応じて体験活動の要素を増やすというプログラムを実施していく。この方法によりそれぞれの知識・技術の到達度に応じて抵抗なく体験プログラムに参加してもらうことが可能であり、また目的性を持って何度も地域を訪問することができるようにとなると考えられる。

例えば、都市部の学校教育での利用の場合、子どもたちに、①都市部と大滝の自然の文

献調査、②大滝地区に赴いてどういった自然環境かを見に行く、③実際に宿泊してどのような生活を行っているか体験するというような3段階のステップを踏むことが考えられる。さらにこれらの3プログラムの体験結果を模造紙等にまとめてもらい、次の参加者の参考にするようなかたちでプログラムを継続できるサイクルが組んでいくことなどが考えられる。こうした段階的にリピーターを誘引するプログラム設定を工夫することがポイントだといえる。自然への認識を深めながら継続的に大滝地区へ人の流れを作るような仕組みが求められている。



大滝地区は、自然豊かな山と川を保有していることから、多種多様な体験が行える可能性があり、求められるレベルや需要に合わせることができないのではないか。段階ごとに多様なプログラムを設定することができれば、都市近郊における代表的な自然体験地域として位置付き、上下流域連携・交流の活性化につながるものになるのではと期待される。

(4) 歴史-隠れた歴史を発信し、他地域からの興味関心を引き出すために-

1) ダムの歴史を活かした交流プログラムの可能性

現在、秩父市には二瀬ダム、浦山ダム、滝沢ダム、合角ダムの4つがある。荒川の源流部に建設され、下流である都心部を守っている。このためダム建設にまつわる興味深いさまざまな歴史があるのだが、単にそれを掘り起こすだけでは、地域活性化の事業には繋がりにくいと考えられる。

しかし近年ダムが新たな形で着目されている。例えば、ダム巡りをしてネット上でそれを紹介する、いわゆるダムマニアの活動がある。ネット上の活動はもちろん、写真集や本

を出すなど活動の場を広げている。最近では、ダムの曲を集めた音楽アルバム（CD）が出たり、ダムの日本画を描く女子美術大学生が現れたりなどしている²。

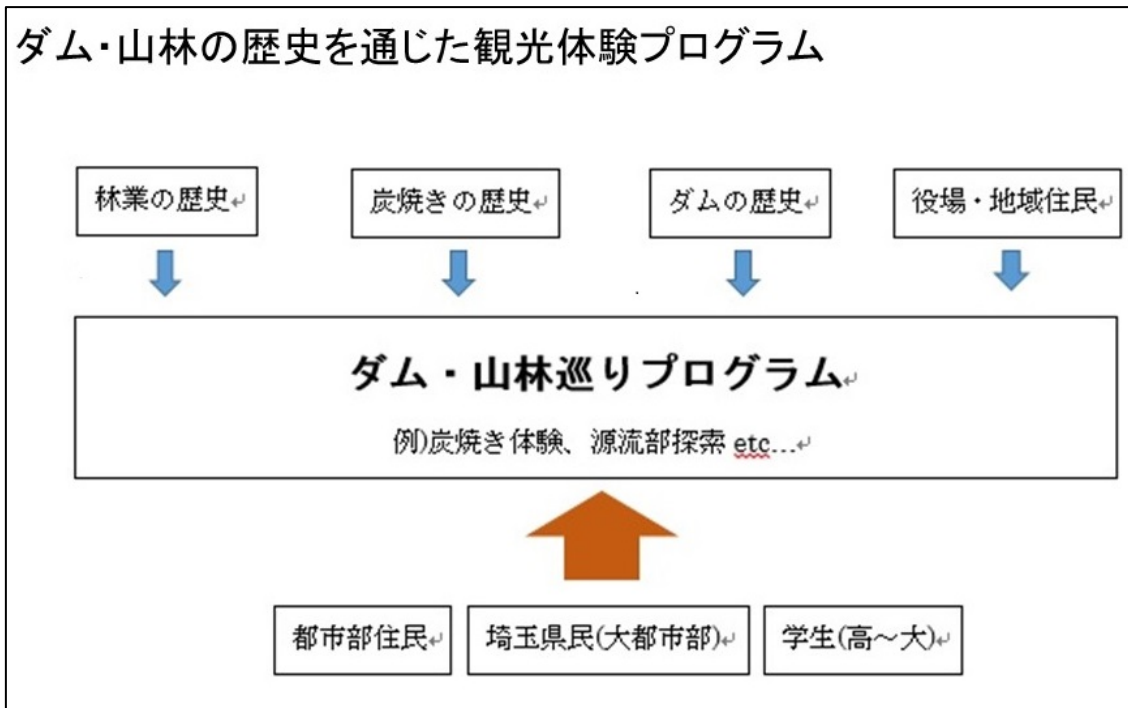
こうした新たなダムの利用方法と合わせながら、ダムの歴史に着目させて、ダムの本来の機能の発信に寄与できるようなプログラムが考えられるのではないかとと思われる。

2) 山林の歴史を利用した交流プログラムの可能性

大滝地区では、主な産業として林業が行われており、伐採した木材は川の流れを利用して東京湾まで運ばれていた。また、江戸時代には伐採などが規制されたが住民のための稼ぎ山として、材木加工などが許されていた。

炭焼きなどを生業としている人も過去にはいたが、その技術を伝えている担い手が少なく、このままでは技術はなくなってしまうことが懸念される。今回、実際に炭焼きをやっていた方に話を聞く事ができなかったため、詳しい歴史を知ることができなかったが、このような技術は代々親から受け継がれているということである。今後は新たな形での技術継承・担い手づくりが求められる。

山林資源がほぼ国有林であるということも重なって、単体では生業とすることが難しいため、観光分野と連携した活用方策も検討すべきではないかと考えられる。例えば山林とダムと併用して、都市部の人々に森や山村の中を見て周り、荒川源流がどのような場所か、ダムがどのような役割を持っているのかを知ることのできるプログラムが考えられるのではないだろうか。



3) 歴史的利用資源の可能性 - 地域伝承などエピソードメイクの手法を取り入れて - その他歴史的資源として栃本関所、大血川の名前の由来などが挙げられる。

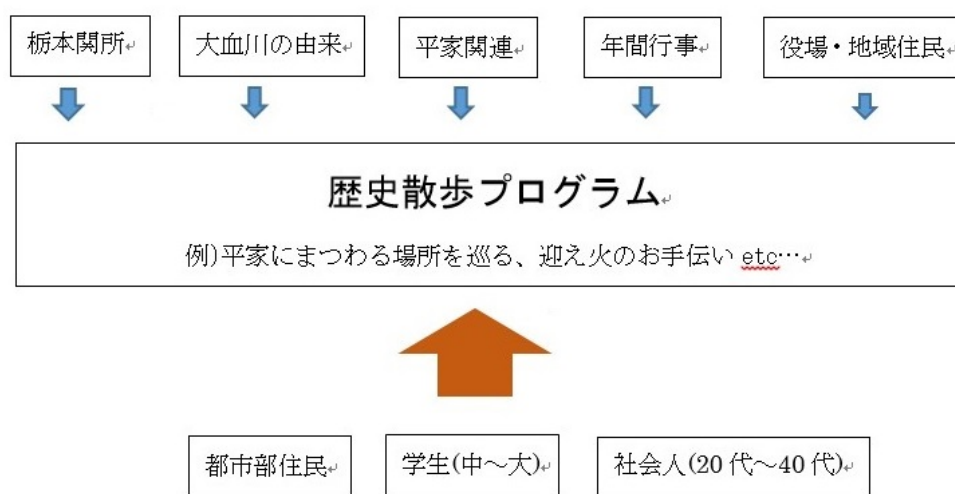
² <http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/Konogoro.cgi?id=293> 2016 年 12 月 4 日閲覧。

栃本関所は、江戸に向かう際の重要な交通の関所となっていた。かつては、平家も通っていたと言われている。現在は個人の所有ということで、観光名所としては活用されていないようであった。

大血川も、平家にまつわる伝説によりつけられた名前のである。そのため、この2つを融合した歴史散歩のようなプログラムを立てることができる可能性がある。したがって、それぞれ資源単体の歴史だけではなく、その周りや当時の様子を踏まえて、ストーリー化させることが重要課題となるのではないだろうか。この点で、エピソードメイク³の手法の導入も有効であると考えられる。

また、現在は栃本関所から近くの畑に向かってろうそくをつける「迎え火」と呼ばれるイベントを行っている。地元の方の話では、とても明かりが綺麗で今後も続けたいとのことだった。このことから、迎え火の活動を都市部の人たちでお手伝いするプログラムも考えられるだろう。加えて、迎え火以外の行事も外の人が関われるものがないか追加で調査をする必要がある。

エピソードメイクの手法を用いた歴史散歩プログラムの設定



5. 総括

(1) 現地調査の所感から

3泊4日という短い期間ではあったが、見たことのない自然や生活環境を自分なりに知ることができた。都内から電車で2時間ほどしか離れていない場所なのに山々に囲まれて水も綺麗な環境が存在しているということに驚いた。大滝地区自体はとても小さな地域だ

³ 地域の歴史を活かして、その地域のブランディングをすること。これらの情報を広く発信することで、研究者や歴史に興味のある人たちを呼び込める可能性も秘めている（専修大学経営学部森本ゼミナール2016）。

ったが、人と人との連携が強くとれており、住民の方々から話を聞くほどこの土地でしか行われていない風習や伝統技術、食文化を知ることができて有意義な4日間になった。他の地域や都市部にはおそらく知られていないものばかりなので、他地域から興味関心を抱いてもらうには十分な力を秘めていると感じた。

(2) 総括と今後の展望

本報告書では、現地調査を踏まえながら、大滝地区の地域資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型に分け、上下流域交流の視点から、それぞれの特徴を活かした活用可能性について検討した。その上で、食文化、自然体験、歴史資源の活用という観点から、上下流域交流プログラムを検討し、いくつかの試案的提案を行った。

全体として見えてくることは、交流プログラム設定のプロセス自体に下流の都市部地域住民がかかわり共に創り上げていくということが大切であるということである。かつて、上流部と下流部は密接な関係があったが、それは一言で言えば人と人とのつながりあいであったといえよう。

今日、都市部と山村のつながりにおいて防災行政といったハード的側面が求められている一方で、山村の人々と都市の人々との人情味豊かな交流も求められている。本報告書で試案として提起した交流プログラムがそうした上下流域交流という新たな「近所付き合いの風景」を創生していくことに寄与することを願っている。

参考文献・資料

専修大学経営学部森本ゼミナール(2016)「大学生、限界集落へ行く『情報システム』による南魚沼市辻又活性化プロジェクト」専修大学出版局

黒沢和義(2011)「山里の記憶1」同時代社

国土交通省関東地方整備局(2016)「荒川水系荒川、入間川、越辺川、小畔側、高麗川及び都幾川について、想定し得る最大規模降雨による洪水浸水想定区域を指定・公表します」記者発表資料

国土交通省河川局河川環境課 2005「上下流域連携促進のための普及啓発支援ツールの検討業務」報告書

1、私にとっての地域との出会いと学び

今回、本書において締め言葉の寄稿させていただくことになりました。私も本書の中で、実習における報告書を書かせていただいております(第1部、第1章)。私は社会教育主事の資格取得を目指していたものの、担当教員である出川真也先生にお会いするまで、社会教育・生涯学習に関することは何一つ知りませんでした。しかし、授業を受けていくうちに、社会教育とは何か、ファシリテーションとは何かなど、生涯学習を行っていく上で重要な知識や手法を学び、学んだことを実際に現地で活かしてみたいと考えるようになりました。

このことがきっかけで地域の皆様のご協力もいただきながら、様々な地域で活動をさせていただきました。本書にある、新潟県粟島浦村、阿賀町室谷地区、埼玉県秩父市大滝地区、東京都豊島区、滋賀県近江八幡市は実際に私も訪問し、学習・実践を行った思い出の場所でもあります。

2、実習・研究報告の総括

簡単に各章を振り返ってみたいと思います。第一部では、「社会教育施設実習」という社会教育主事資格取得のための講義を受講した各学生がそれぞれ自分の興味や関心分野をもとに全国各地の実習先を決定し、意欲的に活動を行い、その活動で学んだことを報告しました。

高橋(第1章)では、地域の自然を利用して社会教育活動を行っているスタッフの動きに着目して実習を行いました。活動の対象者によって、学習支援者としての面と、ファシリテーターとしての面があるということを学んでいます。誰と活動をするかにより、行動やコミュニケーションの仕方を変えるというファシリテーションの実際の方法を体験することができました。また、『ヨソモノ』として住民のニーズをどのように把握していくのか、そのニーズをどのように解決していくのかを実際の人と人との関わりの中から学びました。

鶴岡(第2章)は、親子での視点の違いに軸を置いて実習活動を行いました。都心に住んでいるため自然に触れさせたいという親のニーズと、自然において様々なものに興味関心を持つ子どものニーズ、さらには、興味を持たない子どものニーズがあります。これら多種多様なニーズに寄り添うことには難しさがありバランスとメリハリが重要であるということ、実際に一緒に活動することで発見しました。

眞野(第3章)は、豊島区における主に定年退職者対象となっているエリアガイドボランティア事業の運営側として参加し、彼らが地域と関わりながらどのように活動しているのか、その活動までにはどのような学習が行われているのかなど社会教育活動における学習の仕方の違いを踏まえながら述べています。活動を進める上で最適な学習方法とは何か、個人

学習と集団学習の両方を利用しながら学びを深めている様子を実際に見て、理解をさらに深めています。また、今後課題になるであろう問題にも着目し、粗さが残るものの建設的な解決策を提案している点については、活動に実際に参加したことで考えることができたものであるといえます。

藤井(第4章)は地域活性化において、図書館がまた図書館司書がどう関わりうるのかという観点から実習を行いました。近年では図書館、博物館などが館内業務だけではなく、地域との連携していくことも重要視されています。ここでは、図書館だけではなく、地域の商店や記念館など他の施設との連携・協力の重要さも述べられています。こういった施設間連携は、地域活性の上で必要になってきます。報告書にも述べられていますが、今後の図書館というのは、地域の知的拠点の一つとして町のまとめ役・仲介役としての役割も担っていくことが求められています。

戸澤(第5章)は、定年退職者による地域の環境や文化的資源を活かした学習と地域づくりについて学びました。生涯学習とは、小さな子どもから高齢者まですべての人の学びであったり、趣味や生きがいとなるものなど非常に幅広い領域を含んでいます。この実習を通して、「おやじ」たちによる「生涯学習」がどのようなものであるかを理解することができたと述べられています。

第2部では、出川真也先生を中心に研究活動を行っている3地域についてまとめられています。

新潟県粟島浦村の活動(第1章)については、首都圏との連携や、島内外の人材が関わることでできる新たな生業創出という点をもとに構想したお手伝いプログラムの試行実践について述べています。実践の結果から島の学習資源を真に生かすために島の子どもたちと関わらせていただいた中で、島のおじいちゃんおばあちゃんと子どもたちをつなげていくことを提案しました。

新潟県阿賀町室谷地区での活動(第2章)では、地元の若者と我々大学生が連携してイベントを行えないか模索しました。「ふるさと学習キャンプ」を題材に地域の若者たちの横のつながりを強めて、担い手と地域活性化を実現しようと提案しています。

埼玉県秩父市大滝地区(第3章)は、4人の学生がそれぞれの関心分野から、荒川上流域である大滝と下流域である都市部とどう連携することができるかということを実際に現地に入り、体験を通じて考え、各学生が具体的な連携方法を提示しました。実際の活動にどのようなにつなげることができるかが今後の課題です。

3、学生へのメッセージフィールドワークにおいて忘れてはならないことー

全体を通して述べられていることは、コミュニケーションの大切さと外部者として地元住民とどのように関わることが重要かということです。私はこの2つは繋がっているものだと考えています。コミュニケーションを取ることによって、地元住民の考えがわかってきます。そこを理解したうえで、どのように地域と関わっていくか、どのように住民の皆

さんと活動していくかを考えていくことが重要なのではないのでしょうか。こちら側が一方的に押し付けることは、社会教育でも何でもありません。今回参加した学生にとって、社会教育主事ないしコーディネーター、ファシリテーターの地域や団体のニーズを引き出し、人同士をつなげるという役割の一端を実習を通じて学ぶことができたのではないのでしょうか。

今後、実習等で地域に実際に入って学ぶ際に、先輩方が学んできたことも踏まえながら自らの実習に役立てていただければと思います。

**地域に根差した学びと地域づくり
—新たな参加・実践の在り方を考える—
平成 28 年度生涯学習施設実習・課外研究活動報告**

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

発 行 大正大学社会教育主事課程

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3 - 20 - 1

印 刷 株式会社ティー・マップ

